

續日本歌學全書 第七編

近世名家歌集上卷

東京博文館

佐々木信綱編集

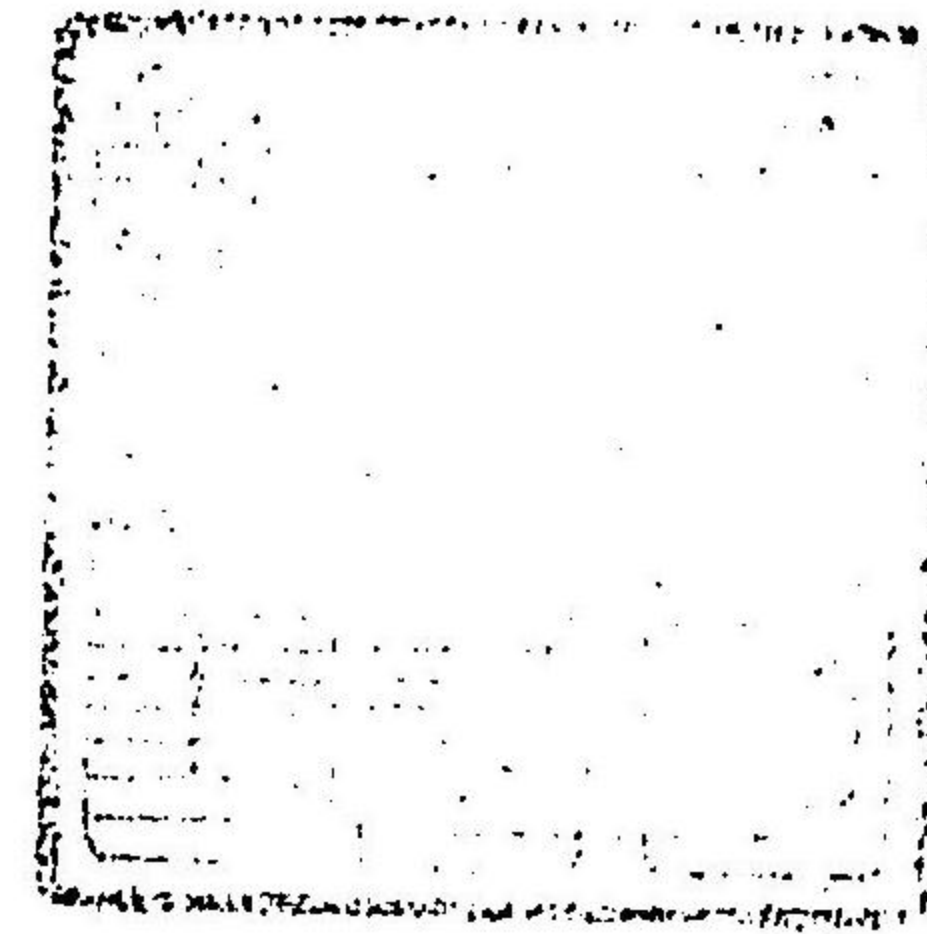
近世名家家集卷

東京 博文館藏版

探



逸



911.108
N6852
S2

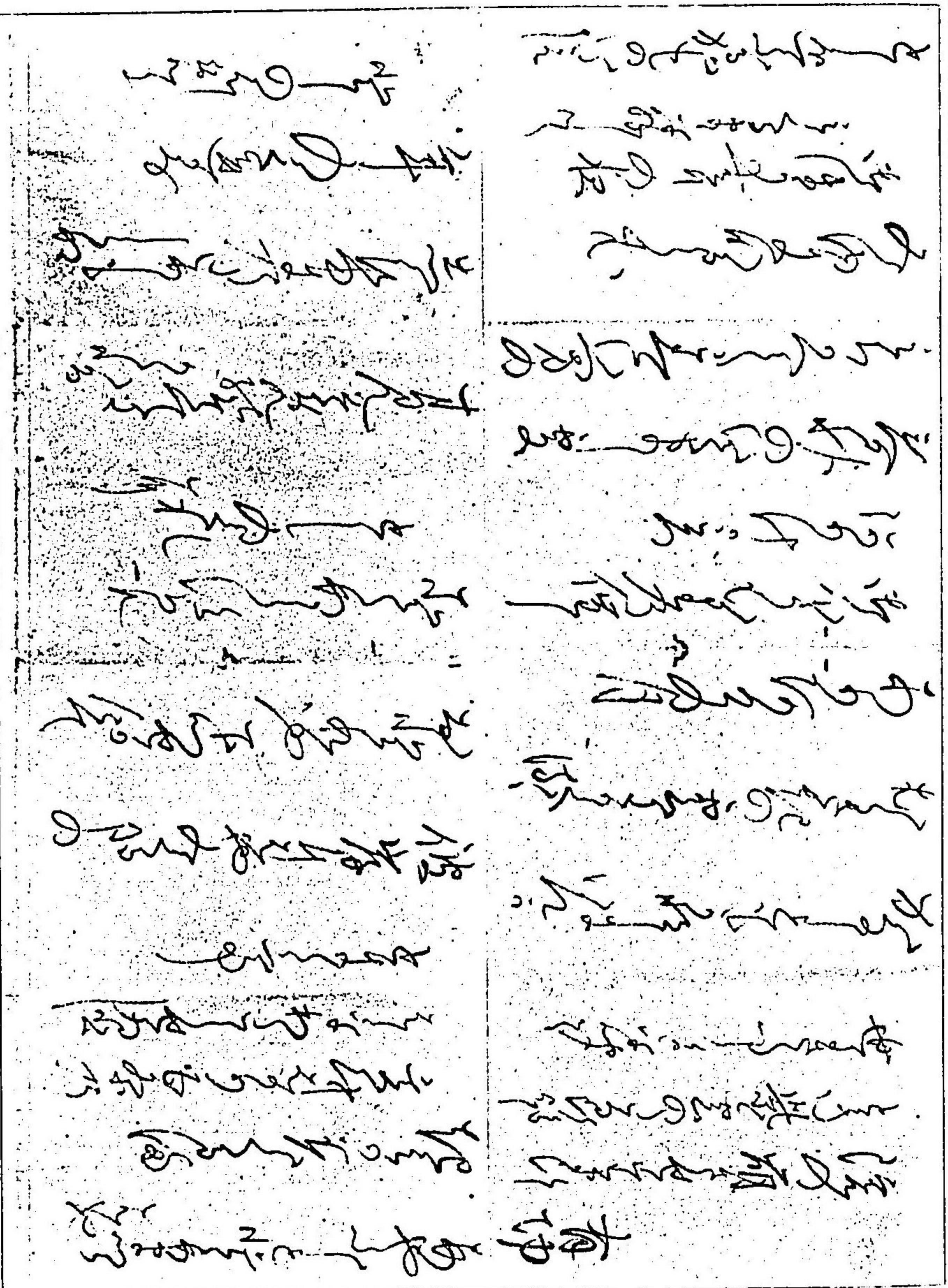
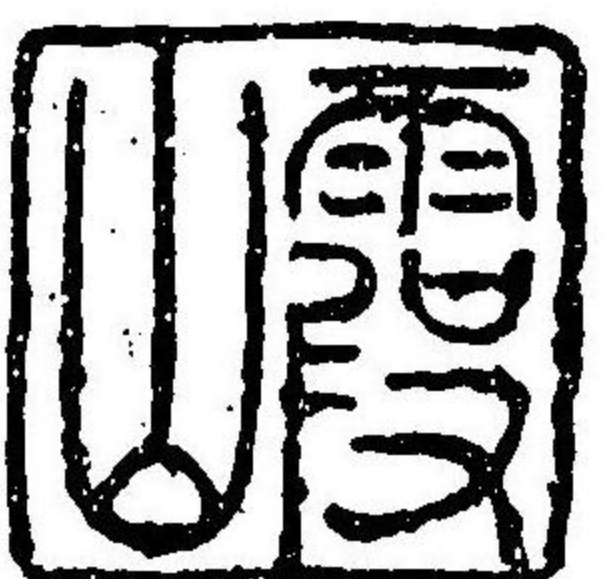
解	千	和	日	天	三	常	わ	柿	同	亮
々	々	枝	枝	降	草	侍	づ	園	々	々
題	舍	漢	の	百	集	ま	詠	拾	遺	稿
集	集	草	枝	言	集	歌	草	遺	稿	稿
千	千	千	千	千	水	加	加	加	木	木
種	種	種	種	種	野	藤	納	納	下	下
有	有	有	有	有	忠	枝	踏	踏	幸	幸
功	功	功	功	功	邦	直	平	平	文	文
一	九	七	九	七	三	三	七	五	一	三
一	九	七	九	七	三	三	七	五	一	三

近世名家集
上卷 目次



251119

家子題



千種有功卿真蹟

千種子爵藏

松平定信朝臣眞蹟

松平定信朝臣眞蹟
のまじりておぼしき
しるしあり

小杉梧邨翁藏

水野忠邦朝臣眞蹟

海龍
水野忠邦朝臣眞蹟
のまじりておぼしき
しるしあり

水野子爵藏

木下幸文評香川景樹翁再評

林陸夫氏藏

田象水

緑のそと門田の井戸は清くもてて種もよく育つ

張

張の志はねむくもふくむをばはるるはしむるもふく

張

あふもをさうしむるはしむるはしむるはしむるはしむる

子眺望

このうらみもあつたはるるはしむるはしむるはしむる

續日本歌學全書第七編

佐々木信綱編

解題

賀茂翁、本居翁、小澤翁、香川翁の全集、そが流をくみし入々、まゝ其時代の歌仙たちの家集歌論等の、既におきを此せつ。あゝあゝ、以上おもきし諸名家の家集を此せむとせ。

千々廻舎集

和漢草

日枝此百枝

千種有功卿の、正三位千種有條卿の男にて、寛政九年十一月誕生、文化四年從五位下に叙せられ、同七年元服昇殿を賜さる。同八年從五位上に、同十二年正五位下、同十三年侍從に任じ、文政元年從四位下、同二年和歌御人數に加へらる。同四年從四位上、同五年左近衛權少將に、同八年正四位下、同十年左近衛權中將に、同十一年從三位、天保三年正三位に叙せらる。嘉永七年八月廿八日世を去られぬ、五十八歳なりき。

卿、年毎小、大井川の鮎釣を物せらるゝ由をきゝて、あゝ人、鮎釣を好ませ給ふやと問ひしに、いぢとよ、鷹の釣を好むわらねど、一年つりえし鮎を、仙洞御所へてまつりしむ、殊ふめでさせ給ひしうべ、そ此頃おしなれば、又も奉らばやとて物まるあり。此川の、古への帝の、春秋此みゆきもありし所と思ふも、といひさして、涙せきあへ給ひざりしとぞ。

此卿の歌の道おたる功の、當時の堂上風をよみやぶられしあり。かの俊成定家の二卿打つゝ歌仙より、歌世家といふ事あり、我もひを我思ふまゝに述ぶべき斯道も、制の詞、つゝとめ、うなどめなどいへる掟をて、思想の自由を束縛せしうべ、北條氏此末の方より元祿のはじめのころ迄の、此道さあから常聞此如くありき。元祿このころ、茂睡、長流、契沖、在滿ら相ついでいで、そを打敗りしうと、其説の民間おれを行はれて、堂上家の猶舊習を改めせ、民間の人々此歌を、地下風とていやしめざりき。かゝる時代とて、朝廷の御會お出むの、點者おねて入門して、其加筆を請ふならはしきまば、有功卿の一條准三宮忠良公に點をこひ、公薨去此後の、飛鳥井家お入門し、まゝ有栖川職仁親王、久世通理卿も入門せられざり。されどこの御所お出せ歌の爲おして、こゝくしおの、景樹、季鷹等お交はり、千蔭も文此往復ありて、全く當時の堂上風を脱せら

れざりき。うれば、後おの冷泉飛鳥井兩家より忌み憚り、禁中此御會も、まれく出仕せられざりしとぞ。

卿の歌を嗜まれし事の、朝おどお手水をせらるゝをりも、筆硯をかへにかきて、顔をふきあがらも、よみ出し歌を書き付けらるゝなど、まへて何事をなすも、歌の心をはなれらざりしとぞ。又、同僚の人々といひ合せ、當座百首、二百首よみ、限時百首等をまぼく催わざと、毎月二三回、こゝ方おて歌會をひらき、執心の人の、貴賤男女をとはせ打つてひて、共お楽しみ共お道をきはめられざりき。又廿一代集を坐右おおきならべて、常おくりひろかつ、風躰の變遷を考へらま、初學の人の教をおお折るの、時代の變遷によく心をつくべしと諭され、又、全き瓦よりの、缺けても玉をよるのよしと示されしとぞ。いつの秋おありけむ、景樹の會おはじめて出席せられしをり、

はゝと原うすざりなびく夕月夜ありぬものとや鹿のなくらむ。

と當座の歌をよみて出されしお、景樹いさくめでて、並おる人々お吹聴せしうべ、かゝる即吟をど、卿の赤面せられしお、歸さる景樹ひそくおいへらく、この御歌の四句、いひまじらるゝをろし。自然と聞ゆるやうよみ給ふべしといひしに、いたく甘心せられしとぞ。まゝ何事おも風流を好まれて、坐敷の床の間お、板井の清水の風景をうつし、其壁の窓に

三日月形をつくりて、夜ふ入まば、壁の裏に行燈をつららるゝが、さながら月此さし入るやうに見えて、風情殊ふをうしかりしと云。又茶事の日あり、待合へ亭主迎へふ出らるゝ時、必き小蓋お歌此題をのせて客ふ出さる。さてかこひふ入りて、亭主炭などあつひ、茶さつるひまふ、客いおのぐとりし題を考へ、茶終りて、會席まであかさつ々出まを法とせられさう。されば歌えらぬ人の、千種卿の茶事ふいえゆらさうしといふ。又久我建通公の母君の家、平野あり。庭の花盛ふ、卿をまねうましむ、卿の馬上ありて、狩衣をつ々袖をくくり、手お焼物の鷹をもちて來られさう。其鷹此背お、いろくくの肴を入れ、目錄を添へて、此鷹を土産お贈られさう。その目錄、

進上

屋形尾鷹

戊年三月花日

狩暮天與

この、たてまつるやうな尾のたり戊戌年やよひの花ふかりくらしてよ、とよむなるべく、かの源順の五月五日菖蒲ふつりて、進上深右葉之菖蒲艸云々と、目錄がさふせられしお習はれしなるべし。さて酒宴酣なる頃、

風流を一寸かりきぬのうはよそひ實にくひらあかゝるはしう
とよみ出られしお、人々皆打興じさうとぞ。

千々廼舎集の、卿此家集あて、安政二年三月の梓行あり。表題お、初篇とまゐるしゝるひ、つぎく世お出さむとてあるべし。千々此舎とい、銀杏の大樹庭おありしをもて、茶席の名をも、まう名づからましとぞ。和漢草の、唐詩選の絶句此意を歌ふうつされしおて、以て公の學力をうらひひうべし。日枝此百枝の、比叡山おつさるくさくを百首あよみ出られし。刊本と寫本とあれど、寫本ののゝ再考とあはしく、まぐれゝるが多うまば、寫本をとりの。又附録お、嵐山卅首高雄山卅首あまど、今のはぶさつ。

猶この三書の外お、ふる鏡とて、古今集の歌の句およりて詠出られしもの二卷あり。まゝ久我建通公、卿此歌の草案を寫し改めて、有功卿集六卷を物し給へり。その中おひ、月百首五辻家おてよままし一日三百首、獨吟千首、物産家山本正儒と日枝の山お採藥お物して草此名をよまれし五十首、赤穂義士の百五十年忌おその像を見てよまれし五十首等あれど、今いえかゝる。

天降言

田安宗武卿の略傳の、第一編解題お此せつ。その集の、文化四年に藤原の直臣のあつめし

中より、まぐれさるうざりを抄出せる。皇國の古へを慕ひて、在滿真淵を召させ給ひし卿ふしあれば、歌はさま、おほむね古へふより、調高く姿秀でふり。

三 草 集

松平定信朝臣の、田安宗武卿の七子ふして、白川北城主松平定邦朝臣の嗣とある。安永四年従五位下ふ叙し上總介と稱せ。天明三年封を繼ぎ、越中守ふ叙し、従四位下ふ進む。同七年老中とあり、侍従ふ任ぜらる。寛政五年其職を免ぜられ、文政六年桑名ふ所領替を命ぜらる。同九年致任して樂翁と稱せ。同十二年五月十六日歿す。年七十二。

朝臣の事績のあまねく人此知る所あれば、あゝふらしつ。歌集の三草集の外、言志集、旅の落葉、風月集、住吉百首、雪月花自歌合卷一等あり。歌の姿やまらうふどりく、あめでさなれば、朝臣の歌を委しくまらむとせる人の、あはせ見るべし。又文政九年、六家集を部類して、獨看和歌集十卷を刊行せられふり。

常 侍 集

水野忠邦朝臣の、唐津城主水野忠光朝臣此第二子あり。寛政六年六月江戸ふ生れ、文化四年従五位下ふ叙し式部少輔ふ任せ。同九年封を襲ひ和泉守と改む。同十四年封を濱松ふ移さる。寺社奉行、大阪城代を経、京都所司代ふ任じ、侍従ふ進み、越前守と改む。ついで

老中ふ任じ、いはゆる天保の改革を行はまらさ。天保十四年九月職を免ぜらる。弘化元年六月再閣老ふ任せ。翌二年二月職をやめらる、九月ふ蟄居を命ぜらる、十一月封を山形ふ移さる。嘉永四年二月十六日卒す。年五十八。

朝臣の、文學の上ふも深く心を盡して、村田春門給儀翁 四弟を聘し、濱松ふ馬文庫を設け、自らも、國政を執りし暇、常ふ詠吟して悶を遣られふり。常侍集前編七巻後編三巻あり。其歌大方の、折ふふれ事ふ當りし作ふして、當時此さまをうらむい得べし。今のそが中より抄出せる。嗣子忠精朝臣も、春門の子春野を師として歌ふ巧あり。若山歌集三巻あり。

わづま歌

加藤枝直翁の、橘氏ふして、諸兄公の裔、古曾部入道能因の後あり。元祿五年十月廿八日伊勢ふ生る。初の名を爲直といひ、通稱を又兵衛と云。若くして江戸ふいで、享保五年ふ與力とあり、町奉行大岡忠相ふ屬せ。常ふ歌詠を好み、吏務の暇さ折も、家ふ歸りての燈下ふ書を讀み、古人を友とし古語を釋す。賀茂翁此江戸ふ出られしふ、うらさ友となりて、翁の宅をこが邸中ふうつし、朝夕ゆさうひ、其教を受々ぬ。七十二歳の時、仕を致し、後の、朝暮ふ歌をもて意とせられしのが、益其妙を究められふり。天明五年八月十九日歿す。年九十四。墓の本所回向院ふあり。歌ふ關せる著書の、子ふ興ふる書、答俊仍書

等あり。東歌の、八十余歳此あり、自ら撰びて、六卷とせられしを、此ち子千蔭翁の刊行せらましあり。今いそが中より、まぐれざるをぬき出つるにあり。

・ 柿園詠草

柿園詠草拾遺

加納諸平翁の、遠江白須賀驛の人、鈴屋門此巨壁夏目麿齋翁の長子あり。幼名を兄瓶といひ、後長樹、又諸平と改む。通稱の兵部、柿園と號す。幼あして紀州に遊び、藤垣内翁此門に入り、長じて紀藩加納氏の養子とありぬ。文化九年當時の歌人の作を撰びて、鏡玉集を編出し、相次ぎて梓行し、終に八編に至りぬ。天保二年藩命を奉じて、紀伊續風土記を撰す。全四年特に和學を以て奉務せべき藩命を承く。全六年紀州名所圖繪を、新に編撰すべき藩命を受く。弘化二年更に紀州名所圖繪後編撰出の藩命あり。嘉永四年七月、紀州名所圖繪後篇全く成れるを以て、銀若干を與へらる。安政三年、翁此建議をいれて、始て國學所を置き、翁を此總裁となす。全五年六月歿す、年五十三。著書の、古今集真字序解、會丹集摘草をはじめ數種あり。歌の縣居翁の遺風をつぎて、更み自在をいはめらまあり。柿園詠草二卷の、嘉永六年此刊行、拾遺一卷の、飯田年平、瀬見善水、佐々木春夫、足立正聲氏等の盡力ありて、明治十八年此刊行せられぬ。まゝ新貞老氏此柿園詠草故萃傍註一卷

あり。そが中か、飯田氏の諸平翁のもとに在し程、翁より聞傳へられし歌ありて、摺巻に載せられしと語句のたがへるをあまあり。今これを小字ふてかゝへおまゐるしあきつ。

亮々遺稿

木下幸文の、備中淺口郡長尾村の人、通稱を民藏、初の名を義質といふ。朝三亭まゝ亮々舎と號す。歌の傍、詩と畫とをよくし、畫の鉏路雲泉此弟子なり。又禪を誠拙和尚に學ぶ。文政四年十一月二日浪華して身まうりぬ。年四十三。幸文はじめ歌を澄月慈延等小學び、のち桂園の門に入り、直好、雙雄等と並べ稱へられぬ。著書の、亮々遺稿三卷のはうあり、亮々草紙といへる隨筆三卷あり。

附言

はじめのせし眞蹟四葉此うち、第一あるは千種子爵の所藏ありて、有功卿詠草の内の一ひら、第二ある短冊二葉の、小杉翁と水野子爵との所藏あり、第三の、諸平翁より當時江戸ありし本居豊頼翁と與へられし消息あり。其全文をあぐれば、

虫のたれぎぬのこと蛇のぬけがらにあらざる事ハ京傳此骨董集に辨あり然れども虫を拂ふ爲にてもこれなくお此事源氏枕草子頃までのものにも見當らず定家卿の明月記にムシガサ其他源平以降のものにもあり彼京傳諸書を引たれども其他に舊本今昔物語語明

月記八雲御抄等にも見えて笠にふれたるきぬをむしといひ絹と笠と合せてむし笠とい
 るなり何故にむしといふか其義の知らせ今能登國人手のむしをかぶるをむしといへる
 もこれよりいでる詞なるべし蒸ムスやうのこと歟それもおぼつかなし義のともかくも婦
 人の旅行にさる笠にて顔の見えぬやうにするもの之婦人の馬上おて此きぬたまたる圖
 粉河縁起道成寺縁起圖等にもあり又西行の歌にむしたれ板とよめるもあり是は別に考
 わりて書とり置いへども長々れば申略し源氏物語頃のつばさうぞく市女笠などより轉
 して華美になれるものならんと存し考書しておき申し事之○高芝竹芝竹芝のさらしな
 日記に見えたり之れども必今此地にあたるか詳ならず百枝歌の今の俗様によれるな
 るべし彼地はたして古の竹芝といふ證ある歟竹取物語をさうとり物語ともいへばいと
 近くかよふ詞なり○枕草子校異大半出來致居何ぞめづらしき古本のなき歟穿鑿人わ
 らば御聞可被下以上 十一月八日夜認

第四の、三月晦日臨時五十首の原稿のうちみて、歌の筆者の斧木、評の幸文の自筆、再
 評の景樹翁の自筆なり。あは林陸夫氏の所藏なり。

千々廻屋集

千種有功

春部

立 春 霞むらむ神路の山も玄のばれてかしこ所此けさのはるかな
 打はへてやはらぐ春あなりにけり天地人のみつ此まごころ

都 立 春 く老人のふく笛のねも鶯もどもによしの、はるや告ぐらむ

八 日 立 春 青馬をみはしの木末かすみけり若菜つむ野も春やたつらむ

初 春 風 青柳のいどのもとにや宿るらむこほり哉とさし春のはつ風

初 春 松 鶯もことのはそへてみよし野の玉松がえのはしきはるかな

名 所 初 春 鳥がなくあづまの空をけさ見ればふじの高ねに春風を吹く

初 春 見 鶴 ちよ呼ばふたづがね高し初春のまつの色なる大ぞらにして

海 邊 初 春 大にえ此腹赤つりつゝ八汐路のやすきにはこる春の浦びと

早 春 柳 春のたつ野への柳のいと見ればみやび心もなびさそめけり

早春興 都びとせう菜つむなり浦此あまも海松ひきつ貝ひろふらし
 貴賤迎春 賤しきもよきも春こそえられけれ風流さとびの道を隔てせ
 陽春布徳 はな鳥に世のやはらぎて天地の神もたのしむ春やきぬらむ
 春生人意中 あしうびのもゆると見えし神代より心あきさす春の替らむ
 春情處々多 人のみな花の心あなりけり雪もこほりもさもあらばわれ
 瀧音知春 山もとに鶯なきて水無瀬がはまたゆく水もこゑたてつなり
 春日望山 おとはやま鶯あらぬ瀧つせもこゝろとけさる聲此きこゆる
 雪こほり流るゝ春のときつげて鼓うつなりやまのたきつせ
 都びと春のみるめにかりてけり小汐の山此みねのまつばら

春のあした山を見て
 青柳のかづらき山をはる見れば我さへるみの眉ひらけつゝ
 毎山有春 まゆびきの横山つゝき霞みけり春のよそほひ色あどにして
 風光日々新 峯になびく霞此衣あすの又さくらがさねにならむとすらむ
 春色浮水 ゆきとけてま清水はしる瀧川のするにうかぶ霞なりけり

山ぼとの色になりけり石清水をのへの春の影うつらむ
 花りふちて少女もくゆや堀川の芹根の清水いろまさりけり
 庭鞠のひいきも春になりけり花うぐひすの色ねのみかひ
 萬物感陽和 鳥羽山も伏見の里もかすみけり松と竹どのはるをくらべて
 松竹増春色 いざくまむ瓶にさしたる初花のわか木のうめを薬子にして
 心酔酌春酒 さのふまで水のえめしを山田をはるにまかせる水の聲かな
 春消田地 世のなべて氷とくらし水上のおほうちやまに春かぜぞふく
 東風解氷 春風春水一時來

水上のたかねの雪もけふとけて清たきがはに春かぜぞふく
 東風暖入簾 こやの池も氷うちとけてあしの屋の簾動かすはるのはつ風
 若菜 春のたつあしたの原の若菜こそたのしきをつむ始なりけれ
 かすゞ野の神のたまへる初若菜わがつみたりと思ひける哉
 雪中若菜 雪ながらかたみにつめる初若菜ふかき心をたれに見せまし
 多春摘若菜 はしよかの鈴菜つむにも狩衣さつゝいくらの春をへぬらむ
 子日 はるくゝと緑に霞む小松原千代をかけてぞ見るべかりける

折 梅 山里にたちうかりしの家づとの梅ひと枝によりてなりけり
 月 前 梅 妹がすむ垣根の梅にたちよればつきの臙夜よなかりけり
 梅 薫 袖 錦とてないうらやまむ此頃の麻のたもどもにはふうめが香
 山 家 梅 開 はるをえる梅一枝にやまかげのいほの唇もひらけそめけり
 行 路 梅 みちのべの梅ささふけり鶯も枝くひもちてゆかむとやする
 社 頭 梅 神垣にたちくちさむも畏さにとゞめがはふる薫るうめが枝
 名 所 梅 みよし野のまぶ雪深し初瀬路此うめの盛に目をかさねてむ
 梅 交 松 芳 たがまめし小松が原ぞさく梅の香さへなびきて春風のふく
 紅 梅 三千年のもゝ色ふこそささふけたが種まきし梅の花ぞも
 柳 ふる年の雪のうちよりひきそめて花ふかゝれる青柳のいと
 池 玉の緒により合せつゝ見てしがな長きはるひの青柳此いと
 柳 有 春 色 いけ水にうつる柳のおもかげの底にえられぬ玉藻なりけり
 門 柳 小車もひく日ありけり山里のまぼの門なるあをやぎのいと

門 柳 春 久 春の日のひまゆく駒もつなぐらむ老せぬかどの青やぎの糸
 若 草 もゆそめて花なき薫それをしも摘てやゆかむ春のすさびに
 萍 始 生 時はいま花のまさかり浮草の浮ぶてゝるも汲みえられけり
 早 荷 詣 さそはれし水の残るかさもなし今いと浮ぶみづのうさくさ
 春 臙 さ臙のうれしき物といひしより年にかはらぬ賤がやまづと
 春 月 なぐらへば又いかばかり霞みなむ老のはじめの春の夜の月
 春 月 夕鞠のおどの音せまなりしよりやなぎあかゝる春のよの月
 海 邊 春 月 おほかたの霞まぬ程も霞みけり梅さくさどの春の夜のつき
 江 春 月 大原の里にありてふ水の名を空にかきめし夜半のつきかな
 幽 居 春 月 いとゞしく霞みにけりな遠つあふみ濱名の橋の春の夜の月
 春 曉 月 夕汐にかすみやよせし浪花江のつきの臙になりまさりけり
 春 曉 月 梅が香にうづもれてすむ我庵におぼろ月夜の名の立ぬめり
 春 曉 月 花おぬるたが手枕おにはふらむ吉野此かくのありあけの月

春 曙 宵のみを價たふとく見し人の此わけぼのをえらぬなりけり
 鶯のねぐらながらの一聲におきいでて見れば春のわけぼの
 名所春曙 わまれめや片野の花もかつみゆる淀のわたりの春の明ぼ此
 春 雨 花もまぶにははぬ春の雨づつみげに徒然の物にぞわりける
 霞みつゝふる春雨のおどさきも枝もこもれる花のえらむ
 あまの川とくる氷のえたりやあちてのどけき春雨のそら
 旅 春 雨 家にありてつれづれからむ夫より旅こそまされ春雨の空
 春日 遅 わが宿の松此木蔭にゐるたづの眠もながきはる月なるかな
 春 遊 若鮎つり櫻かさせどおほむがは筏のくれのえられざりけり
 遊 絲 こまつひくころより遊ぶ糸ゆふ此色もひさしき緑なるらむ
 春 駒 雲井にもかけらむとこそ思ふらめふじの裾野の春のわか駒
 みちのくの安達のま弓春くれればいさみに勇む牧のわかこま
 よもすがらたちまふ袖に花ちりて歸さぬ雪の山路なりけり
 石清水臨時祭 秋ざりのたゝやがてと天つ雁かきみの底に思ひおくらむ
 歸 雁 世中のあたなる花になれじとや心ざかくもかりぬらむ

歸 雁 似字 年をふる其いしぶみのきやくに見てぞ歸る天つ雁がね
 曉 歸 雁 東路のかすみの關のわけ方に名のりをえつゝ雁ぞゆくなる
 野 遊 瓢よりかすみをくめば春の野の雲雀たちまひて面白の日や
 遊 ぶ糸の遊び餘りておもはば夏野の野へおもかゝるべき哉
 梨 花 片枝みて年をへにけり中垣にさくやどなりのつまなしの花
 櫻 ささらぎの雪の長閑につもりけり尾上のさくら盛なるらむ
 我國のみつのたうらにいくさをそへてあふぐの櫻なりけり
 ちよろづの世々に句へど櫻花わけりといまざいふ人のなき
 糸 櫻 のどかなる春の日影の糸さくら人をまつおも咲かゝりけり
 かくてしも猶よにかをる糸櫻いくその人かこゝろひくらむ
 年よりて苦むままでになりながらちるをわすれぬ花櫻かな
 老木の櫻を ひさかたの天つ空ふく風の上にこどもさける山ざくら哉
 花 うつせみの世の常なれよ三吉野の吉野の櫻あくまでも見む
 山ざくら紀の川かけてさきおけり芳野をはなの水上にして
 あはれく我に千年の命あらばゆづらまほしき花ざくら哉

長等山たゞながらへてみむと思ふ花こそ人のいのち也けれ
 いたづらにひとあくがらま櫻花いとふ心になりにてしがな
 山遠きみやこの街やちまたにくものかりぬる花ざかりかな
 ひとせの夢のたゞちに花盛ちりしものとも覺えざりけり
 春寒花較遅 小車のさすかゝさしてこしうどもまだ山寒み花にはは
 待 花 さくら花またじと思へば鳥奇きて霞たなびく野のべ山のべ
 嵐山に花栽栽る 櫻ばなまつにながめ此深ければ物やおもふと人の見るらむ

花 始 開 今よりの春の心ややまからむ花のあらしにまかせはてゝさ
 わさ窓にひらけし花の顔みればやよと聲をもかけつべき哉
 見 花 ささそめし初花よりも嬉しきいさのふのあめの心なりけり
 さらちねの親の諫もなかりけり花の日敷をうつすばかりの
 心 静 見 花 鶯のこゑよりほかに音もせで花にすみゆくわがこゝろかな
 花 盛 ちらせてもかつのみばやと思ふこそ盛にあかぬ心なりけれ
 けふも猶盛なりける花のもどにあやなや蝶此ちるとまがふる

花のころ 此春もこゝろ静おとこもひしを四方に櫻のかどぞきこゆる
 花時鞍馬多 大原の花にいなゝく聲すなり我のるこまのやせとほるころ
 依 花 客 來 わづさ弓ひさみひかずみよりくるや春の彌生の花の下かけ
 櫻ばなにはふ時のみくる人のこゝろや蝶のこゝろなるらむ
 折 花 やま鳥の尾上の櫻をりどればひとむら雲をそでにかゝれる
 夕 花 家人のまつらむものをいかいせむ花の夕ばえの色増りゆく
 曙 花 忘れめやあらしの山の杉の庵おねてあけぼのゝはなの匂の
 月 前 花 おもしろき朧月夜にあくがれて盡みし花のかげをとふかな
 月 前 折 花 春の夜のねぶるさまなる月影にをりかすめけり花の一えだ
 山 家 花 山里に友まのぼしくなりぬる軒ぼのはなや人をまつらむ
 よばなれて静にすめる山さとの花しも人をあくがらすかな
 古 寺 花 寂莫のいはの室戸にたれ見よと高野此おくの花はさくららむ
 社 頭 花 老めの中のかしこけれども唐衣かたしきぬべき花ざかり哉
 故 郷 花 いにしへの奈良の都のさくら花唐人さへやをりかざしけむ
 松 間 花 むら松のかげのあらしの宿なるをうばひて見ゆる花盛かな

森 花 花にたぐかけしと見れば此森の神のみ鈴のひくなりけり
 遠山花 山松の木間にかゝる春の雲はなかりけりと見しひがめか
 深山花 よをいとふ種とこそなれ花にきてと山になるはるの心の
 海邊花 わさつみの渚の櫻さきにけり龍のみやびとかざしをるらし
 嵐山花 きて見れば松も花なるあらし山さくらをのみと何思ひけむ
 渡 花 嵐やま花のさかりにきて見れば敷ふるばかり松のありけり
 川 花 さくら花匂へる岸にわたし舟これみみのりの外とやのみる
 野 花 櫻さく天のうはらに舟させば歸るかた野のえられざりけり
 花下忘歸 花 けふの只櫻がりにとこしものをかたのゝみ野あさじの驚く
 花有 情 花のものとに歸るをえらぬ物忘さ此み老ぬる身にあらねど
 花下言志 花 むれてくる人めをいとふ山櫻ちるも残るもこゝろわりけり
 花多春友 花 さき匂ふ花をみ花にみられつゝあはれ幾その春うへぬらむ
 滋賀山越 花 わが宿のわか木の櫻さきにけり幾はるくゝの末此世も見む
 春とどにこえくる人を命にてさきわたるらむ志賀の花ぞの

花の盛に山里をとよ

花の散るを見し

いづこにか駒のつながむ山里のこぶちのなべて櫻なりけり
 つらしども面白しども覺ゆるの花にかぜたつ春のゆふぐれ
 殿の内ひひな遊此けふの日にもる人なしと花やちるらむ
 彌生に花ちる 花 よしさらば心なき身になりてみむ惜めば花もちる世也けり
 落 花 おもしろき朧月夜の月影に花もうりれてちるおやあるらむ
 月前落花 花 ふきおろす峯の嵐のはと見えて裾野の原にちるさくらかな
 山 落 花 風たゝぬ磯べの花もちりにけりさくら鯛ひく蟹のとよみに
 海邊落花 花 仙人の桃のえづくやおちて世にくむさかづきの流なるらむ
 曲 水 宴 花 みやのうちけふ盃のめぐり水するの流をいざやくまゝし
 上 巳 花 よのうさもえらぬ巳の日の桃の陰柳のもとに千年へなまし
 紙雛のかたに 花 桃柳よきたぐひなる陰みれば同じにはひにゑみかはしつゝ
 桃 花 妹とせの千代をくらぶど見ゆる哉彌生のけふのはなの薙に
 あしひきの遠仙人のたはやめのかざしの花をうゑて見る哉

桃の盛に人をとひて

雉 子 さくら花をりかざしつゝ神樂岡夕おほくればさす鳴く也
 雲 雀 大空のかすみばかりの春ならむあがる雲雀の聲なかりせば
 燕 幾度かあがる雲雀にあくがれてつめる若菜のたまたざりけり
 燕 山里のわしの玄のやふ假そめの住處ともなきつばくらめ哉
 来 賤がやになるゝ燕の子やす貝かひある春となきかはすらむ
 人いさ残る古巢をわもれねばわれしさとあも燕さあけり
 蛙 蛙 いそのかみふるの山田も水見はて春にかへる此聲たてつ也
 夕 苗 河のべの苗代ぐみも色づきてにはふ夕日にははづなくなり
 代 蛙 ひきかけし苗代みづのわか緑やがてやせの色にまむらむ
 苗 代 苗代の水くちまつりまめはへて賤がこゝろの春やさぬらむ
 杜 若 思ひしにたがはざりけり杜若かやが軒端をつばめとふころ

躑 躑 つくくと思へばねたし杜若人をよせじの名にこそありけれ
 山 吹 さもこそい春くれなるに陸奥のつゝじが岡もさき渡るらめ
 折 山 吹 いにしへの井手の下帯めぐりあひてみる心地する山吹の花
 河 山 吹 梅さくらちりし垣根の山吹にうつろふ春のいろを見るがな
 瀧 邊 山 吹 妹とわがかざしばかりゆるるされて二枝をりぬ山吹のはな
 里 山 吹 玄ば舟にちりかゝりてぞ咲にけるうち川べの山ぶきの花
 菜 吹 鮎はしる吉野の川の瀧つせにながれもあへぬ山ぶきのはな
 山 城 の い は 田 の 小 野 の 朝 露 に 袖 の ま か せ て ま み れ つ み け り
 霞 たち 日 も な が 岡 の つ ぼ ぞ み れ つ め ど も わ か せ 今 一 夜 ね む
 い かに せむ野べの假寐ならばぬを岩田の望つみ残しつる
 藤 浪 の 松 の こ と ば に か へ る べ さ ち ぎ り 久 し き た め し 也 け り
 たち よ ら ば 老 や か く れ む 元 結 の い る に も は 藤 な み の 花
 玄 ば 人 の ま 柴 ゆ なる か く 山 此 藤 の か づ ら も 花 さ さ け け り
 藤 浪 の 花 の かけ は し かけ て け り さ そ の 山 も 春 や ゆ くら む

松 藤 かげたのむ松のありとも行く春をといめてにはへ藤浪の花
 松ながらいで一枝とたちよればはるかに匂ふ藤なみのはな
 池 藤 むらさきの變らぬ色か池みづにぬれて日をふる藤波のはな
 惜春不 山ぶきの花此まがらみかたれど井手にも春いとまらざりけり
 暮 春 あづさ弓春の末野とありにけり物うぐひすの聲ばかりして
 暮 春 みよし野の高ねの櫻はるくれて誠のくもゝあらはれにけり
 山家暮 春 こゝにしも春の心やとめざらむわが山吹のはなちりにけり
 川 暮 春 高瀬川かきみたなびきこし春もつながぬ舟とされる頃かな
 三月 盡 けふにこそ驚かれつれ春の日のながきをこのむ心ゆるびの
 三月 盡 夜 今日のみ春の夢さへさめにけりよの曉おなりやまつらむ
 春 雲 いく度か花のあだ名をたてつらむ吉野此山の春のまらくも
 春 風 花にいとひ柳にいまさまたるゝもわりなき風の習なりけり
 春 木 櫻ばなさくはるゝに思はなむまつにならべてうゑし心を
 春 鳥 やぶかげ此椿あまたにちりしけりあや鶉のまわざなるらむ
 春 鶴 あしたづの心のつねに春なれど春また更にのとけかるらむ

春 獸 かまの葉の緑になりぬけたが崎みやの兎もはるをまゐらむ
 春 龜 釣たるゝよさ此海づら霞みけりむかしの龜もまゝ浮ぶらむ
 春 川 さくら花ちりくる時わが門のいさゝ小川も波ぞたちける
 春 海 水鳥のうさね忘れてみつる哉むしあけの追門の春の明ぼの
 春 浦 かひ捨ふ少女が袖の浦みればおきあもかすむ朱のそぼふぬ
 春 松 春の日のおがるの浦を見渡せば手枕をせるまつもありけり
 春 山 けさ見れば霞のそこに浮ぶなりかもの羽色の春のむらやま
 春 野 鈴菜さく春おひなりぬけふもどひあまもこてふの野べに遊ばむ
 春 里 うちかすむ有明此月に雁なきてあはれぞ深きみよしのゝ里
 春 市 歌がきのむかしのとほさ椿市の霞にこもるうぐひすのこゑ
 春 社 八重垣のむかしのまゝに霞むらし出雲此みやの春の明ぼの
 春 硯 てならせものどけき春のさが硯こどぼの花やこれお求めむ
 春 扇 櫻ばなはやもさかなむ我妹子がかざしの扇ひらくばかりに
 春 蕙 こゝの岡かしの野べの若草の綾の蕙もまかじとぞおもふ
 春 衣 すみの江の松の緑のはるいさぬはにわ句はせ妹がころもを

春 車 はるの野のまだ遠けれど大顔の車ぞまるときはなのまたかけ
 春 聲 氷ゐてまいたなりつる山寺此かけひの水もけさきこゆなり
 春 興 をとめらがつくにひ鞠も筑波山まき惠のなかふかぞへむ
 春 祝 梅がえに鶯なきてひといみなるみかたまける宿のはるかな
 わさづく日霞める空をどぶ鶴のさもはるかなる君がみよ哉

夏 部

首 夏 二荒やまみてぐら使けさたちてはやくも夏になりける哉
 名所首夏 飛鳥井のそくさもはらへ都人やどりどるべき夏もきにけり
 竹亭夏來 なつひさぬ軒端の塵も拂はまし生ひたちのぼる竹の子の爲
 初夏晚來雨 ゆふまめりすいしきあめの時鳥まの心あもかゝりそめけり
 更 衣 ぬぎすて、猶かへりみる心もやふるさ衣のまみとなるらむ
 契ありてかどり少女のかりし衣又みになる、夏もきにけり
 露旅更衣 かさつばた見し八橋も早すぎてなつの衣をさぬるけふかな
 遅 櫻 夏山のあを葉がかけに忍びつゝ我やまちけむおそさくら花

牡丹 夢にだにみぬもろこしの顔よ人もかけにはふ深見草かな
 牡丹を見て宵柏の昔を思ひいでて
 たび衣きそぢの花此のこるらむみてぐら使かざしてもゆけ

芍薬 を なにも似ぬ色香なりけりえびま草都になれて年やへぬらむ
 新 樹 あをやぎの糸の心もひきかへて若葉をむすぶ夏ひきにけり
 神樂岡みどりの雲の八重たつひ椎のこやてや生まげらむ
 かの岡に水枝さしおほふならの陰みづ驟ともなりぬべら也
 新 竹 ことし生ひ殊にいづくし竹取の翁もかくやうれしかりけむ
 かげ高みわが百年の杖としもたのみそめけり園のわかたけ
 新 竹 箒のまいたしきふしぞそはりけるあしたの露によひの月かげ
 今さらに雪ふらめやと卯木垣思ひけちてもけたれざりけり
 卯 花 はとゝぎすくべき宵なりてる月のかげさへ見ゆる庭の卯花
 禁中卯花 九重のうの花がさねたちよればわが浅沓をうづむまらゆき
 山家卯花 やま里のこのりの雪と猶見えてうの花さむき朝ぼらけかな

卯花の垣根ある家

諸共にすまむといはいかならむよをうの花の垣根まめたる
かつみても清くすいしき葵草こゝろに種をまくよしもがな

葵 涼しげにかざしてけりな葵草深きいはれゝるもまらぬも

山 よの中の塵にもけふの交はりてげに神山のあふひぐさかな

郭 公 時鳥ひとこゑさし夕べより耳やまからぬ身となりけり

くれの雨あかつきづきに時鳥ふた聲さし夜はもありけり

ひとこゑのやま時鳥あはやとていづれが袖にかゝるむら雨

さぶかにと誰かいふらむ子規たどるばかりぞあはれ也ける

いとはやも今年いさゝつ時鳥こぞのうらみや空にまけむ

鶯のいおし谷よりいでてこぼこどつてをなけ山はとゞま

子規はなさちばなになきすてゝやがて昔となれるこゑかな

待 子 規 時鳥まつにたゆむなものゝふの弓はり月の波のめきにけり

まとむしてまつよにまらぬ子規つらき我に限らざりけり

時鳥赤にへどてゝとはざらむ月の松にもさはるものから

與女待郭公 こゝろみに妹とまでとも子規なほうちとくる聲のきこえぬ

尋 郭 公 時鳥はつねたづねて山さとの麥のかり庵にひと夜ぬにけり

時鳥を尋ねて歸る道に聞くといふことを

家に来て何を語らむのなまきにや心よわりし山はとゞま

人傳郭公 はとゞます人傳ながらさゝそめて餘波あり明の月を見る哉

ひと傳の覺束なさをほとゞまを雲井にはらす一こゑもがな

郭公一聲 ひさかたの月にくらべて時鳥さむなき玉のひとこゑぞなく

初瀬寺いくよこもれる明がたに一聲さしはとゞますかな

卯月子規 かみ山になけ時鳥みやびどの馬もくるまもかへまばかりに

若葉さす糸のりの夕づくよ千鳥にゝあらじ今のひとこゑ

名所時鳥 時鳥さしし比えのふもととなり小野といふ里の木隠にして

まば舟のはるかにすぎてたち花の小じまがさきになく時鳥

雨中時鳥 はとゞます忍びかねたる一聲の卯花くさしふる夜なりけり

雨後時鳥 はしり出の外山の梢あめすきてのこる雫になくはとゞま

月前時鳥 時鳥つさのかつらも折るばかり思ひあがりし初音なるらむ

朝子規 よむろへてまちしのこれを有明のつきにひとこゑなく子規
 朝子規 まこもかる淀のさはへの朝わけにきけバすいしき時鳥かな
 曉子規 ありわけの月になのりし時鳥みにまむれバや忘れかねつゝ
 里郭公 あらねをきゝもらじけむ時鳥とばの里びと夕まどひして
 野郭公 にげ水のありといふ野の時鳥こなたときけバ彼方にぞなく
 野亭時鳥 わが門のうき沼のわやめひきもあへずねを合せたる時鳥哉
 山郭公 まつ人のたれにかあらむ時鳥ふるの山べをなきていつなる
 遠山郭公 時鳥なくこゑ高したにがはの音のふもとにどほさかりつゝ
 山家郭公 やま里のとも時鳥おどづれて柴のあみ戸のめにも見ゆらむ
 森時鳥 子規たれをまちてかこの森のこずゑの月のたかゝになく
 渡時鳥 ひど聲をかけそへけりな時鳥よどのわたりの棹のまづくみ
 雲外時鳥 時鳥すゝしくすぐるむら雨の雲にこゝろやかけてなくらむ
 船中時鳥 ほとゝぎす二聲なれ大井川のりかくれたる人もこそあれ
 社時鳥 かね岡の森の梢に月ふけてきねぐぬるまにさくほとゝぎす
 關時鳥 時鳥まのぶいつらしみちのくの衣のせきのうらどけてなけ

時鳥遍 ほとゝぎす盛なるらし立花のかをる軒端にわやめふくころ
 郭公 乏 かねくにはやかりにけり時鳥日をふる軒の菖蒲のみかね
 早苗 大井川ふるき流をせきいれてうたあらす田にさ苗とるなり
 採早苗 いそのうきふるのわさ田も賑ひて年あるみよのさ苗とるこ
 早苗はこぶ所 五月雨の雨にさほひて運ぶかな豊年見ゆる小田のわかなへ
 早苗うゑわたしたる所
 菖蒲 たてぬきにうゑし山田の若苗の賤はた衣のこゝろこそすれ
 菖蒲 かみつ代の涼しき風を傳へきて菖蒲ふくらしやまど國ばら
 山城のよどの澤へのわやめ草あさ風ながらふきてけるかな
 陸奥のかつみ草をもえてしげな軒の菖蒲にふきそへて見む
 菖蒲甲比かた 治れるは代の恵をいたゝきて菖蒲かぶどのひもながく見む
 藥玉 ほとゝぎすさつゝ語らふ契さへかけにけらしな母屋の藥玉
 騎射 向ふべきあさしなけれバうま弓いたゝ長き世の例あぞひく
 盧橘 九重のさくらにかげをならぶるの上なさはなの譽なりけり

閑庭盧橘 たち花のはなさきしより我宿もむかしを恋ぶ友のありけり
 橘 薫 枕 敷袴のどて世ゆかしみ手枕にはなたちばなや薫りきぬらむ
 橘 薫 風 たち花のはなふれこし夕風はやがて昔のつかひなりけり
 五月 雨 玉だれに残るあふひの枯葉さへうるひにけりな五月雨の頃
 ひさかとの月人男いかばかり思ひわぶらむさみだれこる
 古宅五月雨 かべ草にすがる螢もあはれなり日敷ふるやの五月雨のころ
 柚五月雨 ひだ人のはれぬ思もまられけりさまたれくらすにふ此柚山
 五月雨久 五月雨の雲あつゝみて日をぞふる雪ならなくに比良の遠山
 さみだれの長らの山の峯の雲いつはるべくもまられざりけり
 山家五月雨 雪のなほ見渡すかたもありぬべしさみだれくらさ山の下庵
 五月雨晴 さみだれははれしあしたの桑眉を出たる蝶此心地こそすれ
 水 雞 夏川のこなきおもだか花さきて涼しきくれに水雞なくなり
 わが門の板井の水草かきやりて月まちをれぱくひあなく
 鵜 河 流れくるつみ此小枝や松浦川まぼし鵜船のかゝりなるらむ
 たえたるをつなぐ手細の打はへてうちも桂も鵜舟さすなり

照 射 み吉野此山の奥にもさを鹿此うさめをまてて照射さすらむ
 木間ふの照射はのめきてさを鹿の心づくしの夏もきにはけり
 夏 月 釣たれて歸らむとすれば鴨川の柳の木のままのすいし
 知はぞらの夏も長閑にすむものまづ心なき月のかげかな
 樹陰夏月 片岡のならの木陰の夕すいみすいみてをれば月も潤れきぬ
 雨後夏月 雨のはれ桑子のまゆを出そめてかひやが軒北つきも涼しき
 池 夏 月 五月雨に濁りしいけの水だるも今宵の月のかげにすむらむ
 田家夏月 たちよれば夕顔棚のひとおほみよその田面の月ぞすいしき
 瞿 麥 麦 とにかくになつかしき哉妹とわがぬる床夏此なでしこの花
 おのづからこぼるゝ種の年々に咲句ひけりませのなでし子
 瞿 麥 露 おなじく袖にこぼれて句はなむとおなつかしき花の上露
 雨夜に撫子を思ふ
 夏 草 そぼぬれて手飼の猫のかへりけりあはれ雨夜の撫子のはな
 うらみむと思ひまらでや夏葛の月の窓あやはひかゝるらむ
 かりはらふ一日二日のおこたりをいたくを見する庭の夏草

蚊遣火

都人とふよの月をくもらすや蚊火といふもの、煙なるらむ
たかむらをもきてどなびく夕烟かくの伏屋に蚊遣さくらし

野亭蚊遣火

あくた火の烟まばく、靡き来て蚊遣ことなる岡のべのやど
斧のえも朽ちて光のなきものをいかなるくさのなれる螢を

螢

かはかみの林の木陰くれそめて蟬のぬるまを飛ぶはたる哉
海人の子が立さわぐもこりずまの里をわかれずとふ螢哉

里

曉更 螢 曉になりもてゆけば草むら此露にそひ寐のはたるをぞ見る
つこの國の小屋にかけたる蘆簾はたる見るあはさはらざりけり

螢火透簾

久方の天のよさづら花さきてふせやの窓のつきにか、れり
賤が屋にとり傳へつゝまく種の年もひさこの花さきあけり

夕

顔 顔をひる顔の晝はいさめて匂へるをなぞや眠のすゝみきぬらむ
水無月の日笠のうらにやく鹽のからくしてこそ暮初あけれ

苦

熱 熱 玄ろたへにさく花のしも多けれどむくといふ色や蓮なるらむ
はつ花をあまも見せむと夕暮のつぼみにかへる蓮なるらむ

蓮

五月雨におこりし人の心さへすままの池のはらすなりけり

水

室 大君のみ手にふれめや奥山のいはがき清水こほらざりせば
ゆふだちの雨をこひしみ鳴神の畏き物のまたずしもあらず

夕

立風 夕立のよそにすぎても涼しさを送るこゝろの風ありけり
あめはれて端居涼しき袖の上にちりくる花のあふち也けり

棟

誰家 かくれていなほあらはるゝ紫のあふちの蔭に誰うすむらん
のりてゆく駒の手綱の花あふちまばしととめつ森の下かげ

棟

中棟 陰たかみ手をらすすぎし花あふち此五月雨の雨にちるらむ
いにしへの風さへ我のなつかしき櫓の木陰に夕すゝみせむ

雨

舟もあらば浮寐やせまし水鳥のかもの河風さよくすゝしき
から衣ひも夕暮の山かげにさそふ水ありて今日もきあけり

麓

納涼 夏山の瀧にむかひて我ありと人もまざるまでなるゝころかな
すゝみどる鴨の河原の都人にしきを洗ふ江にこそありけれ

瀧

川納涼 涼しくもまくら流るゝ小舟かな川瀬の月のさすにまかせて
青柳のよそめ涼しとたちよれば我よりさきに風のとひけり

船中納涼

樹陰納涼

扇 はしぬしてならを扇のうたゝねの夢の上にはや置むとすらむ
 泉 里遠み人えらかしのかげふりてすめる清水ぞとはに秋なる
 蟬 をやみせぬ雨ときくまでなりにけり珍しかりし蟬のはつ聲
 林頭 蟬 秋ちかき片山林ひどのこでさびしくもあるか日ぐらしの聲
 蟬聲秋近 やまかげの大和撫子つゆちりて秋とまぐるゝ蟬のもろこゑ
 晩 夏 をむうふす夏野の草に露みえてまのびくゝに秋かせぞふく
 六月 秋 麻のはの流るゝみれば水上の御手洗がはにみそぎすらしも
 夏 瀧 すやしさを語り傳へて山里のなつこそ瀧のおどいたかけれ
 夏 川 ままつ鳥うやかづさけむ夏川の玉藻の花の今朝みだれさる
 夏 里 梅津より舟さしよせて若たけの葉室のさとの夏をとはいや
 夏 風 蝙蝠のあふぎの中にこめられて夏こそ風のとぼしかりらめ
 夏 祝 夏されば木毎に千世やこもるらむ緑のかげを涼しかりける

秋部

立 秋 けさよりの野べに山べに秋の風たつた姫こそ嬉しかりらめ

都人うちながむらし粟田やまわはたつくもに秋のはつかせ
 にはかおも風のすやしき朝寐髪思ひとくみぞ秋のきにける
 立 秋 月 かつ見ても誰か秋とまらざらむ桂のさとの夕づきのかげ
 立 秋 露 草のはに涼しき露のまら玉の秋のつととぞもてはやしのる
 閑居秋來 やへむぐらとはに露けき宿なれば驚かめや秋きたりて
 こと更に露かきそひて夕顔のみのかくれがも秋のまりけり
 野亭秋來 野守をやおどろかすらむ小山田の鳴子にひく秋のはつ風
 新 秋 風 都にもいりたちぬらし此あさけ鳥羽田ふきこす秋の初かせ
 早 秋 紅のあきつ飛びかひみそ萩の花さく見ればあきのさみけり
 初 秋 月 まら玉のさし櫛なして初秋のよそひことなる山のはのつき
 夏むしの眉ばかりなる月ながら秋のさやあぞ見え渡りける
 初 秋 風 あづま路の關のあなたやいかならむこの白河も秋風ぞふく
 山家初秋 山里のまど焼きすてぬ蚊遣火のけぶりふきしく秋のはつ風
 水郷初秋 みなせ川あき風たちて山もどに一葉どうかぶ舟もさびしな
 湖邊初秋 さいなみの志賀の辛崎あきたらぬ松の心もさびしかりらむ

一葉散林 秋のくるかた山林いちぢるくきりの一葉のひるがへりたる
 残暑 あきたちてまばし暑さを中々にねやの扇のおもひなるらむ
 乞巧奠 棚機にかしつる糸も言のはもながき例をひくみぞありける
 七夕 神代よりあふことたねぬ棚機の何をためしに契りそめけむ
 七夕 七草のかずもそろひて嬉しきにはれわたりけり星合のそら
 七夕 枕 たな機のめぐりあふ夜に定めたる枕や月のかつらなるらむ
 七夕 筆 この夕べ桐の葉ぬらま水莖も流れてたえぬためしなりけり
 七夕植物 七草の八重垣つくる手向に星のころもさぞなびくらむ
 織女契久 いは機に千はたふかけておる糸の長さやはしの契なるらむ
 花扇の使のかさに
 萩 七草のはなの使にえらばれてをどめもゑみの眉ひらくらし
 萩 萩のはの波にいづることをいはぬ哉風の音のみ世に高くして
 萩 風 枕つくつまやの夢のかよふともまらでさわぐか萩のうは風
 まつにふくたぐひうこれも萬代の秋にかはらぬ萩の上かせ

萩 玄なひたつ其若葉さへあかざりし本荒の小萩花さきあけり
 わがおりし錦ならずや二葉より生したてつるあき萩のはな
 萩 露 野守ともいはいはなむ秋萩のはなずり衣われいさあけり
 萩 秋の野の小萩が花の露をふきて何をあはれと人いふらむ
 田家萩 さを鹿のどひこし跡もみえあけり賤が門田の小萩さくころ
 萩 萩かる男子 玄かすがに萩かるをのこ心して残すふる枝の花さきあけり
 女郎花 野の宮の垣ねふたてる女郎花たはぶれがたき花とこそ見れ
 薄 駒なべて見ふこそ來つれ女郎花誰をか今日の夫とたのむる
 薄 ゆふまぐれ友まをれは花薄こゝろをまもあはれ也けり
 薄 つひあかく招きいでけむ秋の野の尾花が袖に月を波はれめく
 名所薄 花すゝきははに出て人を招くまは秋津の小野も色やなからむ
 薄 萩 かる萱の玄たの心しみだれまはよしや姿いまどろなりとも
 薄 我心どめてける哉これやこの秋の野べなるかるかやのせき
 薄 萱 風 ものおもふ人の心にくらぶればなほ萱のやすかなりけり
 薄 蘭 つかへあといでたつ道の藤袴さよきその香を我あかさなむ

横

色にそみ香にめづる世の常なるをたがぬぎすてし藤袴ぞも
どもしびもかまかに残る窓の内をかいまみすめる朝顔の花
おのづから秋草どもなりぬべし朝いゆるさぬあさ顔のはな
おまりあもうつろふ色か若草のつまにハ見せし朝顔のはな
ちハの秋さきて變らぬ花見れば松あもはぢぬ垣のあさがほ
なつかしと見る人ハみむ秋の野のまをふも衣の色に通へバ
星まつる頃しもにはふ二藍ハこゝろありけりさちかうの花
と見かくみ萩に薄におどらぬバ折りをへけりな桔梗のはな
秋の野を思ふまゝにもはふ葛のうらみや何の浮名なるらむ
秋の野の七草までハかぞへしハかざりもまらぬ花さかり哉
あさがほのあしたすぐれば月草の花に心をうつすころうな
あきも猶こまつがはらハ縁みて草ハみながら花ぞささける
やち草の花に虫よどわけくゝてさがのゝ露にぬれぬ日ハなし
ふみわけてゆくべくもなし片岡のまに亂るゝ秋のあさ露
思ふ心ありげなりなりまら玉をわれからくたく秋の夕つゆ

紫苑

葛花

露

嵯峨野

虫

ひしの名の松の夕かぜすハの露涼しき時となさかはすらむ
玉琴をかきあはせても見つる職きよき月夜の松むしのこゑ
處せき窓此内なるこにこめてきくだにわを野への虫のね
あら露の玉まく秋をまちつけてなくやこがねの鈴むしの聲
松 虫 高砂のをへの松にゆく風をふもとにうつま虫のこゑかな
こはろぎ 秋もやゝ末野のあさぢうらがれてよわる夕日にこはろぎのなく
さりくゝす かりくゝす枕の下にうつりけり有明此月のよさむるらむ
神樂岡に鈴虫のなくをききて

岡のべにふりいでてなく鈴虫のあなまがくゝし所からかも
月前虫 夕月にさそはれいでて虫のねの茂き野へにも我ハきにけり
尋 虫 聲 はるかおもひかれさあけり妹どわが子日せし野の松虫の聲
虫 聲 非 一 おほかたの虫の秋ハ變りけり嬉しげになくこはろぎの聲
撰 虫 今ハとてさが野別るゝ名残ふや虫籠の内もねをたてつな
雁 初雁の聲ぞうれしきをちかたの友をあまたに見る心地して
秋風のふきそむるより大空をあふぎてまちし雁ハさあけり

初雁 はつ雁の聲さやかあも聞ゆめり闇をあやなしと思ふ此夜に
 雁 めづらしき初雁がねに忘れけりけふの狩場のゆみも小鷹も
 雁 かずをだにかぞへむものを初雁の曉やみになきわたるかな
 雁 大空のつきもあはれと思ふらむちぎりたがへぬ初雁のこゑ
 雁 あはれおも並ぶ雁かな幾つらぞ秋の夕べの薄きりのうへに
 雁 ふたつみつ澤邊にみゆる雁がねに落たる文の心地こそすれ
 雁 旅雁連雲 秋風にたゞよふ雲を旅のかりおもふどちとも頼むべらなる
 雁 なれ／＼し筆の契を去のふれはあはれをまさるさを鹿の聲
 雁 秋風のふくだああるをそゝや又をむかなく也るなのさゝ原
 雁 わが庵の小倉の山のふもとあて枕におつるさをしかのこゑ
 雁 松が枝に月おちかゝるをしは山をしと眺れば鹿ぞなくなる
 雁 山 鹿 あしびきの山の嵐のさよふけてふくだにあるをさを鹿の聲
 雁 名所 鹿 小倉山よるのあやなきもみぢ葉の色にかへたるさを鹿の聲
 雁 山家 鹿 すみてこそ深き哀のえられければか妻とふ秋のやまさと
 雁 寐覺に鹿がさして

鶉 白雲の入重たつ山のあなたより寐覺ともなふ鹿のこゑかな
 鶉 都をば夜ごめあたちて深草の露ふむみちにうづらなくなり
 鶉 ひばりたつ春の昨日と見し野べに秋かぜふきて鶉なくなり
 鶉 秋ふかき淺茅がにはの夕かぜにつゆもほろ／＼と鶉なくなり
 鶉 曉のまぎの羽根がき聞きわびむ契りし人のあるみなりせば
 鶉 紅葉する片山里のうつろへど人もこぞゑにも老をなくなる
 鶉 おりたちてをしね菊はす小山田の夕日せはしく鶉を鳴なる
 鶉 稻妻 野邊近く家おせしより稻妻のかけのまくらに通ひなれつゝ
 鶉 うゑし田の早かりしはの稻妻のうつろふ見れば鶉かれけり
 鶉 秋 夕 月もまだいでてぬ程に何をかくうちながむらむ秋のゆふ暮
 鶉 きりたちて雁なきわたる夕暮をあさき心にながめけるかな
 鶉 袖におく露見えそめて大丈夫とおもへるわれも秋の夕ぐれ
 鶉 ゆふぐれのあはれをえらぬ朝顔の花のなかく心ありけり
 鶉 秋 夕 雨 夕暮のきりのまがきにふる雨の哀をえらぬひとへかし
 鶉 秋 夕 雲 うちまねく尾花が袖をふりすてゝ外山の峯にかへるえら雲

霧 さり深みふしみの里のまをさしかど末いかならむうち川橋
かぼつかないづくに道をもとめまし八重たつ霧の奥の山里
駒 迎 相坂の關をこゆればみやびたる道にひかる望づきのこま

東人のこゝろの色もあらはれて尾花あし毛を月にひくなり
あふ坂の山もひづめのあとにして雲井にのぼる望月のこま
建久二年法皇栖霞寺におはしまし時駒牽の引分の使にまゐりて さがの山千代は古道
わどとめて又露わくる望月の駒と定家朝臣此よめるを思ひいでて

深夜駒迎 荒駒のひかれかぬるをかごとおて月みる程に夜やふけぬらむ
相 撲 ならびなき都のふじの高ねとも思ふやけふの披手なるらむ
月 唐土の山のあなたにあらねども雲こそなけれあき此夜の月
ひさかたの天つ雲井のよそにても友ありけり秋のよの月
鹿の聲きぬたの音もさやかあて月の縣のものおぞありける
さやけしと向へばやがて様々のあはれ見えゆく秋此よの月
大空の嵐ばかりになりはて雲をわさるゝあきの夜のつき

連にみだかれてこそいでくらめ東のやまのつき此さやけさ
ひさかたの空にかゝれる月ばかりもて離れたる友あり有けり
月かけを遠くはなれてたつ雲の心もみゆるあきのそらかな
かなじくの桂のさどにあくがれむ西こそ秋の月もまさらめ
山寺のかねのえいまになりなむ夜よしとうたふ月の此頃
ちいの秋みることもあかじ我國のことは月の月のひかりの
枕つくつま屋離れてひさかたの桂のかけにたぬ夜いなし
くもらめや千秋もあき秋津洲のやまと島根のつきの光の
何事のおはしましてか秋ごとにつきの都のてりまさるらむ
いにしへを忍びつまでも覺ゆるの間にさしいる秋のよの月
未 出 月 山松のこのもどあくなりけり我まつ月の今か出づらむ
二 日 月 ちりをむる桐の一葉に二日月かつく秋のあはれなりけり
三 日 月 くる秋の哀をえらぬなるさへあはど指さす三日月のかけ
夕 月 吾妹子が玉のをぐしの姿ともみる夕づきのめづらしきかな
八月十五夜 てる月の光のみかひからやまと言葉の玉をまぐ夜なりけり

深	山	池	瀧	川	湖	浦	海	翫
山							邊	
月	月	月	月	月	月	月	月	月
花よりものどけかりけりみ吉野の吉野の奥の秋のよのつき	荒金の土をはなれてさやかにすすみのぼるなり山のはの月	そらのうみ池の心やうかぶらむさもむつまじく宿る月かけ	瀧つせに白木綿花をちらしつゝ尾上にかゝる月のまづけし	つき清み舟さしくれば菰まくら高瀬の淀もまどねざりけり	暮ゆけば月と花とみなりおけり萩のかげゆく野ちの玉がは	せきの戸をうちこえくれは漣のあふみい更に月をさやけき	うらの海士の煙たてずば中々に明石の月もさびしからまし	なれぬればなれむと月も思ふらむいやてり増る秋のよなく
								たづがねお立出て見れば難波がた夕しほみちて月の浮びぬ
								暖あらば大宮人もどひこなむなぶの汐屋のつき見がてらに
								月清みたがくにぶりが歌ふらむ室津にかけし朱のそばふね
								百川のおちあつまれる大海のなみもせばしとやどる月かけ
								駒の爪ぬらさぬほどの波よせて月まづかなるうちいでの濱
								ますかゝみすむ湖の月の上に浮べるちりいには波をぶねる

野

月

つとにをる花の心にまかせけりいかのすべき野への月影

八千草の花をりまきて秋の野に月をしみればもの思もなし

月清み野への萩はらふみわけて伏猪の床もおどろかさばや

はな海まねくまにくわくがれぬ歸さぬくれ野への月影

都

月

かのづから浮たつ雲の塵もぬ都のつき此みやこなりけり

かゝれどて誰をしへねど月清みみやこの街ぬるひともなし

山

家

月

月見おと人のむれくる山窓のよけうき雲のかゝるなりけり

草

庵

月

つき影のちりくるみれば草の戸の野分のあせの心ありけり

田

家

月

秋の野の尾花をいほにふきそへて月に幾夜の宿をかさばや

古

寺

月

よにみしひそれあらぬか高野山むろの岩戸の秋のよの月

閑

居

月

松のはの露ちる音もきこゆなり眺むる月の夜やふけぬらむ

禁

中

月

人とは目にかゝらじと立ちめし竹の編戸を月のもりけり

井

月

ふみ見るもかしてかりけり鶴のわたせる橋のうへにてる月

雨

後

月

くみあぐる小田の古井のはね釣瓶こぼすの月の光なりけり

むらさめの秩父根遠くすぎにけり尾花そではせ武藏野の月

月前遠情 てる月にむかふ心のはなれ駒とりつなぐべき方なかりけり
 月前松 糸竹のほかに嬉しくさゝなすの月にまらぶる軒のすつかぜ
 月前松風 くまもなく月影はれで松かぜの調ことなる夜となりけり
 月前雲 思はずバいかでか月にたちそはむ厭ひなはてそ夜はの浮雲
 月前衣 あき萩の露おぬれつるかり衣かへさの月にはすべかりけり
 月前行客 旅人の今宵いづくにやどるらむ月にいとがぬ野ぢのまの原
 月前鹿 すみわたる月に向へば聞ゆなり遠きやまへのさを鹿のこゑ
 松間月 こよひ又松のもとにて月の見むあらしも清しすき影もよし
 竹間月 音づれむ友こそまため呉竹のよいまど深しつきのさやけし
 旅宿月 これやこの吾妻少女かや薙こよひの月にとりいでて敷く
 月の歌あまたよみける中に

桐の葉のちる夕べより長月のありわけの空の時雨するまで
 月にむらくもかゝりたるかたに

ひたふるに何か厭はむ一むらの雲こそ月のにはひなりけれ
 即位ある年當座に寄月祝といふことを

釣夫掉月 八雲たつ出雲も秋のつき清み松江にうかぶすいさつりふぬ
 緇素見月 月夜よみ太刀の緒とけし圓居ふ念の珠もわまれてぞみむ
 貴賤憐月 月を思ふ心おまなやなかるらむたまのうてなも露の草屋も
 月千秋友 思ひやまなしとや誰かいふならむ千世に伴なふ秋のよの月
 月契秋 かれぬべき契ならめや月の中のかつらの枝に霜のかくとも
 深夜月 ねやまけむ寝ずてやあらむ柴の戸をどひ行く道に月更おけり
 終夜見月 かのづからうちまめりたる袂かなつきの桂に霜やかくらむ
 曉更月 月みつゝまとぬする夜の朝顔のはなのさくにぞ驚かれける
 入後暮月 山のはをながむる程にあけはてゝ心おのみぞ月のこれる
 野宮に月すめるかた

鈴虫のねおたちよりて野の宮の小柴かきねに月を見るかな
 衣 やまど路を夕こえくれは露霜のふるさと毎にころもうつ也
 世をまらぬ木曾の深山の麻衣つきにうてとれたが敷へけむ
 やまがつの麻の衣いたひとへうつに霜夜をなど重ぬらむ

山家 搗衣 賤の女の眞柴うりてや歸りけむころもうつなり大原のさと
 われのみと思ひし山の奥ふかくすむ人われやころもうつ聲
 湖邊 搗衣 雲井ふりかりがねなきて秋寒き堅田の浦にころもうつなり
 浦 搗衣 浦の海士の汐やき衣あささむきからき思ひやうち重ぬらむ
 砧うつ女に縁子のとりすがりたるかた

小鷹 狩 古へもなつかしければいはせのま萩ふみわけ初鳥狩せむ
 手にかへる雲井の鷹やたどるらむ尾花も招く栗栖野のはら
 ま萩原けさの野分の風をいたみ心にもあらで鳥やたつらむ
 鷹すゑてくるすの小野の色鳥を野分の風にたせつるかな
 さくの露くまぬかたこそなかりけれ大内山を水かみにして
 こゝのへの大内やまの菊のつゆかゝらぬ袖もなき日也けり
 花といへばなべてあだなる世中にちる事まらぬ菊もありけり
 まら菊の花にむかひて思ふ事ちよにあえむの外なかりけり
 菊といへば秋にかなへる色香にて静に千代を咲き渡るらむ

菊始開
名所菊

させ綿の我させてこそ咲にけれ千年のゆづれえらぎくの花
菊のたねまきし主人の千年さへかさねて見ゆる花の色かき
まつ程も千年やふると思ひつる垣ねの菊のさきそめおけり
大井川いり江の松のえたつゆおぬれて千年の菊やさくらむ
おき遠くかどらぬ波も薫るらしきくの花さくふきわけの瀧
二つみつ今年もことに咲菊の花いたならの玉おぞ有ける
まきたへの袖ばかりなる色にもちよあまれる白菊のはな
そことなく奔の音さへさくの花匂ふ山路の世に似ざりけり
吹上のはまこぎわたる釣舟のつともめづらしえら菊のはな
秀でたる菊おもあるかなひさ方の星の位やえめてさくらむ
時すぎしはなどないひそ白菊の千代の昨日につくる物か
立田姫老せねばこそもみぢ葉の色も千秋にかはらざりけれ
もみぢ葉の八重一重おもあらくに薄くもこくも照る山へ哉
秋深くなりにはけらしな時雨する北山もみぢかさしてぞくる
みづ清く山かすかなるあたりより折こし紅葉色のえならぬ

菊有新花
離山路菊
海邊菊
菊爲花第一
十日菊
紅葉

紅葉 浅 かの岡にかた枝色づくはし紅葉鵬がなきてもえらせつる哉
 庭 紅葉 小車の打出しきぬのこゝちして軒端の紅葉そめはじめけり
 山 紅葉 小倉山御幸をまつのひま毎に染むる紅葉ぞ世に似ざりける
 山路 紅葉 あしびきの山こぼれれば立田姫あふ心ちして匂ふもみぢ葉
 海邊 紅葉 時雨つるわたの笠松かはらねどむこの山べい移るひあけり
 瀧邊 紅葉 白川の瀧つゑら糸もみぢ葉にそめかはりたる名や流るらむ
 社頭 紅葉 はゝからぬ時雨の雲の跡見にていがきの内も紅葉してけり
 古寺 紅葉 色のみなむなしとささる山寺の軒あもそめつ秋此もみぢ葉
 立田山紅葉 露霜のあきたつ田山いつしかとまちし紅葉を今さかりなる
 高雄山紅葉 いにしへの御幸もありし高雄山こゝろたかくや錦おりかく
 暮 秋 霜 霜むすぶ野寺のかねお送らせて此ゆふぐれに秋ぞくれゆく
 暮 秋 霜 音もなく色なきものゝ悲しきい暮ゆく秋の霜あざありける
 暮 秋 紅葉 小倉山御幸もあらばいづいせむ紅葉をすてゝ秋のいぬめり
 暮 秋 菊 霜むすぶ一本菊をのこしかさてくれゆく秋のこゝろ悲しも

田家暮秋 をしねはす山田の引板に手をかけてひげども秋のとまらざりけり
 九月 盡 招きてもとまらぬ秋と見はてゝや夕べの風に尾花ちるらむ
 秋 風 さをしかのなくぬもかれて山里の秋の果こそ寂しかりけれ
 秋 雲 雲まよひ夕月はそく見えそめてあきかぜたちぬ西山のそら
 秋 雨 雲を山田の鳴子の音にさわがれて足とくすくむらさめの雲
 秋 雨 もみぢ葉はまだ遠山の麓なるこはさうつろふ秋のむらさめ
 秋 野 棚ぼたの七草をりにこしものを野を懐かしみたちぞ頰らふ
 秋 川 きて見ればまだえら川の秋の水あすや紅葉のいろに流れむ
 秋 水 秋の田を今はとちちてゆく水の心やすさもくみえられけり
 秋 野 夕 くるゝ野に残るもさびし秋萩の花のおとゝふさをえかの聲
 閑居 秋 菊の上をはらへば松の露ちて静にちよもかぞへられけり
 海邊 秋風 つの國のなにはの芦の秋の風うらさびしさを盡してぞふく
 秋 農事 こがひ得てゆたけき里の垣つ田にいと年あるみのりをを見る
 秋 興 樂しむ半もすぎぬ野べなれや夕べのはぎに月をまつとて
 田家秋興 新志ばり汲みてうたへば豊年の田面の雁もこゑあはすめり

秋 眺 望 霧のうみどうちみる程に秋の田の穂並の上に雁なきわたる
秋 色 草に木に匂へるよりもかなしき心のあきの色おざりける
秋 祝 君が代いさくの長はまさく菊のながき色香おどめる秋かな

冬 部

初 冬 きのふけふ冬めづらしき山里の木葉のあめに雨やどりせり
片岡のはやしの梢かぜあれてまぐる、月いけふたちぬめり
十月更衣 みや人のきおしの衣の袖の上に時雨さひけき朝ぼらけかな
冬の始に 神無月けふもまぐれむと思ひしを霞むばかりにみゆる空哉
閑居冬來 よど共にあれし鼠のあな寒やけさより冬のすみかなるらむ
初冬時雨 時まらぬくらまの山の杉むらに時雨の雲いまづかゝりけり
時 雨 風のおとをかりそめなりし軒の松誠まぐる、冬いさにけり
北山のまみめづらしき昨日けふ時雨のあめも音づれおけり
神な月時雨あさへもなれぬれば音せぬまこそ寂しかりけれ
時雨告冬 北窓をけふも幾度たゝくらむあなかま時雨ふゆいまを

都時雨 きた山の炭もてはこぶ都路にまぐれの雲もかくれざりけり
旅中時雨 武藏野をおくる時雨のうき雲やけさ見し富士の煙あるらむ
男女時雨にあひたり紅葉乱れてちる

十月苦蝮 山里にたちかへりてや宿らまし紅葉も雨もふりにこそふれ
なつむしの火にもいらず徒にのこるさ蝮の身を寒なる
風さそふ花にの音もなかりしうちる木のはこそ哀なりけれ
もみぢ葉のありし梢の色よりもうち散るおどぞ哀なりける

閑落葉 終夜さくものとしもなれるこそわかぬ紅葉の名残なりけれ
いかにして寐覺の袖のぬれつらむ窓うつ雨の木葉なりしう
かきやれど猶ちり浮ぶ山の井の紅葉ながらに汲まむと思ふ

山家落葉 もみぢ葉の打散るまゝに立田姫なみだこぼるゝむら時雨哉
かくれがも木葉の音のいとほぬを松の恐びにおつる也けり
さよふけて月のかくるゝ山本此松の葉まろし霜やかくらむ

閑庭落葉 まぐれての野への草葉の色あきをすてぬや霜の心なるらむ

磯 千鳥 虫明のせとの波まに月おちてくらさいそべに千鳥なくなり
曉 千鳥 波よする磯邊の松のねもやらであかつき深くなく千鳥かな
河邊に舟ひくかた

水 鳥 芦まより千鳥たゝせてひく舟のゆくかた寒きあさばらけ哉
かはしまの松よりおつる白雪を翹おかけてかもぞなくなる

巨掠の江をたつ鴨のをりくゝいふしみの里や夢さわぐらむ
みわたせば鳥羽の山松月おちて伏見の田に鴨ぞなくなる
霜八度おけどもいけにまむ鶯のぬしおもひ羽の色も變らじ

網 代 田上のみねのあらしも川波もおじろもる老が床のものなる
まら波のよせて匂へる紅葉こそ網代の床のつまおの有けれ
衣うつ音ぶにたえし山さとのさむきまも夜に雁なきわたる
おくれても雪のあしたの玉章の我かけたりと雁やなくらむ
初春のそのみかま木の朝けぶら思へばかすむ峯のまひしほ
あくる夜の垣ねにのこる霞こそ碎けしゆめの餘波なりけれ
埋火のあたりのどかに圓居して霞のおどいさくべかりけり

残 雁 雁
雪中残雁
椎 柴
霞

柏

霰

ふる程のまばし霰の玉柏手折らむとすればよそにちるなり

閑山雪

霰霰

思ふらむ心ありげになら坂のこのてがしはをうつあられ哉
落葉してあらはになりし柴の戸をおもふさまあもうつ霰哉
たま霰はげしかれとておく山の檜の板屋のつくらむものを
ふる雪に色めくにはの枯尾花まねうずとても人のとへかし
そらぶきもなびく都の初雪にかをらぬ花の名こそをしけれ
あさければ人の跡もぞいとはるゝつもりに積れ庭のまら雪
さればこそ夜はの結いいそぎつれ初雪ふりぬまがらさの里

待初

雪雪

ふる雪にをそのたはれを跡つけて馬よ車ととるかすらむ
九重のどのぬも寒くなりおけり比えの高ねにみ雪ふるらし
君子よあさどくさませ我宿の雪もありのおそりやいなき
埋火を友とたのむる身にしあれど雪の心にかけぬ日のなし
冬きていまつものにする初雪のふれるあしたを只に過めや
さえとはす釜の下にまるかりし雪のむかひの峯のいはかど
芦の屋の小屋の籠もあげつらむ初ゆきふりぬ猪名のさゝ原

山初雪 いくたびり有明月にはかられてまちこし庭のはつ雪ぞこれ
 いこま山はつ雪ふりぬ浪花人あしわけ小舟こぎいでて見む
 かくながら都にはこべ大はらやこのいちしほにふれる初雪
 梅にちり櫻にかゝるはつみゆき花とのみえるみやこ也けり
 朝雪 朝雪 ふりはれし雪のあしたの朝づく日花やかあこそさし昇りつれ
 夜雪 下折にねざめの枕そぼぶて、まぶ見ぬ雪のおとを聞くかな
 深夜雪 人ひみなあつき衾にうづもれてぬる程ならし雪のまづけさ
 山雪 はつ雪もふりにける哉つねに我友とながむる遠やまのまつ
 遠山雪 ひえいまぶまぐる、雲のあなたなる比良の遠山雪降ふけり
 川雪 よる光る玉の大橋かけてけり雪ふりぬらし加茂のかはづら
 島雪 釣舟のどまにのこるの雫あてはつゆきふりぬかさぬひの島
 山家雪 さを鹿の跡のみ見ゆる山里の雪のあはれぞ世に似ざりける
 故郷雪 ふる衣さならの里に夜をかさぬ日を重ねても雪ふりふけり
 閑庭雪 我さへも人のゆかしき朝けかな友まつ雪にもよほされつゝ
 さびしさの小野の住居に似たれども雪踏分てくる人もなし

船中雪 ときかへる朝妻舟にゆき白しうきねよいかに寒けかるらむ
 名所雪 かくながら常にあらなむ九重のみやこのふじの峯のまら雪
 松雪 下折れし竹の音にいおどろけどはらひかねたる松の雪かな
 雪中鳥 よろこびをつぐる鳥に起出ればわがまつ雪のふり初おけり
 雪朝 雪のうへに一むら塵のさいよふ山がらすもや罅たつらむ
 山里の雪のあしたまらうと門にある所
 たゞけども答へざりけり雪の門また下折のこゑにまざれて
 野宮に雪の積りたるかた
 心あての黒木もわかず成にけり野の宮いつて雪此わけぼの
 神樂 まきしまのやまと琴のね神さびて榊のえだに月ぞかゝやく
 雲の上いたゞめの前の神代あてありわけの月に星うたふ也
 こがらしにふき合せたる笛竹のねもかもしろき月の夜神樂
 あけぬるか横雲わたる岩戸やま星うたふ聲のまぶ夜深さに
 家々のたかの風流をつくしつゝ朝たちいつるみかり野の原
 鷹狩 ひきすゑし鷹の屋形尾みづ莖のをかのさゝ原かり盡しつゝ

炭 竈

さびしども賑はしども見る方になびく烟か峯のすみがま
小野山の炭やき衣をみぞめの心地やすらむ世にいはずして
炭がまの烟かすみて丹波路の心もひの外にはるめきにけり
やまでらの鐘さやかにて埋火の灰にも霜の夜にふけにけり
埋火のあたりあのみもあかすかな霜夜の月窓にへだてし
ともすれば聞おも炭のうす烟なほ小野山のあはれをぞ見る
文机のそむけがちにて埋火のはひかきからしなる、頃かな
みづたまる池田の里のまだ見ねどすみよき程をよなくぞある
かたらへば語る言葉の花もさき紅葉もにはふうづみ火の許
埋火のあたりのどかに語らへば瓶の梅さへはゝるみにけり
桐火桶 つま琴につくりなさねど桐火桶てにならさるゝ冬よなく

爐邊閑談

桐火桶

茶壺の口切どいふことを

師 走

つばの内の梅よりもとく開けたる木芽芳はしこむ人もがな
させわたの心地せらるゝ厚衾かづく我身の菊おもあらなむ
雪ふかくつもる師走のまはせ山熊もうつすの底あすむらむ

早	梅	さきそめて春めく庭の梅が枝に木枯といふうぜ吹くなゆめ 比良のねに雪を見そむる頃よりぞ都の梅のはなもよひする さきふけり年の内ふの梅が香のたき物のみと思ひしものを ひいらぎもまぶさしあへぬ年の内に春めさけり香軒の梅が枝
歳	暮	若ざかりまぶをしからぬ心をば我にかさなむ年のくれびた
都鄙	歳暮	年くれてさす柘のひと枝のかはらざるべしひなもみやこも
山家	歳暮	猴なく山みて年を惜といは世の人まねみなりやまてまし
家々	歳暮	ものゝふもはかせの家も梓弓はるまつほかや今のなからむ
歳	暮	月
歳	暮	松
關	歳暮	あはれ也くれ残りたる年の尾にまぼしかゝれる有明のつき 千年へむ松のまらさや世中にくれゆく年のをしきならひを 逢坂のせきといひれどはしり井の水の如くもくるゝ年かな
學者	惜年	ことし又ひまゆく駒に遅れつる文事こそいかひなかりけれ
歳	暮	祝
追	離	ことなきも嬉しきものを思ふ事なりけむ宿此年のくれがた なやらふの御代の例にかはらねど鬼のすだくといふ里のなさ
除	夜	くれくつて残れる年の一夜川こゝろづくしのわたり也けり

冬 山家 家 たりよりあらば都へと思ふ落椎のみ此はらくと雨も降來ぬ
 山家冬朝 けさもなほ紅葉のこり笹栗のかつる垣根を人のとへかじ
 冬 動物 野邊の今かりする頃になりぬらし里の木末に鳥のむれくる
 冬 鶴 冬のよの長居の浦にすむつるの霜に千年のあともつくらむ
 冬 庭 くる人もなき冬がれの庭の面になにと霞のたまはえくらむ
 冬 衣 手弱女もむかしひきたる皮衣けうときものゝ冬になつかし
 冬 松 年ふれど色もかはらぬ高さの松にまぐれの雨のものかは
 冬 車 ふる雪にちまたひきさす宮人のくるまやどりや岡此松かけ
 廣澤池冬 廣澤のこほりをくたく音すなりわたさるしに霞ふるらし
 冬 祝 よの民におほふ惠のあつぶすまさゆる冬どの思ひしもせじ

戀部

はつせ山祈りしかひに打とけてねよどの鐘を二人きくかな
 水鳥のおなじつらなる戀もせで雲井のさづを慕ひてぞなく
 あぢさゐの四ひらの花の背ごとくに我を待せて移るひあけり

初 戀 春秋のちぎりかはらぬ月花もまてゝ物思ふ戀もあるかな
 さよ衣かへしてねむと思ふこそまづ我戀のうらみなりけれ
 忘草おふともまらで住の江の松がねまくらなどねをめけむ
 うれしきにうきに心のくだかれて戀こそ人の老となりけれ
 小山田の下樋をくゆるさゝ水のかすりあだにも聞せてしがな
 ぬば玉の夢の中にもうつゝにも人戀る身となりはてにけり
 初 戀 よ心のけさやありしくれ竹此ふして人おそ戀しかりけれ
 ますらをどたてし心のまき柱などつまやにいより始めけむ
 時ならで秋のくさ葉の露ふかしあやしや何の道にきつらむ
 つらくとも命のかぎりたえて見むまのぶぞ戀の操なりける
 忍 戀 きたたへの枕に露のむすばじをなきて涙のなにやながれむ
 悉 經年戀 心あひの風もふかねばくれ竹のうき一ふしを忍びてぞふる
 欲 言 戀 よしさらば心の底をうちいでむ世に不忍の池もあるも此を
 幼 戀 花がたみをさなき目にも見えらなむ我おもひ草のみし心を
 初 逢 戀 ひしぶすまなみやが下に打とけて逢ふ時なれや逢み初けむ

不逢戀 年月のうさひかたらじおと草のまげき中あ秋かぜのふく
 妹が門ゆけどもあはず杉がえにつれき風の音ばかりして
 玉だれのこすを隔つるあて人の逢見ぬものを何うあふらむ
 祈逢戀 いのりつるゑるし今宵みつが峯杉の青葉の變らずもがな
 逢不遇戀 今更にひけばちびきの岩根松つれなき色を見てやわらむ
 尋戀 玉匣あひみてあはぬ我中の浮名もいかいふつにかあるらむ
 後朝戀 かむつけのさの舟橋かけたれど吾妻少女の親もゆるさず
 難忘戀 ぬぎかへし衣いこゝにありながらあらぬ人香の言もかはさ
 船中戀 朝妻をこぎわかれこしうき舟のうける心をいかでつながむ
 名立戀 鳥がねも聞ゆるほどに歸りきてまさる思になくくぞぬる
 悔戀 さるもの疎き習をたのみあて日頃みねども忘られなくに
 雨 中戀 なく涙とまもる雨といひなしてみなどに残る人をこひつゝ
 戀 どりどめむことのかたき朝鳥のさちて出にし浮名也けり
 戀 たん名を思へばけさの悔しきをくゆとひさまがさこえむをし
 戀 とはれつる其夜に似たる雨なれど一人のみこそ袖濡しけれ

旅戀 草枕ひなのたびねお四年へてちとせをかけしつまで戀しき
 思戀 驛路のすいの篠屋のすゐるなる戀あぞ袖ぬれまさりける
 片戀 ゑるべぞと頼めし程に年月をふるさかもひととなり果みけり
 恨戀 かくてあらば身の徒にこゑなむかもひはからへ思兼の神
 恋 數ならぬわがさきの世やかたし貝今もあはでのうら歎する
 恋 かりそめの物見車のあふ草それもうらみの露のかけずや
 恋 岩代の松もおもへつれなさにむすぶ恨のよをへぬらむ
 恋 夢よりもはかなかりけり身おそはる儂のみ言もかはさ
 恋 相おもふ 池おすむ鴛のつがひの生れきてかくや思のふかさくらぶる
 恋 口かたむ せきいれし小田のますら男心せよ皆口よりぞもるべかりける
 恋 一夜隔てたる 今年生の竹の一よの夜がれをもまづうきふしに思ひやせぬ
 恋 二夜隔てたる あひそめて二夜まるねの朝ね髪心さへこそむははれつれ
 恋 三夜隔てたる まはれしいうべどもうべき雨つゝみ三夜もこざりし床夏の花
 恋 寄月戀 あふ夜はのありて後こそ有明の月のつらさも思ひまられぬ
 恋 寄雲戀 峯高き雲のかけ橋かけたれど渡るすべなし見てこそやまめ

寄風 戀 露はらふ萩の上葉のあきの風けふいよそあやき渡るらむ
 寄雨 戀 とはれねば草の庵となりはて涙をよる此あめどふりぬる
 寄山 戀 音羽山おどおれたちて逢坂のせきのこなたに年をへにけり
 寄里 戀 人もなほ思ひいつらむ雁がねのなきて別れしみよし野の里
 寄關 戀 おもかげを心にとめて今宵もや不破の關屋に只ひとらねむ
 寄橋 戀 ふみなれぬ胸とほろきの橋のつめに逢見し妹のかけて忘れず
 寄江 戀 住吉のえやの忘れむといひおきて名におふ草を今の摘けむ
 寄湖 戀 あふみてふ名をば頼みてこしるども打出の濱の打出兼つゝ
 寄瀧 戀 関の内おとす涙の瀧つせの君ならせしてたれうせくべき
 寄水 戀 まいそすと共にむまびし山の井の水こそ袖の濡しそめつれ
 寄舟 戀 亥は竈の浦こゝ舟の綱手おもなり見てしが赤人もひくやと
 寄鳥 戀 五月雨のふるやの軒にゐる鳥のまどいに滯て物をこそ思へ
 寄獸 戀 なれぬれば虎すむ野おもふしつべしうしろめたしや妹があら床
 寄虫 戀 戀せせばたい大方のあはれみてきかましものを松虫のこゑ
 寄松 戀 出羽なるあこやの松のこやとしも聞えぬ儘に年ぞへにける

寄草 戀 三熊野の浦のはまゆふえてしがな百重に思ふ人にみすべく
 寄葵 戀 かたをかの森の下道わかるれど又もあふひを忘れざらなむ
 寄鏡 戀 関の中に二人むまびし紐かゝみこれを心とみもし見られむ
 寄閨 戀 つれもなき鳥のねばかり聞えきて今宵もえらむ関のひま哉
 寄夢 戀 思ひかね衣かへしてねしものを夢おも人のつらさをを見る

雑部

天 九つ雲も鳥もおよばぬ久方の天のみやこおゆくこゝろかな
 日 ひるのうちい地をもめぐる日の神此普き影を仰がざらめや
 星 ひさかたの南の空の雲間より老此すがたのみかけあらはせ
 雲 山のはにおなじ姿のみえねども昨日の雲やけふもいつらむ
 曉 末つひに富士のねをさへ包むらむ塵ばかりなる空のうき雲
 朝 よひのまに語りし友のかけさえて寐覺のまどにあり明の月
 山鳥あけぬとつくる一聲に世のさま／＼のおどぞきこゆる

山

やき太刀のとなみの關に打みればいよ／＼寒し雪のまら山
大井川みなそこすめる君が代に長くひきなす龜の尾のやま
人の上もたいかゝれどか朝もよし紀路に双たつ妹とせの山
雨 後 山 谷川のにむりに宵の雨みえてみねおの雲ものこらさりけり
不 二 ちたび見て千度めづらし雲風此すがたさだめぬ不二の芝山
東路にみそむる富士のよろこびをわはす扇のすがた也けり
これやこ此都にしての大比枝をみつゝまればし不二の芝山
不二のねの三國に亘るあしぐなへ動かぬみよの寶ありけり
三十餘り二つの姿そなへたる山とたゝへむやまの不二のね
ふじのねの國のまづめの神なれば雪の白ゆふかけぬ日なし

富士に龍の昇るかた

ふじのねの黄金のたつの位山ときえて今やたちのぼるらむ
十二月の不二とて人の乞ひければ

正 月 ふじのねや神代ながらの雪此色もけさ新しき春のきにけり
二 月 富士のねの雪の下ふも若草のみどりの春とひばりたつなり

三 月 山風もさわがぬ春ぞいざ子どもふじのまを野に櫻がりせむ
四 月 ときまらぬ不二の雪をも卯花の夏になしたるはとゞす哉
五 月 いたづらに富士の裾ゆく旅人のうらみもはれぬ五月雨此頃
六 月 いかばかり涼しかるらむ不二風ふくやふもどの床夏のはな
七 月 東路のころも手寒し不二此ねの雪よりおろす秋のはつかぜ
八 月 さやかふも聞えけるかな月雪此ふじのかげふむさを鹿の聲
九 月 いく藥あるてふ富士を仰ぎつゝ菊のはなつむ武藏野のはら
十 月 神無月まぐれの雨のゆきかひに幾度ふじの晴れくもるらむ
十一月 ふじのねの雪此夜あらし吹落てもどりなきたつ三保の松原
十二月 こよろぎのいそしき年の暮あても見れば豊にたてる不二のね
もゆるより枯れはつるまで百草の百の哀の野べにこそ見れ
うちつけにおりたゝむとも思ふ哉たづ此むれるる春の櫻田
濁なきまらべなるらし六代田のいつ貫河のみづのまらなみ
心だにすまば山もふどらむと市にいづらし三輪川のみづ

宇治川の水をくむといふことを

河橋をひきしひ遠きむかしひて騒がぬ水をくむ世なりなり
 河水久澄 萬代のかいみとすめる加茂川のしみもすそ川や底にかよへる
 對泉石 山水のそおれさいれの清ければ石も口をそくべらなり
 閑對泉石 やま陰の岩根にそくく苦清水みなれ聞馴れて年ぞへにける
 瀧 手にまきて歸るよしもが岩がねあすいしくかゝる瀧の白糸
 常にゐる高ねの雲のかけひより幾世落くる水あかあるらむ
 峯たかみ岩ねあはさる山水のくだけて瀧の名いながるめり

養老の瀧のかさ

道まらばゆきて結ばむたどの瀧いまも藥のみづならましを
 山中瀧水 よし野山花のかどのみ高くしてたきつ流のまられざりけり
 關 契あればさふけるものと陸奥のころもの關に袖のまをりぬ
 やつれこし我身をたれとなのらむも面なかりけり朝倉の關
 關路 玉くしげあけてこゆれど足柄の關の戸くらし雲のまらみち
 海路 唐人ふうさねの床やならべまし博多のおきに舟かけてけり
 かは島のせとの高波こえてこそ蟹ならぬみも息いつかるれ

海上雲 浦わたるたづの遙にゆきすぎた波にたいよふ雲のひとむら
 海邊曉雲 漁舟ふなでまらしもいつの海やふじの高ねによて雲わたる
 海邊松 波の上に萬代さらぬうき草のひとむらまげき橋ぶてのまつ
 鹽屋烟 沖つ風ふきにけらしな明石海まはやくけぶり波になづさふ
 石 口そくく流によればやすらかに枕とすべきいしもありけり
 庭石 庭の面にすてたる如く置く石ををしむべしとや苔の包める
 鶴 庭石 まがのねの長き春日を心ふてとはにすむらむ浦のあしたづ
 君が代の長居の浦のまつごとにとつての毛衣かけてさらせり
 丹頂鶴 天とぶやつばさにかゝる白雲のまらずいくよのたづの齡ぞ
 松上鶴 くれなるに匂へるたづの頂の八千代ふりにし霜やそめけむ
 鶴の二つあるかた 高砂のをのへを見れば松の葉の青雲のうへに鶴ぞなくなる
 つの國の浪花が崎の雙び濱ならびてたづの千代よばふらむ
 同じく三つあるかた

大伴のみつの浦づるみつながら千代の年波たちかさぬらむ
鶴のむれゐるかた

一むらのかりゐる雲と見し程にやがてきこゆる萬代此こそ
松陰に鶴むれゐるかた

鶴 千年友
いづれふか千代の契らむ住の江の松陰くれば鶴のむれたる
仙人のすみかも何かよそならむたづにともなふ庭の松かげ

鷺 荒磯のいはにありゐてなく鷺の聲のひいきに波ぞくだくる
ものゝふの矢にはぐ見れば鷺の羽のなれる果さへたけくぞ有ける

鷺 かつのゆきかつの行む白さぎのまらせいかなる物思ふらむ
岩に鶴鶴のかた

岩に鶴鶴のかた

千早振かみよのつたへなかりせば鳥の心をたれかえるべき
なつかしき花の名おへる牛なれば黒き中おも色に見ゆらむ

猫 なれぬるも今の中々うかりけりねおのかしづき暇なくして
世中のひとの心のきつね川をさくらべて知るべかりけり

狐 ひさかたの天つ空なる不二のねの石おも虎の名こそ高けれ

虎

狸腹鼓うつかた

おもしろき野中の月の夕べかなみづ笛ふき狸つゝみうつ
大がめも小がめもわれど萬代のなむ緑のふちにすむらむ
岩淵にぬれていさらま龜の尾のながき月日を思ひこそやれ

龜 をりくゝの青海原にあらはれて君がよるづ代を仰ぐ龜かも
玉くしげふたゝび契る人もわれなよさの浦龜今もすむらむ

貝 色々の小貝をなみのうちよせて磯邊の花のさかぬ間をなき
人ごどにちよをおほへる松のはの心廣さを見るべかりけり

松

花紅葉おだ競べしてたてる世にてらはぬ松を長閑けかりける
庭の面を松一本にまかすればゆたふぞ千代の影のみえける

花 花だにも常磐なりせばめかれましわくよまらぬ松の色哉
まも雪にまはまで年をよる松のたふとむべきの限なりけり

嶺 里わかず家もえらばぬ縁ふて世の民くさにまじるまつかな
かつらぎや高まの山のみねの松雲に埋れて千代やへぬらむ

嶺

松

遠けれど近き友おもまさりけりいつもかはらぬ茶のまつ原

松 園の内をま山のさまにすみなせば人まつ風のふかぬまもなし
 琴とるも木芽にるおも松風のかはらぬ友となりぬべらなり
 社頭松 ねはかたの種ならめやの住吉の神とよをふるあら、松ばら
 名所松 くしげよりなびさし雲も橋立の松の千代ふの障らざりけむ
 松樹縁久 品たかく見えけるものゝ萬代をえめたるまつり縁なりけり
 天満宮九百五十年聖忌奉納松添春色

椿 雪のうちの松の色そふ春がすみたが上ふかひかけて仰がむ
 梅もあれど年の内よりくる春のひかりを見する玉つばさ哉
 嶺 梅 わしひさの山のたかねの玉椿月ふのみがき日おいてるらむ
 松竹梅 松此尾も竹田も春にかすみけり梅津の里のうめかをりつゝ
 竹 わし原のまぐなる國に處えていくむら竹もかひまげるらむ
 笹の葉を手ぐさにとりし神代よりかはらぬ竹の緑すいしも
 おきふしになれて數多の年もへぬ言の葉かはせ窓此くれ竹
 空しきを心となして世おたてる竹のものこそ思はざりけれ
 まげれどもいぶせしといふ里もなし軒端に高さ八十の村竹

名所竹 十あまり八とせの公の陰のあれどなほ此君の若みどりこそ
 江菅 契ありてけふみしま江の玉小菅かさにぬふらむ後れたが笠
 芭蕉 草かずにあらずと何か思ふらむふじの高ねも芝生ならずや
 苔 蕉 うゑてこそ見るべかりけれ國つ民これも言葉の廣き芭蕉葉
 岩がぬみむしける苔の種なれやをりくおつる松の老た露
 ちる櫻おつる紅葉にあらなくにふまゝくをしき苔の色かな
 海眺望 袖の浦の沙屋はるかに見渡せばたい空燒のけぶりなりけり
 海神のうへいときははに秋なれや野への薄のはのなびく見ゆ
 うみづらもみちくる沙の朝さよめ残まる塵や小舟なるらむ
 湖眺望 逢坂の關をこゆれば袖の上には波よせてうらかぜぞふく
 漁父 浦島が子のむかしをや思ふらむ老のなみよる磯のつりびと
 いさりする浦人いたく老あけり龍のみやこの龜もつらずと
 樵夫 なれぬればこれる妻木もおもからで歌ひつれざる日なかりけり
 鏡 心さへうつろふものを増鏡すがたのみともおもひけるかな

硯 筆 船 橋 酒

手なれつる硯の海も心あらばわれによせなむ玉のひとつを
月花のみやびをかはず御代なれば心のつかひ長くたのまむ
かりそめの芦の一葉の舟あれど幾世の人かわたしきぬらむ
ゆく末もかへる都もどほつあふみ濱名の橋ぞうき渡りなる
山人もなほよに通ふ柴橋のみちひとすぢのかたもはなれず
いたづらに年へぬる身を我もまか思ひぞ渡る宇治の川ぼし
思ふどちひとつ霞をくむがうちにはな露のよとなりけり
笹のはの露ばかりだに足乳根のいさめしものを酔に酔つゝ
過酒をいましむ歌とて乞ひけれ

傲大伴卿讚酒歌十三首
菊の上の露ばかりをば重ねつゝくめば薬のさけとこそさけ

あら玉の年の始に千代といひてとるさかつきの珍しきかな
吳竹の嬉しきふしもうきふしもまづ酒づきの影によりつゝ
みやびたるうめを浮べて汲む酒の匂をいつの世おか忘れむ
花のもと紅葉のかけにわきいづる酒の泉をくまざらめやは

ひさかたの月もかげさす盃をいかなる人かいなどいふらむ
月の夜の舟とさしたる盃のあくるのをしき物おぞありける
霜氷あられみだるゝ冬の夜に酒てふものゝなからましかば
よの中の豊けきからに酒くみて酔泣するが四方にきこゆる
み薬の長とたゝふる酒くみて酒くむをさとなりにてしむな
若草のつまをみつぼの新まぢりこゝの度まで重ねつるかな
みわすゑて祈れば神もうけひくゝ酒てふものゝ功ならずや
海にすむ小がめ大がめに湛へつゝ酒のくむべし萬代までに
桑の田のよしかはるとも味酒の海としならば嬉しからまし

飲中八仙

知 章 我駒のふねとも人のいはいへ酔て眠ればとまりまらずも
汝 陽 いまはし鯨なすまで呑むからに川もあせつゝ山もくまむ
左 相 小車を見ればともしも願はくゝ酒のいづみに道をかへてむ
宗 之 ひさかたの月人男いささゝむ我どりもてるたまはさかつき
蘇 晋 世中の友のともめじゑにかける彌勤も酒の友にしありけり

李 白 君めせどなほ大舟のゆくらく仙人さびて酒のうちをり
 張 旭 わが髪のみふでの林くものと烟のごとくおもしろの世や
 焦 遂 醉泣になくいの常われのよ舌のよみも忘らえにけり
 玉 玉といふ玉の中にもさまの緒のながきにまざる寶やはある
 かはかたの花貝ごも嬉しきを拾ひてけりな磯の老らたま
 七車てらすといふもみがきたるひとつ心のたまにまかめや
 みな人の心ひとつの槌よりぞ千々のたからうち出すらし
 身おこもる千々の寶のつきせぬのこや天つちの恵なるらむ
 あしのはににかけて遊べば津國のなにはの事も思はざりけり
 都いでて今宵を旅のにひまくらつゆもあらしも心あらなむ
 われゆけば又あふ人もなかりけりあはれと思へうつの山松
 都よりともなふ月もかくろひて一人をみつる木曾の中やま
 たびの只つかれの鳥の心ちして草おのみこそ假まくらまれ
 どいめてもどまらぬ袖に旅衣ぬひてきせつる人さへぞうき
 逢坂のせきの清水にぬれし袖かきかぬ程のわかれともがな

山 家 みやこ人のいまれども山藍のよあそみぬべきわが心かな
 山里にいほり二つにむすばねと月みむためのみねの柴がき
 月花をやがてま山のごよみあてほどけき年を送り来ふけり
 山 家 露のまと思ひいりにし松の門てけむすまでに年をへにけり
 山 家 水 ろりそめの柴の庵のむまびおき岩井の水のあるにまかせて
 山 家 雲 榎のみの獨のみおもあらざりき軒端のくもの宿るおもへば
 田 家 もいどせに餘る翁もありとさく田づらの里に住よからまし
 賤がすむ田づらの里の笹ぶさの假そめなぶら幾よへぬらむ
 田 家 祝 やそついき年豊なる小田の家に鳥の尾ながく牛の肥えたり
 閑 居 居 文机によればまづけき石硯かきならしつゝ今日もくれけり
 閑 居 松 ふづくゑの塵と積れる言のはをなれし軒ばの松のえらむ
 閑 居 水 くみあぐる釣瓶の雫えばらくの音をのこすも寂しかけり
 幽 居 世はなれし庵の門おも竹馬のむかしの友のあやひかれけり
 さゝがにの糸一筋のよぎてこそ友まつの戸の塵はらひつれ
 林下幽樂 大あらしの森は陰ふあらねども隠れぬ草は庵まづかなり

あさ鳥のさち出しあどの木此下の我身ひとつの時ありけり
貫 之 土佐の海此浪のはてまで言のはの玉つみし舟のふな君ぞ是
貫之交野花見のかた

年をよるなごさの櫻はる毎にけふのまどるや思ひいつらむ
義家朝臣名古曾關茂こゆるかた

ちらさずばことばの花もちらざらむせきの嵐の心ありけり
壽 老 末遠くいかまはしとぞ祈らるゝ思ふことなきみよに住へば
尉と姥此かた いまよりの千年を猶や契るらむことの葉かはす二本のまつ
萬歳の賛 山びこもこたへするまで萬代のまらへぞ高き君が代此はる
翁此かた うちとけし聲さく時のかのつから心もはるになる瀧のみづ
三 番 叟 みな人の齡を此へのこゝちして世にめづらしき鈴虫此こそ
頼朝ふし木がくれ

かゝやくや鎌倉山のあきの月あがくれたるの宵のまにして
義家弓流のかた

かすかなる弓張月にひさかへて流るゝ名こそ耀やきあけれ

宮島おて經政奇瑞の圖

月さよみ波のまらぶる聲すれば神もふると思ひいつらむ
備後三郎櫻木にものかきたるかた

今も世に匂ひけるかな花此雪に跡つけたりしうぐひすの聲
藤戸の渡の圖 なみならぬ名をたてゝしも我からと薬おすむ虫のねをやなくらむ
佐々木梶原 柴舟のどくさして網代木にいさよふ紅葉かくれける哉
西行白うねの猫もちるかた

墨染の袖にふさはぬそらだきをばらへば不二の烟たつなり
仁和寺和尚かなへかぶりのかた

戯もすぐれバかくぞあしがなへ心にすゑて見るべかりける
伯藏主のかた 狐川みづのよごまで行くべきをうたてにほへる浮草のはな
うせめの命のかた

岩戸あけしうせめの命いまの又家にこもれるかたよく此神
伊勢龍門瀧みるかた

布さらす山姫のみやまうつらむ言ばの玉のかゝるちざりを

紫式部石山ふて源氏つくるかた

なつかしき其おも影や残るらむ月と波とのあはせかゝみに
清少納言簾をかへけて雪みるかた

玉簾かゝぐる袖のそらだきみにはひあひけむ峯のまらゆき
浮舟君のかゝ 雪の夜の空に有明のつきのみや此うき舟のはてのまらむ
雪中常磐子のかた

松花葉もまぼし操のかくるを雪はまたおも思ひとりけむ

四君子の賛 君子の名ひひとつおを薫りける草木も竹もけぢめこそあれ

四睡のうたに 悟れるいたゞ緑子のかたはらに心もおかでとらねぶるなり

虎溪 三笑 やま蜂の巢をもる心あくがれて思はぬ世おも出むとやせし

張良のかた ふみ見て此のちに思へば沓こそわが冠のはじめなりけれ

唐喬にとまり舟ありて鳥とぶかた

月おちて鳥なくてふ唐うたもこゝろにうかぶとまり舟かな

寶船のかた ももちの寶をつめる大船のとゝのふ家のかせにこそよれ

梶の枝に鞆あり

秋ごとにかけて手向くる鞆の敷そらに敷へて星やまらむ

六歌仙

僧正遍昭 よしみねのよしと仰がれし月の猶あまねく照せ萬代までに

在原業平 袖ふれしかた野の櫻小野の雪よるづ世ふとも猶にはふらむ

文屋康秀 とほつ世に高くまらべし山風の聲の草木になほのこりつゝ

大伴黒主 君がみし影しのあらば鏡山ちたび八千たびたちもよらまし

小野小町 小野山の神もやまぼし世おも出て六くさの中の玉かづらある

喜撰法師 うち山を心のうちにながむればはるかに照すありあけの月

近江八景

幸崎夜雨 ふく風の色ハ梢にくれそめて雨になりゆくからさき此まつ

石山秋月 秋あすむ水海とほくてる月をいしやま寺にたれか見るらむ

三井晚鐘 つり舟のかへさ忘るゝ夕なぎにひくや三井の入相のかね

矢橋歸帆 ものゝふの矢橋もやまき浦波にうたひてかへる千舟もゝ船

粟津晴嵐 海づらも粟津の松のみどりあて雲をのこさぬ夕あらしかな

勢田夕照 旅人や勢田のなごはし急ぐらむ都のちかし日のかたぶきぬ

北良暮雪 みねつゞき暮るゝ夕日のよそめおも紛ふ色なき比良の雪哉
堅田落雁 きり深きあした夕べにくる雁も思ふかたゝの違へざりけり

六所玉川

山城 駒なべていざ見にゆかむ蛙なく井手の川への山ぶきのはな
攝津 卯花のさきそめしより白波のよるこそなけれ玉がはのさど
近江 あきはぎの花の影さへにはふかりぬれて渡らむ野路の玉川
陸奥 陸奥の野田の玉がはたまにきて汲むとすれば千鳥なくなり
武藏 たま川の里の松かせさゆゝて夜の月をもさらすなりけり
紀伊 高野山みづの心いぢらねども玉といふ名のきよげなるかな

十二支

子 かきまらずさかゆく家此鼠の子大國ぬしやまもりますらむ
丑 食國の民をばたまくわらまきの功あるみをうしといはめや
寅 虎をしも手飼になしてとこしへにまむ人ありとさくハ賊か
卯 つくくと思へば月此中にまむ兎のよゝの友あしありけり
辰 潜みても遂にいたつの名にまると天つくもまに顯れにける

巳 故郷の垣ねみ残るくち繩の名にあふからや身あひまむらむ
午 天さかる鄙の牧よりひかれきてみをかざり馬いかい思へる
未 世中にひつじのあゆみ思ふべし心すべしやたれものかれむ
申 平らなる世にたち出て木葉猿このはあひわらぬ衣あづく也
酉 つかへおと出立の道の正しきに鳥も空ねの名乗らざりけり
戌 かのづから戸ざし忘るゝ世あひて門守る犬あのとどかるらし
亥 かるもかき伏猪の床の夢のまもたけき心のゆるさゝりけり
述 我上におもひあるこそ怪しけれ不二の烟もたゝぬ世にして
懐 懐 恐ろかなる我とや人に劣らめやきみにつかふる心ばかりの
懐 懐 忍ぶればまのぶ心にかへりきてすぎもはてぬの昔なりけり
夢 夢 ぶりぬればふるきを恐ぶ友なれや玉もかはらもあなじ心に
無 常 秋の夜の長く在經て同じくの五十歳の夢をふたさびも見む
世中のつねなき風いめに見えて折々ひとをおどろかすらむ
櫃の實の二つなき物をいゝにしてかくはかなくも結び初けむ

獨體の書に わかなつひ少女も思へ野ざらしのやがて其みの姿ならずや
釋教 水 その上北雪のま山のまたりを結ぶに消えぬ罪なかるらむ
わしのをの山下とよみゆく水を空しと説ける聲かどぞきく
六祖舟にのりさる處

波羅密の時來れりどさす舟のあとのみなとにさわぐまら波
誕生釋迦 ひむがしにかく流れよと法此みづ龍王しもそゝぎそめけむ
出山釋迦 雲ふかきま山を月のいでしより闇をらぬよと成にけらしも
涅槃釋迦 古へ此鶴の林のもみぢ葉のちるぞめでたきいはれありける
地藏尊を新に作りて開眼の供養に

あぢ尊とあな頼もしや無垢の地に隠れいますも願をふけり
柿本社 石見のや高津の山のみねの雲かけて仰がぬ日なかりけり
春日社 かすみたつ三笠の山にさく藤の長閑き色を世にこぼれける
稻荷社 いなり山みつの玉垣みつあがらひとをへだてぬ光さすらし
北野宮の萬燈會に

不知火の筑紫ふらぬ神垣につらねてともす光をぞ見る

神 祇 たちばなの小門の汐せの底筒男たのむこゝろも千尋也けり
うちなびく一もと薄ことのはのみちあも仰げ八千矛のかみ
廣前にかけてくもらぬます鏡いやますくくに仰げもるびと
神 如在 誠もて祭らば神のいますべし七つ緒やつ緒よしひか老とも
大嘗會の夜に 悠基主紀の宮にまめゆふ小柴垣一重あなたや神代あるらむ
武 威 おは神のいはへる國のますらをの矢先に向ふ仇あらめやの
神國の威光人の智仁勇あるをかぢ尊をみて夷船どものかへりしとまなればことほぎの歌
をと人の乞へるに

鳥の跡も横ばしりする夷らがすくなる國にむかふべきかは
鳴神の音にきこえし國おきて畏おさまらめえみしらがとも
日の本に及ばぬ市のねがひかな命ひとつをうるものおして
あし原の風に向へるえみし草ふすより外にあらじと思ふ
えみしらが跡をきよめて相模海みちくる汐にうたふ舟びと
武運長久 治れる世お忘れぬものゝふの八十の街のながくひさしも
八幡やま雲のはたても豊ふてとほくさかゆくものゝふの道

六十賀 里につく六十の杖に千世の坂こゆべきふしも兼て見ゆらむ
 ともなへる軒端の松ももろ共に若さへりたる色に見ゆらむ
 六十一賀 六十あまり一つのやがて萬代の始といはふやどののしき
 する遠き百世も千代もくれ竹の此一ふしにまるけかりけり
 七十賀 七くさの寶といふもまのじかし千年おゆるく玉の緒おれば
 八十賀 みかどおも杖ゆるさるゝ年をへて終に千年の坂もこゆるむ
 祝 ますらをの手おまく輛の浦おても波たゝぬ世をまるべかりけり
 葛城やくめの岩ばしかけはてゝ苦むすまでもみ代ハ動かじ
 つる龜の千年へよかし國つたみかの寶此みをまもりつゝ
 山川もよりてつかふる我きみに誰かの千代を貫がざるべき
 寄 天 祝 月と日の神の心をあはせたる天つみそらのくもりあらめや
 寄 日 祝 くもりなくてり渡るらし日のみ影天地人のあらむかぎりの
 寄 神祇祝 なびかざる草木のあらじ君が代此惠のつゆに伊勢の神かぜ
 うま酒のみわの神杉いくひさど君をぞ祝ふ三輪のかみすぞ
 寄 國 祝 天地とちちのれけむ始ありてはてなきものや芦はらの國

たづまひて龜遊ぶなる秋津洲の千年をむともすみわかざらむ
 寄 道 祝 人も我も千世の古道たちかへり正しき跡をふまむとぞ思ふ
 寄 劍 祝 神代よりはきをめまして身をさらぬ太刀こそ長き守也けれ
 寄 書 祝 をちちの友も日ぐらし文車の唐やまど書つむがまに
 寄 松 祝 さぐ宿の松にも千代ハ見ゆれども主人がらこそ色増りけれ
 萬代のこゑたかさごに聞ゆなり神代のかぜや松にふくらむ
 とはつ親のいつの子日にいくよとか祝ひてうゑし軒の高松
 寄 竹 祝 九重のうてなの竹をはじめあて直なる國におひまげるらむ
 寄 鶴 祝 仙人のすみかはなれぬ白鶴も君が御代おひられていつらむ
 寄 龜 祝 ちひろある水底よりも通ふらし君をともなふ龜のこゝろハ
 新 婚 祝 雛鶴のあそふかけをもやがて見むゆたかにたてる相生の松
 元 服 祝 けふ更にたちのびてこそ見えおけれ千代をまめたる國此若竹
 仙 家 我山の千年の友をあまさめて鶴のゆきかひたゆる日もなし
 蓬 菜 山 心をばこゝに遊ばせていく藥とらばとらなむ龜のうへ此山
 五常の歌と或人のこひけれバ

人の上おまらずしてやいありぬべき松も五葉の色を常なる
 心だにむなしかりせべくれ竹の千世も八千世も重ぬべし也
 心静延壽 松により竹にむかひて静なることろくらべの幾世なるらむ
 世治文事興 どりくくに歌ひつれけり君が代の文のはやしの木こり柴人
 幸逢太平代 たをりきて長閑にかざせ春秋此花も紅葉も御代のたまも此
 君が代にあひづの里も西のうみの海士が磯屋も賑ひふけり

長歌部

詠簫聲和琴歌并短歌

菅のねの長さ春日ふ、窓此内に一人しをれば、老人のねぶりをぞすむ、眠らむもあやなき
 わさど、琴とりてかさならまれば、はしきやし簫なきて、おのづからさらへ通へば、琴と
 らぬ日のなかりけり、簫のいかなる鳥ぞ、山深き谷に生えて、かくのごと風流にみやび、
 かくのごと情我まりて、老をしるすてさりけりな、まが爲に梅をうるそへ、笹竹を窓にう
 つさむ、今ゆをち契たのへず、琴とらば必とひて、むらぎもの心すさめよ、春此簫、
 琴とれば簫さなくうぐひすのこひしき時にこといとらまし

詠閑居秋來歌并短歌

言靈の幸はふ國の、安御代に生れあへりと、人毎にさをひたてつ、言靈のさまひろふめ
 り、我のしも其白玉の、一つだにいかでくと、浦にいで渚にたちて、もしは草かささぐ
 れども、とり拾ふ玉しなれば、愚なる身をばやさしみ、竹此戸をさしかためつ、獨の
 みながむる程に、八重葎所え顔に、おひまげりをぐらき窓を、打たしく音こそすなれ、あ
 やしきや誰かのはむ、野狐や我をはかると、いよ簾かゝけて見れば、秋こそ立來にけ
 らし、草に木ふ夕風さわぎ、ふさ乱す露ばかりこそ、まき妙の衣の袖に、玉のかけつれ
 かくろひし草の奥にも尋ねさてうづら衣にあきかせぞふく

詠鷹飼長歌并短歌

春山の霞のはらけ、はのくと明る空より、さは姫の翡翠の髪、青柳のかけたちならし、
 片岡の梅の花毛も、香に匂ふこなたかなたに、たつどりの小鳥とりかた、ゆく道の松に木
 居とる、紫の藤府よびすゑ、雲雀毛のよりかまかぞへ、一昨日も昨日もけふも、蓬さく野
 邊に遊びて、はうまやうの毛の永き日も、くれ方の春にしなれば、忘れがひ餘波を多き、
 どやいの卯月さぬれば、年毎の八日薬師の、日を敷へ薬のみづや、手習のいしもとらせ
 つ、夏飼のとやくらげなる、五月雨も餌を系がひつ、武夫の母衣毛おふれば、初秋の風

うちふけ、すゝ毛に小鈴とりつけ、足ひきの山口まつり、ま草かる野へにはなせば、
 おもしろき左羽右羽、ひともどりこもつちこへの、こまかなる羽づかひするに、人も犬も
 空を見するて、落草のかきをぬきたつ、さじ鶴かきもてくれべ、小山田の稻葉の波を、たち
 はしる鬼も得たり、いと子ともまばしいこへと、ゆふづく日さすや岡への、松かき小柴
 をりしき、もたらし、瓢の酒を、とりくへに汲むぞ樂しき、冬されば時雨ふる日も、木枯
 の寒さあしたも、うちつけにかり枝はうし、白榜に雪ふる道を、狩衣はるくさぬる、小
 汐山かひある時と、交野ゆく天の河原に、鳥いかだ稀に見てし、むらぎもの心にとりて、
 さまれかねつも、

かへるさゝい淀のわたりにさす舟の月のよするも面白さかな

千々廻屋集終

わかくと序

時の句を題にてよめる歌ども家々の集にも見えたれど全首の意を三十一
 字にこめたりとかほしさいいとくまれなるを二百余首のから歌をこど
 くよみかなへ給へるなにがしの君のさえこそし方行末にもたぐひ
 なく覺ゆれましてかの詩どもの中に深き情のさだかにわきまたきも少
 なからぬをかくひき直し給へるによりて言外の餘韻とかいふべきも明ら
 なくさげるとをやくておそ此君の和漢の學にたけておはし、程のかし
 はかるれかの趙氏がもたりけむ連城の完璧といふ此巻をやいふべからむ
 おはれをかしあなほもしろの言の葉や

和漢草

五言絶句題詠

千種有功

題袁氏別業　み園守を此、泉に手なふれそくまハ酌まなむ己がまに、
 夜送趙縱　月かげに玉の光をちらしつゝ、みづの江どはくかへる波かな
 易水送別　古のみづのさむさしかはらねハ別るゝけふハ髪さかだつも
 贈喬侍御　都いでて駒のひづめもつくし、瀉かしらあひよるおきつ白波
 子夜春歌　むすばるゝ心もまらぬ道のべのやなぎの糸にはる風ぞよく
 南樓望　故里ハかすみのおよそになりはてぬ鶯のみやまゐるひとにせむ
 汾上驚秋　白河のせきふくかぜの秋のこゑ悲しと思ふ子にハきかせじ
 蜀道後期　いつしかと縣の四年たつあきを風ハみやこに先やつぐらむ
 照鏡見白髮　いくとせか心につけし青雲をつひにまらがの影もはづりし
 同洛陽李少府觀永樂公主入蕃
 雪のうちにおさふす里もさは姫の遊のころも春やきぬらむ

静夜思　もとゆひの霜もむすぶや旅人の身をさらしなの里の月かげ
 怨情　白露の玉こさちらしくはまゆのいとかく何にもと思ふらむ
 秋浦歌　鏡ハハ霜のふるだにわやしきを干すぢかゝれるさきの白糸
 獨坐敬亭山　花鳥ハさもあらハあま窓の内にさしいりし山の影を動かぬ
 見京兆韋參軍量移東陽
 荒沙もみつればかへる磯にゐてひとり涙のたまひるふらむ

臨高臺　高殿にいま見し人ハかきたえて夕日ハかへるむらがらす哉
 班婕妤　ふる里此まが此花園ハ此しげに人ハきくらむうぐひすの聲
 雜詩　鶯此なみだかわかぬ春くさの秋またいかにつゆけからまし
 鹿柴　山びこハ誰にこたふる聲ならむ夕日すくなき苔のむしろに
 竹里館　琴とれハ今宵も月のてらしきて友をならぶる竹のかげかな
 長信草　年月のうさを種ふておふる草ハ玉のみはしも隠すばかりに
 少年行　風流士が鞆をわするゝ駒の上おまたり柳もあかぬいろかな
 送朱大入秦　みをさらぬまもりなまども年月の心さすがを見するばかりを
 曉　鶯の恨みがはなる聲おても花のあらましをみるくぞありける

洛陽訪袁拾遺不遇

洛陽道 都どりふるすの春を去らふらむ梅まづ句ふ江あけうくども
 長安道 をしむべき春の限あなりぬれどいはぬ色なる里のやまぶき
 關山月 石文やつがろのおくに月ふけて雁ときしあさの聲かも
 送郭司倉 よきくの袖北上にもみつ汐を君にえたがふ月のまらむ
 答武陵田太守 鞍馬山いでてまのぶに恵まれし杖のわまれじ國さかるとも
 孟城均 かくれまむ笠ぎの山のもり此なり柴人あらであふ人もなし
 鹿柴 夕風に松のふる葉のちをひてを鹿の跡もかくるひあけり
 復愁 から衣うつ人たえてふる里のまつむし此みや今のなくらむ
 絶句 花鳥のおもかかさえて江の水のうき草のみやあすの残らむ
 長干行 つみどるも中々ならし蟹の子が家をも名をも名のうその花
 詠史 空蟬のぬけの衣を去らずしてかへり見らむと思ひける哉
 田家春望 すさかへす門田の水北濁酒いつまでくまむともなしにして
 行軍九日思長安故園

251119

見謂水思秦川 白妙の袖のよるひにひきかへて菊もうき世此秋を去るらむ
 故里へ涙かきながす河みづのいとほはるかと思ふばかりぞ
 登鶴鵲樓 高どのいたかき限をつくせどもなほ故里のゆめを見せける
 終南望餘雪 宮の中のとばりたれたる夕べにもさやにみなとの山此白雪
 罷相作 さけの名の聖を友と見る門のくひあをあれ人たゝかず
 奉送五叔入京兼寄基母三

山のはの夕日にかゝる薄雲のさえかへるとい傳へてしかな
 左掖梨花 梨壺の花にはひのかくれてもなほ大君のをでにちるらむ
 九日陪元魯山登北城留別

時へとかへる鴉の路みればさへあやなもよほされつゝ
 平蕃曲 草此はら烟たてねばせきもぬず夷ごとくなびさふすらむ
 其二 唐國をまつるへましてさらし姫後のまるしにきてし鉾はも
 逢俠者 ますらを此とおこる見ゆる隠まがにたらしむものを鶉の聲
 江行無題 雲霧にやまのいはりをとさす哉かりにも塵の身を厭ふらむ
 秋夜寄丘二十二員外

聽江笛送陸侍御

夢のまゝ通はぬまどの月にゐて誰まつのこの音をさくらむ

江此水のおもひもふかき獨ねふかねて去らるゝ笛のおゑ哉

聞 雁 故里をおもふ心やさそふらむ雨にぬれてもかりの來にけり

答 季 滄 閑にて鷗みなるゝさあの戸もさすがみやびの友のまつらむ

婕 妤 怨 みはしにの柳の眉もにはふらむ笛のねさそふ春かぜをふく

題 竹 林 寺 またや見む竹の林の雲けぶり立居定めぬ世にこそありけれ

秋 日 故里へいなばのかけのさのむれど夕風ならで音づれもなし

和 塞 下 曲 ふりたつる弓末に餘る雪のうちには雁もいつちう落ちてゆくらむ

別 盧 秦 卿 なにがしの風におとるか一夜酒身を絞りたるかひもなくして

幽 州 翅なき鳥かりあやみさかとのくもの通路よそに見なして

三 閭 廟 江の水に舟ぼたたく人もなしもりの秋風おどばかりして

思 君 恩 蝶鳥の春くれがたになりぬればはな見車もいつちいにけむ

登 柳 州 蛾 山 見渡せばあらぬ里さへかまらなるみ山の秋の日影さびしむ

秋 風 引 秋風のふくだにゐるを雁の聲うさたび人のみよのまもなし

鞏路感懷 駒どめて太刀此緒とかむ宿もがな去らぬ渡に日暮にけり

古 別 離 すまの浦もあそぶ限のありぬべし岡への宿の跡なもとめを

尋 隱 者 不 遇 雲ふかくいりにし人のかけたえてさき物の香を庵に残れる

宮 中 題 花さけど猶なぐさまぬ秋の山鳥羽のたのみを誰にうらまし

勸 酒 くゆやくめ花に限らぬ雨あらし移るひぬべく誘はれむ身を

秋 日 湖 上 かもひかね夕べの波に言とはむらさきまづみあるよおの浦舟

題 慈 恩 塔 みさゝざり昔みどりあて吉野山はたてを残をみぬのえら雲

伊 州 歌 丈夫のよろひかたしく夢の中に我をいさなへまどの月かけ

其 二 くだかけをさつあどのりし言の葉も思ひぬはせつ鶯のこゑ

哥 舒 歌 まめゆひし軍の君のみいつあひ野べ此稜もかられざりけり

答 人 曆なきわが山住をおどろかす人のたが世の民ふかあるらむ

七言絶句題詠

獨 中 九 日 けふなれど菊もかをらぬ盃になみだな添へそ天つかりがぬ

渡 湘 江 北へゆく水にさかひて春のさぬいつちか去年の花の咲らむ

贈蘇籍書記 みちのくのつばの碑としな經そ妹がまゆずみ色やかはらむ
戲贈趙使君美人

さくらがり君が使といひなしてはなの袂にたちもよらばや
銅雀臺 たちまひし胡蝶も袖をまかりけむ思へば露の玉此うてなに
邨 山中此おもひまらへる琴のねぞ鳥への山のみねの松うせ
送司馬道士遊天台

送梁 六 鳥ならぬ身のかひまかむすべもなし葛城山にひそくまら雲
あすよりの離小島のみつをのみ君が千年のすがたどや見む

涼州詞 命あらば思出にせむえびかづら名にかふ酒も琴のまらべも
清平調詞三首 ひさうたの雲の衣にふはふかきねさくや見らむ月の宮ひめ

二 類なき花とささけむるこしの吉野のやまの栞のひとえだ
春風もどけきはなの臺にて國かたぶけの名おとをしけれ

三 客中行 稚の葉にもるかれいひのうき旅を忘るゝ酒の色おもある哉
峨眉山月歌 山まゆのはのみし月を谷川の幾瀬さしてうまはにむかへむ

上皇西巡南京歌二首

かさ此海此汐路の追手さはりなみかましとなりし舟上の山
二 沖つ波わけのぼる日をまちどりて大内山よりつ代のことる

関王昌齡左遷龍標尉遙有此寄

をちかへりなけどもあかぬ子規つきに心をたぐへてぞやる

黃鶴樓送孟浩然之廣陵

こぐ舟の雲のなみまにいりはてゝ残る漣にたづどなくなる

陪族州刑部侍郎擘及中書舍人賈至游洞庭湖

かづさ瀉はてなき秋の恨あれやいづくかどはむ其つまの君

望天門山

棚機のやどりやいづら久かたの天の門ちかく舟の來おけり

早發白帝城

朝鳥のどぶが如くにさす舟をおくるましらや跡になくらむ

秋下荆門

紅葉ちる宇治の川瀬にさす舟をひをよるとや人の見らむ

蘇臺覽古

高殿にうたひし人のかげたえてひしかり舟お月のみぞさす

越中懷古

かまくらや榮えし人のあどゝへば雨に友よぶ山ばこのこゑ

與史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛

もの思へとふく笛あらし時鳥さなくさつきに梅がはなちる

春夜洛城聞笛 都びとなど心なきふえのねぞ折りしやなぎのかけぞ戀しき
 春宮曲 さは姫のかすみの袖に霜さえてむらぶに見ゆるはるの柳う
 西宮春怨 をすの外月と花との夜半なれど琴の下樋に秋ぞこもれる
 西宮秋怨 初秋のあふぎもつらし月もうし彦星ならぬきみへ來なくに
 長信秋詞 手枕にいま見し人のかきたえてつらくもあるか燈火のかけ
 青樓曲 紅のちりをけたて、ゆく駒もあどにこゝろをひくまらべ哉
 閨怨 かばつかな誰にかたらしむ青柳の糸より見えし人のうきふし
 出塞行 草もたい白髪なす野此わびしきに駒のかしらを誰進むらむ
 從軍行三首 わた心いふおせよどか烽火守あら野此かぜに笛のねぞする
 二 故里をいつかへり見む覺東なよろひの袖にこけいむすども
 三 つはものゝ身の捨處さふゆゑとせきのと山の月のまゑらむ
 梁苑 くれ竹のいつきの宮のあれおけり雲井の風のとほで幾世ぞ
 芙蓉樓送辛漸 故里へ手にとるばかり傳へばや氷のあらぬ玉此こゝろを
 送薛大赴安陸 草枕うきにやつるゝ身をわけていと山路の雨にぬるらむ
 送別魏三 木實さへ色づきふけり山かげの寒き月夜にましならなくらむ

盧溪別人 吾せこの老とやならむ山たかみましらなく夜の月を眺めて
 重別李評事 手弱女のたちまふ袖のかへるでも夜やふけぬらむ露ぞこゆるゝ
 少年行 山ふての薫らぬ雪にまがひなんちるどもよしや里の梅が枝
 九月九日憶山中兄弟 うちつれて高きにのぼる此夕へ片われ月をわはれどぞ見む
 與盧員外象過崔處士與宗林亭 ねぶりのし手飼の鶴もかどろきて人をならさぬ松のかけ哉
 送韋評事 がちすゝむ駒の千里をかけるどもよわる夕日に袖濡すらむ
 送沈子福之江南 遅くどく梅さくはるの思ひいでよ北に南にたちわかるとも
 春思二首 ちめ柳にはふみやこの春の風などやおもひをよきて吹らむ
 二 まばしわが心とまがな花かけにあそぶこてふのかろき姿を
 西亭春望 笛のねもおもひの色も水海にいくまをまでかみち渡るらむ
 初至巴陵與李十二白同泛洞庭湖 契ありてこの湖のつさに見つふねのまに、誰をたづねむ

送李侍郎赴常州

盃にかくさしむかふ君なれどあすの越路のやまへうみづら
岳陽樓重宴別王八員外貶長沙

封大夫破播仙凱歌二首

遠つ人かりの玉章まづかけて雲井にあかむ名こそまゐるけれ
二 えみしらにふもどしかけて弓刀あめに洗へば月ぞてらせる
昔宿烽寄家人 せにかはる春も春かひ思ひやれ涙ふちなまたび寐なりけり
王關寄長安李主簿

春の猶かゝる里もくものを故里びとのことづてもせぬ

逢入京使 言傳のはかなきものゝいかみせむ手にとる鞆の筆ならなくに
破 中 作 こゝあてもかはらぬ月のすむ物をいつら夕げの烟たつらむ
魏州後亭送李判官使赴晉絳得秋字

うまやちのまゐるに袖を濡まらむ昔此雲をみづの上はあき
送人還京 諸共にたつちからなき老鶴此雪に跡つけてねおそなかるれ

赴北庭度隴思家

故里にとびかけりてもつげなむ鳥のあと見ぬ歎するとの
酒泉太守席上醉後作

送劉判官赴嶺西

つるぎ大刀光をちらすゆふ霜もきえてかなしき笛の聲かな
夏もやゝふけゆく山にさく笛の鹿のねよりも悲しかりけり
山房春事 いにしへの宿のなごさの櫻花かりくらしけむ人もいつらの

寄孫山人

花さかりとぶ柴の戸に入もなまじ塵にやまむる雲やかくし
贈 花 柳 わたつみも山も心のうむくらむ天くだりつる糸たけのこゑ
重贈鄭鍊 故里のぬさぶくるこそむかしけれきよき心の風やこもらむ
奉和殿武軍城早秋

解 悶

瓜見れば妻ぞこひしき故里のおま野わたりの人もあはなむ
書堂飲既夜復邀李尙書下馬月下賦
あふさかの關の清水に駒とめて猶はたくまむ鳥のなくとも

塞下曲二首

二

送宇文六

三日尋李九莊

九曲詞

除夜作

塞上聞吹笛

別董大

送杜十四之江南

寄韓鵬

九日

題長安主人壁

送人使河源

涼州詞

九日送別

洛陽客舍逢祖咏留宴

少年行

江南行

軍城早秋

重送裴郎中貶吉州

送李判官之潤州行營

春行寄興

歸雁

登樓寄王卿

酬柳郎中春日歸揚州南國見別之作

おきしらも臣もたへて韓國のみつぎかやく口の本つ國
 いくさ人こけむす屍つゆちりて百濟の野べに風やふくらむ
 雁さおもおくらぬ花の都いでてひとり南のうみわたるらむ
 みかづきもこゝをせにぞ思ふらむ小舟繫ぎし桃の下いは
 春駒の足のひまなく來しかども秋すぎぬらしかるかやの關
 燈火もかしろの雪もさむき夜お迎へぬ春のくるがわやしき
 ふるさとにある身なりせば笛の聲面白げなる月のこの夜を
 別にいかりもなくらし天比下友をつらねんさきと見ながら
 長き日をかちとりくらし水鳥の浮寐定めぬねをぞなくらむ
 うらやまし鳥も時をわらそはで辭にすめる姑射此やまうげ
 鄙にゐて二度三たびさくの上比露にたもををまぼるらふ説
 まぢうくも遠くもなるか交をおがねにむすぶ世の中のみち
 ひきとめむまへなかりなり行く駒の跡だにかくれ糸竹の聲
 春比色もいたらぬ里に青やぎの此ひとふしを誰つたへけむ
 盃お浮べし君が出ていなバかはらよもさもちらむとすらむ
 醉にいでて旅のうき世を忘るれば時の鼓もたおえざりけり
 宮人にこまをならべて狩ころもかへる軒端の月やもるらむ
 大鳥の山もつらしな江の水に妻まつをしのこゝろ知らずて
 あぢむらひ今か渡ると關の戸に弓はり月もかけてまつらむ
 山どはくましらなく江の夕風に一葉とうかぶ舟ぞかなしき
 鶯のこゑのつゝみいあどにして草にさえゆく雲雀毛のこま
 鳥ひとりはなに昔をかたらひて志賀のやまぢの心ぼそしも
 夕月雁かへるらむ琴のねにひきもとめをやいつき鳥ひめ
 君があたりうち見むとすれば雲とちて枯もまめる秋の雨哉
 ゆさかひの沙の満干のはどなれど又たのまめや花比えた蔭

送魏十六還蘇州

きりくを今宵なくおも増るらむふちて音なき峯のえら雲

會山送別

君がゆく遠山まゆの色見えて月もこよひのうきわかれかな

寒食

うめ柳いろもくれぬるみ園よりさらに花さくともしびの影

送客知鄂州

難波江の春にわかれてゆく舟のすまのうらみをとふ人や誰

宿石邑山中

ともなへる月のまぼしに隠るひて谷の音さびし木會の山中

送劉侍郎

生死を思ひたどらむ山路おもましらばかりの鳴てとふらむ

楓橋夜泊

あけぬるか長良の堤つきあちて橋本でらのかねひくなり

聽角思歸

ふえのねに夢も涙もくだけぬるふるさといかゝ有明のつき

宿昭應

殿北中に連るる星の影もなしいつら月日のとこしなへなる

湖中

江の水のうらみも深き一ふしに名もえらぬ鳥此聲合せつゝ

夜發袁江寄李穎川劉侍郎

夜舟こぐかい此零のそれよりも我たまくたく猿此三さけび

寄楊侍御

紅の日かげのいともかけし身此かはる白髪をわはれども見よ

泮河曲

風たちて柳はなちる長づつみなぐめすてゝぞ今のかへらむ

聽曉角

月ふけてゆく笛此ねの悲しきに鴈のなみだのかち盡しけむ

夜上受降城聞笛

丈夫とおもへる我もあし笛にえなえうらぶれて月を見る哉

從軍北征

山たかみおろす嵐の横ぶえにたつ人くさのまをれぬるかな

楊柳枝詞

青柳の花の雪ちる宮のうちをかいまえれども見る人もなし

與歌者何哉

雲の上にもと見し鶴のよぼはずバ却りて物の思はさらまし

浪淘沙詞

つぼくらめ道おやあひさ吾せこのをそのみやび男闘も思はぬ

自郎州至京戲贈看花諸君

にぎはふやちまたの柳うめ櫻ひらけそめにしすがはらの宮

涼州詞

まら草の荒田となりて年ふるをなとすき返す人なかるらむ

十五夜望月

月清みまだねぬほどのえるけれどいづくか袖の露の増らむ

送盧起居

ひむがしの山ふところの遅櫻せめておくらむ君がかさしに

嘉陵驛

まら河の水に白髪のかげを見て猶ゆく末にしのあをうみ

漢苑行

わくらには雲井の春の色を見て鳥おもまかぬ身をおもふ哉

塞下曲

あらわしをねらふ夷のさつ弓に心ゆるすなみなれゆくとも

又 天つ鴈はなつ一矢にいてしがなこゝらうるとも小鳥何せむ
 秋 園 思 わがせこが衣の閑と見しゆめの綻びてなくさりくすかな
 郡中即事 さふる子のこゝおなよりそみ越路の秋の思の色やまさらむ
 登 樓 江の水のこゑばかりおそ高どのに故里こふる人をとひけむ
 酬浩初上人欲登仙人山見貽

足なへのわが身かなしな遠山の雲につゑつく人もある世に
 題延平劍潭 み劔のまもの光やうかぶらむ八島のうらのつきのさむけさ
 聞白樂天左降江州司馬

雨もよにわかれて涙おそじく其ながれ江此水どならなむ
 胡 涓 州 波此上此かしてき道をたどるかお雲ゐる山の月を去るべに
 雨 淋 鈴 雨のよを思ひいづれば袖の上になみざる鈴の聲たてつなり
 號 夫 人 世に似ざる色香をおゝにさどふれば鞍馬の山のうを櫻ばな
 度 桑 乾 ふる里のいや遠ざかりゆく河のみなれし家も今のあひしき
 成 徳 樂 此さとの少女さびする一ふしに秋かせたちて露をみだるゝ
 漢 宮 詞 朝顔此花のうてな此去らつゆをいける樂と見しがあなしさ

夜雨寄北 かたらはむ時ぞ心ははれぬべき今宵此雨をむかしがたり
 寄令狐郎中 刈藻かくた力さへもなき迄に病て伏緒のとはずもあらなむ
 秋 思 みよし野の花もこしぢの白雪もいまの頭のうへにふりつゝ
 江樓書感 水の面に月のおしてのありながら人のかげこそ留らざりけれ
 楊 柳 枝 お我柳のいとにひかるゝ心かないもが垣根の草やうらみむ
 折 楊 柳 御車もひかぬ柳のうなだれておもなげになく園のうぐいす
 宮 怨 み溝水さそふを花のかざりにて人めも見えぬ宮のはるか
 宴 邊 將 關守の老ぬるものをあし笛のあしよし去らずふさふつる哉
 退朝望終南山 あれおける志賀の都に駒とめてむかしながらの山を見る哉
 華 清 宮 白雲のとぼりかゝけて高まとの尾上の宮をつきのもりけり
 古 別 離 醉をだにさまさずもがな君がゆく駒のうへよく春の夕かせ
 宮 詞 ちる花のなは世にいでて御溝水すゑくむ人の手に匂ふらし
 水 調 歌 日くるれば空にとぶひのうかを見て心の鼓うゝぬまをなき
 涼 州 歌 くだの聲こまのいなゝき競ひつゝ煙きりあふ秋にあふかな
 水 鼓 子 かれ艸の野べに花さく初鳥狩そでにははして歸りくるかな

雜詩 かもひきや此秋風をふくふえにわが黒髪のいろかへむどの
 初過漢江 年ふかきまの川のべの雪もよに霞をくまばおもひ出にせむ
 胡笳曲 山かげの月もわらはに今宵もや秣かるらしふえのねぞする
 塞上曲 つねふたゞ鎧の袖をまきたへの枕にさむきかりのこゑかな
 又 朝風おかしらの雪のちるを見てかゝみもどらぬ歎をぞする
 邊 詞 雁かへり氷ながれぬまくら川みやこわさりの花のちるらむ
 九日宴 ことばはむ此山もどに驚うる少女ばかりや急ひにもれたる
 西施石 まつら山くちせぬ石の心よりはるべの花のそでぬらまらむ
 和李秀才邊庭四時怨

雁なきで月かげさむしふる里にひとりある妻や衣うつらむ
 山風のみをたつばかり寒き夜お仇のよせくる火影をぞ見る
 又 宴城東莊 ながきよにみじかき實なにかせむ花の香にはふ酒にかへばや
 奉和同前 盃にうめいちりけり君も我もいつまで酔のさかりくらべむ
 宿疎陂驛 ふる雨の涙なりけり天さるひあひの長路のあきのゆふぐれ
 塞下曲 このさどい剣此林まもさえてくだのひいきに梅のちりけり

僧

院

山ぶしの衣にくもにつらなりて松おのこけのかつらさの山

から歌を題にして歌よまむこといづばかりよりか始まりけむ大江の千
 里ぬしの白氏文集の句おまりてよまれたるなどや始なるべき今少し早く
 もありやまけむ其後なむ定家の中納言をはじめ人皆よみいつることい
 成にけるさてこそ朗詠百首などいふものもいで來おけれ近き世になりて
 小澤芦庵が毛詩の心をよめるなむいみじうをかしきをそれはた目なれて
 はまゆぬる心地せらるゝを此頃やむごとなき君のよみいで給へりし和漢
 草を見れば今一際めでたき心地なむするや抑この君のよみいで給へる姿

の古の耳どほさふりにかたよらず又後の世のかたくなきるれりにまつは
 されをたけ高く一ふしあるさまになむものし給ひけるか、れは世中ゆま
 りてめでたふどびあへるをこの和漢草の唐詩選といふ書の中なる絶句の
 詩を五言も七言も一つも落さずみながらよみ給へるになむ此御歌どもよ
 めでたき事いふも更なりをかしきこともあはれなることも彼から歌に
 いたくまさりて思はゆるの我心のひく方のなしにやあらむかくてこそ藍
 よりも青く水よりも冷なりといはれあなめでたの言の葉やあなみじ
 のよみくらや

尙古堂のあるじ

和漢草終

日枝の百枝序

世中に山てふ山の多かれど山とは日枝の山をぞいふと昔吉水の僧正此
 よまれたるのさるも此にてげに此山にまされるのあらじのしまかひわれ
 ど此山の歌多くよめるをきかたおして難波の契沖の富士の烟の姿高く
 なる澤此底の心深く物せる百首なむありけるそれにつぎて近きある加賀
 の僧何がしが白山百首とて人のみせしにこれも雪ひとつをさま、く、お染
 かしふる言葉の色浅からずなむおのれを以てやと思ひ起してお此袖お歌
 此良材ともいふべきをいかでと求めいるにのふた嶺にひひきかはりて
 百のもののあひ五百千とるどもとどり盡きまじう陰高くまげりたればおあ
 ぶき手斧のたつべきやうも見えはつかにまづ枝のあら、く、しきを百枝
 ばかりあり得たるの人をらへなるべしよしやさはれ後おん人の山口をひ
 らくばかりおとてなむ

嘉永五年初秋

在琴峯るに

詠比叡山百首

千種有功

おやぞらお高く貴とき日枝の嶺の今のみやこの天のかぐ山
 大宮のまづめとなりて世をてらすひえのさう根の天地の神
 かゝる山此ありつればおそ君が代の平安城の造りましけめ
 君ませば山のうしろを改さめて日枝もおもてに成にたる哉
なむらへい
 此みやこひらけを福へせ唐土に聞えし山のおほひえのやま
 斧とりて祝ひ初けん一ふしぞ我たつそまのみやばしらなる
 二國の界にたてるたまがさひひえの杉もてゆへるなりけり
 大ひえの山高けれどむうしよりもゆるおもひの烟やのさつ
 四此絃の海邊にそひて日枝の山裾の長柄おひきおせるかな
 から人も一夜ふしみの朝とでにおふぎみるてふひえの遠山
 近江にのかけみの山もたちたれどおふぎみらるゝ山モイ此山

いく藥とるべかりけり大ひえの近江おううぶ龜此うへの山
 あたごにの雪のかくれてみえしかど春まづ霞む日枝の大岳
 大ひえのゆきの山窓いつのまに春来る梅此ひらけそめけむ
 みやこにの明日やいつらん黒谷のふるすなぶらの鶯此こゑ
 大日枝此やまの心も動くらしひらも長柄もはなさをにけり
 よもにみる花此匂ひをいかいせんこの大たけの春の明ぼの
 花のみにむれつゝ人の昇る哉山はとゞきを音をやまはばん
 分り登るあみだが峯のほとゞきを十聲までとも頼まるゝ哉
 我外に誰とふらんと思ひしに飯むろをたゞく水雞なりけり
 うしとらの峯に雲おそかゝりけれ今日もたゞはじ夕立の雨
 雨たべと願へば日枝の雲おかりて心おまがす賀茂のかみみづ
 千とせふるひえの杉むらむらぐれが夏さへ寒しひえの杉村
 花ならでかぐはしき哉ひえの山神さびたてるすぎの下ぐせ
 大日枝の高ねの小さをりしきて鴉の海てる月をみるかな
 ながむれば心のうちに入りになりひえの高ねの秋の夜の月

相輪 檜

千年へむ是もくすり此玉なれやひえの山路のさくの白つゆ
くすりさる袖にかけたるイ
 秋の色も殊あしありけり大日枝の鹿此苑とや紅葉しぬらむ
 大ひえの山此奥あを鳴く鹿の妻あふる道ぞまへなかりける
 山めぐる時雨此雲此ひくけれバ空あぞひえの峯の晴れたる
 びら杉のひまもる月も氷る夜の横川のほらにましらなくこ
 大ひえにいつくたから此塔よりや霞此玉のまだれていふる
 大ひえの山お我子此ありもせばいかあおめむ今朝の初雪
富士のれも越のしられしたに移してイ
 大ひえに大雪ふれり打つけにふじとやいはん白根とやまん
 此山の鬼ゐる門をふたぐれば年もくれ老やあらんとすらむ
 大ひえのうしこりりり麓なるやせの汐湯やあみて登らむ
 大ひえの西坂本の雪のうちになりけん梅のあともたづねん
 ましらなくひに此山路をわけてこそ柿の葉草の種も得にけれ
 昔みし誰おらなくにあかねさす日枝の山百合なつかしき哉
 此山に立つおれをまの只一本もどのねさしを知る由ぞきた
 大ひえの谷にみえつるまら蛇の今もすめるう岩のはさまに
 不動寺辨天窟
 檜 縦
 巴 戟 天
 竈 風 呂
 修學院靈樹

慈悲心鳥

中 戒 堂 珠 樓

山の名此驚やかけるとうちみれば小ざさを渡る嵐なりなり
 わけのぼる山路苦しも慈悲心と鳴てともあふ鳥の音もがさ
 水上にゆゑあそあらめ日枝の山音羽の瀧の瑠璃をくだせり
 日枝にきてるり此光に照たる身のかしらの色も若ゆべき哉
 今朝こそこの都にでしか靈山の釋迦のみ前にいつか来にけむ
のイ
 石橋どかゝれるひえの雲の上に文珠の御かげらふ見つる哉
 天降さる石もたいせま唐土の土をふませし獅子も立つめり
 大君此のげましける燈火も千どせ経ぬらしひえの山でら
になりぬイ
 大口のまがまも人に仇せぬくもしきひえ此山うらあらし
 高つ鳥こだまを法のおはすいめおそりのあらしひえの奥山
 道に入るこゝろやつけし日枝の神歸る家路を思はざまなり
 近江の海八十の湊を一目ふひひの高ねにまはりてこそこれ
 萬代のまづめ尊とき山に来て花のみやこ此さかりをぞ見る
 大ひえお日かかまつまの朝おらけはるかに匂ふふじの白雪
 此山の千とせや種とこぼれ落ちてひともと茂るから崎の松
 日出富士

膳所城

大嶽のまゝ吹く風にくも晴れておもの、濱此遊むろくみゆ
 この峰此霧もはれたる朝なきにやばせお船うら安げなる
 大ひえに遊びてみれば四の絃のこどぢなりなり瀬田此長橋
 おはたけのまだくれなくに白雲の底よりひい、く三井寺此鐘
 大岳のくもの上あて雁おつる堅田のうらを今日見つるかな
あしがちる難波わたりほのイ
 こも枕たかせのよどもかつまえて夢かどぞ思ふひえの大岳
 ひえお来て我すむ里を打みればまつ毛此塵此世おあそ有れ
 後の世にさくもあしこしとすれば柳をかろすひえの山風
 墨染のそであふさはぬ劔太刀山のおもてもふせつべらなり
 山法師
 後醍醐帝
 黄門忠顯
 信長亂妨
 ひえ風雲のとばりを吹きまきてあらぬみ顔のまえし其よの
 臣此みちたれおかはらむ雲母坂よしや草葉のつゆの碎けの
 軍人たてしりぶりのうらけん比えぬ淺間の山とみるまで
 さのしとも深き山路をこと道お心くらひくあげさあるらむ
 まづかある世おこそ知らぬ日枝の山すむとも水のもとの心を
 大ひえの山のやま山分りて山おとし経るやまのいもほる

日おつがと雨おひらくるひえ小イ槍笠こゝろの安き山路らむイありたり

心ありて雲のとづるとまゆるる都をのぞむひえの山まど

坂本おいつうゑそめて夢の世此めさまし草のおひ繁るらむ

是やこの千代の坂本水上になれるくすりをとらむとぞ思ふ

ひえ越て志賀の都にきたれどもむうしの人のぬぬ也けり

大ひえの山もゆすりて唐崎おみふぬきほへる神まつりかき

大宮 八千矛此神のみけしと波母山おいつ、此色の雲も立つらし

二宮 久方のあもり来ましてはも山の小ひえをくに此とこ立此神

聖眞子宮 忍穂耳此まづまり居ますひえに来て天の眞名井の心を汲む

客人宮 みこし路の雪の白山ゆさうひてひえお樂しむまらうど此宮

八王寺宮 水無月お雪のまらねとありし世此光の消じよるつ世までお

大ひえにまづまりまする八の王子八隅えらせる大君のまめ

國狭穂さるえますらし大ひえや小ひえの杉此常磐のきは

十禪師宮 皇孫のくぶりてませばありぬさすひえもさながら高ちほの峰

松の尾のまつこの二葉の契あれやおは山くひもいますこの山

傳教父百枝祠

此山のひらくやいつと釣のいどの永くまちな白ひがの神
 此りの船守りさまして山此名のあゝき心をみせしこのかま
 宇佐此神のつらまじたる衣あそひ我々つそま此錦ありたま
 宇佐の神かづらしきぬの紫や山おゆるせるはじめあるらむ
 霞さつひえのなら坂ゆるしきおこぼれて匂ふ北のふぢあま
 なら坂のその名よひて紫お神此ことばのはきもさたけり
 此りの花あく咲匂ふもとの木の百枝の神のむしをぞ思ふ
 大ひえの法の帯を乳房にておほしたつるのいくらなるらむ
 竹 臺 神にのあらぬうてきの竹のよもいく世の霜の重ねきぬらむ
 楞嚴院童兒 いまもその竹生島にや遊ぶらん雲にのりてしひえ此やま
 猿 戸 大ひえの山の王をしこみてさるまるさへやつらへまつらふ
 うつろはぬ日枝の社に住なれて老し猿ものどけからまし
 うらみあき世あひぬらしひえの山まぐさ原も風静あり
 東 叡 山 吾孀おもまた獲えたる峰ありてわたるぞ遠たひえのやま風

八十ひらのゆきくれぞ猶し忘らえぬのみさかりなりける昔なりけりそれ
 そらかぞふ大城の君をみことほぎまつらすとて七月十五日に御漁を船
 出せさせり其折しも御のさはらにさもらへりて歌つかふまつれと令言を
 うけまつりてよみて奉り猶さぶらふ人等おのがじし村肝の心々にはぎ奉
 り大御酒たまひ御まへも寛にうたげさせし折々につけある人おもた
 まひ物にふらしうたはせしおの桃櫻に姫御子を教へ示さひ給ひ夏山の白
 雲をみそなはしてうたはせるにの暑さを忘らひ佃島邊の月おめでまして
 の伏屋の海人をあはれと見給ひ雪の夕べのみうたかにいやつこを恵ま
 みいつくしみ心の奥かもまらえぬ御歌のかずくあありにたれどまたく
 つどへかいつけ侍らむのかしこかればうつしみのうつしき折にふれてお
 のれが恐れみくも口まさみある人の聞えさせしをおろくいつめ
 侍るになむ

天降言抄

田安宗武

將軍家の御庭の紅葉のいろくそめたるを見侍りて

うせくこく色づく庭のもみぢ葉の時雨もことに心あるらし
九月廿三日田安に家つくりいでて今日なむ移りすみて

吾宿のかきはの松よけふよりいひく萬代をもろどもに經む
牟佐志の國飛鳥山といふ處に仰言ふて櫻數多植させ給ひぬれば春毎にいみじき盛なれば
遠つ浦此海人深き山の賤さだに雲をわけ波を凌ぎて集ふめるに芦垣のま近き程ふて今迄
かそなはりたる事のいと本意なくて今年のこと思ひて春雨の晴間求めてまかり侍りき

櫻花さくときさくつゆきて見ればたい白雲此峯にたなびく
こゝに又千本此櫻うつしうゑて幾よろづ代か君ぞながさむ
右の御歌の、享保より寛延までのうち、よませ給へるが中を、誦し
覺えて記しぬ。

七夕 風 星合の空まづけしなひさかたの天つ川のせ涼しくあるらし
七月十五日漁にいいでて

君が爲すなごりせむと漕ぎ行けば萬世橋のまづぞ見えぬる
ふ月佃邊めて ま帆ひきてよせくる舟に月てれり楽しくぞあらむ其舟人の
延享元年八月十五夜盃度々廻り祐賢拍子正度笙の笛正繩横笛長頼筆簞などし遊びけるお
いその上ふりおし唐の笛竹をふきたて遊ぶこよひたのしも
旅の心を タづく日はやかろひて旅衣あるもで寒くあきかぜぞよく
つかふる人の萩の花末に成けるをぞ申しければ

昨日まで盛を見むとおもひつる萩のはなちれり今日の嵐に
つかふる人萩の下にたいある石をぞ申しければ

萩さける山邊の石の心ありと人や見たらむかりにかきしを
九月十三夜 空にみつやまと此國の風なれや今宵の月にまどぬすること
雪のいさうふりつもりぬる夕べ酒のまつ、庭のさま見侍りけるによめりける

酒のみてみればこそあれ此夕べ雪ふみわけてゆきかふ人の
九十の賀え侍りける人をばきて

吾や妹や子等はいましにわえぬべし汝の猶も松にわえてよ
衝立障子の繪を見て

千鳥をら友よびかはし遊ぶなりあどてや人のひとり樂しむ
勸學の心哉 書もよまて遊びをたるの網の中に集まる魚の樂しむがおど
學ばざる人を憂へてよめる

天よりもうけしたまもの徒にまらせてすぐる人のはかなさ
學ばでもあるべく有べあれながら聖めてませどそれ猶し學ぶ
天地のめぐみにある人なればあめの命のまにくをへや

春秋を判せる歌

かき渡る秋をもえ出る春にしいたくらぶるだに愚なりけり
宇喜田といふ處に狩に物するとして舟にのりてゆきけるに松のまにま帆ひく舟の往きかふ
を見て人々歌よみ侍りける序に

何事もまほによせとて示すわが心にあへる今日にはかも
濁なく波さへもなくゆく水の物まらぬ我もかつ見つるかも
右御うた、享保より寶曆までの御作なり。

子	日	少女等が赤裳ひきつれ小松原みどりに交る今日り來あけり
若	菜	宮人の白馬ひけり少女らのゆき間のわか菜いまやつむらむ
柳	春	春雨のまばくふれり佐保川の岸のあをやぎ色まさるらし
春	駒	信濃なる大野のみまさ春されば小草もゆらし駒いさひなり
歸	雁	さい波の比良の山べに花さけばかた田にむれし雁歸るあま
苗	代	まめはふる小田の苗代奥山の雪消のみつにみつまさりけり
董	春	春日此かすが此野べに今日もかも里のをとめら董つむらむ
山	吹	山城の井手の玉がは水さよみさやにうつるふ山ぶきのはな
早	苗	時鳥さとなれあけりうま酒をみわの山田のさなへとるらし
照	射	ひるぶあもかしこき山に我せこが暗き夜毎に照射するかも
葵	何	何故とこといえらぬを葵ぐさ賀茂のまつりに我ぞかさせる
蚊	遣	夕日かげにはへる雲のうつるへば蚊遣火くゆる山もどの里
逆	火	はちまおふる池のみぎはにたいずめば衣匂はし清き風よく
七	夕	天の川いひきたてりて戀あける心はるけむよひの來あけり
女	花	わがこふる妹が垣ねの女郎花まらつゆ重みかたぶくもよし

薄 霧 朝 駒 月 鹿 紅 時 霞 神 鷹

狩人も情しわればか女郎花まゝく野邊を見つゝまぎあき
 み吉野のどつ宮處とめくれればそこともまらに薄生ひあけり
 武蔵野を人の廣しとふ我のたゞ尾花わけ過る道とし思ひき
 萩が枝をかざしにせむと思へれど露のちらまくをしき萩原
 なぐはしきいなみの海も朝霧にみせず過みき旅のうきかも
 わした昇り夕べまかつる宮人のいへによるしき朝がほの花
 迎 顔
 ひだりみぎり馬の寮のさわぐなり貫のこまの今や來ぬらむ
 かぐ山におふるま榊えぶさやあさえたる月の神もめづらむ
 くだら野の萩の花ちるゆふ風お花づまこふる鹿のねきこゆ
 葉 東の山のもみぢ葉ゆふ日あいのいよく赤くいつくしきかも
 雨 人みな秋を秋しめりその心そらに通ひてまぐれけむかも
 松の葉の古葉もふれり住の江のあら、松原あられふれ、
 樂 風はやみおは火のかげも寒けさにまこと深山の霞ふるらし
 狩 ふる雪にさそひかゝする狩人の熊のむかばさま白になりぬ
 ふる雪にみ笠もめさず皇子たち御狩せすなりみ鷹のとめよ

後 朝 戀

道芝の露ふみまださかへりにしわが裳裾ゆもわが袖ぬれぬ
 かへらむと我せし時にわが紐をむすびし姿いつかわすれむ
 百代よる翁のまひのたちつるつをがむ御前の竹なびくあり
 千年かねて遊ぶてよこと誠かもむしる田に今も鶴遊あき
 山 二のなき富士の高ねのわやしかも甲斐に有とふ駿河も有とふ
 野 楯なみてとよみおひにむ武夫のこてさし原の今のさびしむ
 關 いにしへにゆきはかりし不破の山關の關屋の跡だにもなし
 右の御歌ハ、寶曆の年の中に、堀川初度の百首の題にて遊ばしたる
 也。

明和六年九月十三日

青雲の白肩の津の見されどもとよひの月にかもはゆるかも
 ながめかしはを

武夫のかまどに立る鏡形のながめかしはの見れどあかすけり
 まつのへの神祭る年比はの十一月廿三日といふにぬさの樂とて舞樂をなむ供し奉りける
 そが中五常樂の序と破のおはひに詠をなさせけるやよめりける歌

みつかさのうらでとてしも昔より神さびけらし此岡此まつ
 えめはふる岡のつかさの清ければいもゐも安しぬさも安けし
 たてまつる安御幣のやすらかに守らひたまへ此もろくを
 もろくもいより仕へよ此祭をぎへのみかひもろくの爲
 篋 啄 鷲 物もなさて世にふる人へら鷲のむなぬさりまに猶劣りけり
 櫃 吾宿のそがひおたてる櫃の木にかし鳥きなく頃のはや來ぬ
 佃島にいさける頃

かく來ての珍らしみさけど此波のよなく響く蚤の伏屋の
 蒼狩ふゆさけると中川をすぐるやど

秋深き立田の川のかくぞあらむ入日さす雲のうつる川づら
 かへさなれどけしさいとことに見えければ

晝ゆきし川にしわれど夕されば静けくゆたに新らしきおと
 この、田安の故君のみ歌なれば、文化四の年む月廿八日おおも藤原の
 直臣うつす。

天降 言終

三草集

松平定信

歌のまねびの心ばかりなれどもおのがまに〜詠みいづれば麻をはなれ
 しよもぎの生ひまげるとごとくいといたううるさくて昔よみしハ皆うち
 拂ひてけり享和の始より生ひいでたるが中をいさゝか残して朝夕つゆの
 よまがどなすものなり

うきものもほどへてのちひなつかしき

おもかけ見する霜のよもぎふ

とるらむ人もありやせむ

文化四のどしの冬火桶ふよりそひつゝかけり

よもぎ

春

元日初めて定永ともなひてまうのぼりてよめる

ゆたかなる袂ふくも大君のめぐみのうちの春のはつかぜ
老鶴もひなうちつれて今年より共に千とせを君にさしげむ

五十になりぬる年の試筆に

梓弓いそぢの春をむかふれどやたけおころの撓まざりけり
御させなごの御ことわざにまうのぼりて詠めりける

霞をよめる 天が下なびくつるぎの光にもくもらぬ御代の春の見えたり
白雲の此こるやいつみよし野のやまの霞のいくへ隔てゝ

鶯をよめる 朝な夕な軒端にささく鶯をこにかふひとに聞かせてしがな
園の梅のかざりけれ

曉のねざめの梅の香をふかみまらで見し夜の夢もくやしき

柳をよめる 青柳のいどのみだれを春風のゆたかなる世に忘れずもがな

白露を花になしてもかざりなきうらみやかけむ青柳のいと
春さめはふるも見えぬ遠方にひとむらぐもる青柳のかけ

雨をよめる 我もまた此春雨のふるとしも人にまられで世にやすまゝし
月をよめる ことじりの春とばかりのかこさじな老も加はる朧夜此つき

年々に霞もふかくなりけり見しやいづよのはるのよの月
雲ならばかこたむものをよく風も共にかすめる朧夜のつき

曙をよめる 鳥さへ色どりそへてはのくよこぐも霞むあけぼの山
雲をよめる 何事ものちれなくぶる梅の道まらぬ雲雀やくもに入らむ

櫻をよめる まちわぶる此日ながさを山櫻さきて此のちの春にしてまし
まぢくしうさの物かゝ櫻花さきはし日より山かぜぞふく

櫻花たえてしなくバのどろさのはるの心をなにしみてまし
まぢ惜む心をすてゝ見つれども花こそ春のはだしなりけれ

さよ日長けれ

春れこといひにがしたる息も忘れて長き日をくらしつゝ

蛙 を 言の葉の種としきけは蛙もいさとしいける身を隔てじ
やよひのつごもり頃ふかありけん

櫻花けふのすくとも散りのこれ五十ちの春ふ又あはめやも

夏

遅 櫻 を ちらばれ残るとしてしも遅櫻いつまでひとり春ふあふべき
新樹をよめる その山といはむばかりに夏木立すゝめぐやにも繁る庭かな
早 苗 を ちやざりふ思ふな人の玉のをも二葉にこもる小田のさ苗を
菖蒲をよめる たぐ枕たが袂あらかし思へばねさきわやめぐさかな
年の内にけふを盛のあやめ草かれても軒に香をばといめよ
五月六日によめる

中々に残るにはひのなくもびなとて六日の菖蒲なりせば
水 雞 を 叩くをもそれかどとしの昔あてまつよなき身に水雞をぞさく
夏野の草を 拂ひてもまげる砌にくらべての末葉みじかさ野邊のさつ草
或人の許より撫子を我庭に植て直ちに奉るといひあしぬあり歌よめとの事ならむと戯に

昔の葉にかゝれとてしも撫子を君が園あり植ずやありけむ
夕立をよめる 一方に心なとめそなにむとも只ときの間ぞゆふだちのそら
山雲夏忽繁といふことを

時のまに風ふきたえて暑さをもこゝにたゝめる山のはの雲
かやりを たさすて、残る煙のうちばかり安くいぬらむ賤が蚊やり火
雨のかやり 蚊遣火の煙の軒をつさひつゝたちもの不らぬ雨のゆふぐれ
螢 を 草むらの底に螢のかみ見えてつゆの葉のなるゆふぐれの庭
氷室をよめる

夏かけて残る氷室にたらちねのまさびますべき世を恨みつゝ
この足乳根の君の暑さにさはり給ひて遂に御病のすゝみ給ひしを思
ひさえねばなむ

長松のもと涼しかりければ

松高み親のいさめのうたゝねも忘るばかりの風のすゝしさ
曉の頃よめる 短夜の老のねさめもあこたりて此おろうときありわけの月
櫻山の亭にて日の暮るゝころ

朝の聲のうちよりくれそめて雲をづかなりたそがれのやま

秋

初秋の心を 浪花江の蘆のひとよにふきかへておやめづらしき浪の秋風
七夕によめる 星まつるおとのえらべもすみゆきて秋風高し天のかはなみ

我もまた願の糸のひとすぢの星にたむけてそらにまかせむ
この致仕の事心にねを思ふころにうありけむ

萩をよめる うとまるゝ老の習性見てもえれ若葉のをぎの風もおどせず
いつかはと思ひし萩の秋は聲をこの頃おいの寐覚おどきく
萩をよめる くちもせで今年の秋もさきにけり古枝の萩の本のこゝろの
たが袖もわくれれば萩のすり衣ゆかりおはかる野邊の色かな

朝顔を 緑なる空にかよへる朝がはの花のゆふ日のいろにまばゆり
朝顔の花のいろの色こそをうしけれと苗撰びて植しが咲きぬれば戯に

庭のくさを 生ひいでし二葉の根とし紫のゆかりたがはぬ朝がはのはな
一つ色の緑とばかりかりせては悔しかるべき秋のやちくさ

虫を 露ふかみ野原のくさも虫のねもかるゝ迄とやなき明すらむ

遠近の鹿といふことを 風寒みなびく尾花の浪こえて秋さへすゑのまつむしぞなく
手枕に近くさゝしも山かぜのためめば遠きさをしかのこゑ

雨方のといふを

秋の夕べを 妹と脊の山によびかふ鹿のねいかななる河に戀やせくらむ
いづるやと月まつ外秋とて思ふことなき宿のゆふぐれ
稲づま つくぐれと思へばかきし稻妻のきえて跡なき雲のゆくへも

田の面を見て 宵間におもひもよらぬ遠山のすがたかつ見る稻づまのかは
何事もやしなひて見よ秋の田の稻葉ももどけうゑしき苗を
山路の雨を ふく風に木葉の露も一しきり雨ふりそふあき此やまみち

月をよめる 思ふこと思はじとまればなごてかくすむ影なきや秋のよの月
誰か又なき世の後に思ひいでてわがみし月の影またふらむ
八月望の月を みちぬるを思ふがゆゑに其山とちぎるをまゐるや望月のかげ

さまざま見るにまがひ又の繪などふよて

月いたいゆくとも見えず中空に獨すみぬるかかどのどけき
 月かげのうつるも遠くひく汐にひかた曇れる秋のうきばら
 柴人のものいふ聲もゆふまぐれ月にまぢかき峯のかけはし
 山ずみも月見る時うらさ雲のうさやうき世に又かへるらむ
 へだてなき月このへ八重葎ひとへにきみが光とを見る
 田安の箱崎此御園にて月の出でけるを見て

月もいま玉の臺にてりそひて世に似ぬ秋のひかりとぞ見る
 李白が静夜思此心をといていへばよめる

仰ぎみる高ねの月にふる里の草葉此霜此いろをしどおもふ
 霧をよめる 麓よりややくれそめて山川のひとすぢえろき秋のゆふざり
 葛の葉をよめる なればかりかれゆく物か秋風にうらみなかけを軒の葛の葉
 菊の花見にいさて

斧のえのくつるもえらぬ圓居かな菊の山路の種えるくして
 柞の紅葉を 朝な夕な二木のはゝそいくあきもちらでをあれと思ふ年月
 此歌を今見出してこゝあかといひるも懐舊に堪へず秋の色を二木

に見てし昨日さへけふのへらぬ昔なりけり又心の中に祝し奉りて
 唐崎の松を例にいやちぎれ一木の柞千代のふるとも

東海寺此紅葉見にゆきてよめる中に萬年石を

萬代の名こそ動かぬこの庭の石ものいはぬかまきづかみて
 潮音聞て見て 心すめばうしはの音もたか殿にまざる、松の風もまきれま
 や、夜寒なる頃

秋もや、夜寒になればおのづから我身またしき一人寐の床
 暮 秋 に 霜とくる庭の日かげの下草にひるなく虫のこゑをきとゆる
 九月盡に 白川のせきい心にまかせてもすぎゆく秋をどいめかねぬる

冬

時雨をよめる 桐の葉のくちしが上のさよ時雨音あきもまた寂しかりけり
 落葉をよめる 小夜風にまぼし連れて散る音の空にたゞよふ木葉なるらむ
 心かるくちるかど見ればよく風に又たち騒ぐ庭のもみぢ葉
 木 枯 吹きまぢる木々に思へば雪とちる尾花にかろき木枯のかぜ

霜
 こと木あひふくとも見えぬ山風此松を尋ねて聲やたつらむ
 行末のかたき氷のさむさまでちぎりやむまぶ庭のはつしも
 谷川の氷を うちいでむ春を思へば谷川のこほりや花のつぼみなるらむ
 千鳥の浦つたふ書に

一かたに心さだめよさ夜千鳥いつこの浦うなみかぜいなさ
 夜はの霞をさきて

雪をよめる
 こての上にもふりし世えらで厚衾かさねて夜はの霞をどきく
 いたづらにふりにける哉白雪のつもれど解けぬ迷ばかりに
 うちいでむ言葉も今の埋もれて我身もともにふれる雪かな
 書によてよめる

炭 籠
 まさみのむ道さへたえて古寺のあか井の水も雪にわかれま
 衾 を 厚衾かさねても猶さゆる夜にみちゆく人のこゑぞきこゆる
 埋 火 を 埋火のあたり長閑にはらからの圓居せし夜を戀しかりける
 炭 籠 雲のみなかへり盡して一筋のけぶりまがはぬ峰のすみがま
 年の暮雪のふりけるを

除夜によめる
 たちかへる春の光をたのむかな雪も我身もふりまされども
 こむ春をおもへば長き心かな年くれたけのひとよながらも

雑

風をよめる
 手雲のきえておどなき行方をばうはの空なる風やまらむ
 雲 を 色もなく香もなき風を心にてすがたさだめぬ空のうさくも
 曉によめるが中

うば玉の闇のねざめの現にも夢にも御代のひかりをぞ思ふ
 つくく〜と我よふけぬる鐘の音を寢覺の床に敷へてぞきく
 数ふればうせにし人も年々にそひゆく老のねざめわびしも
 夢絶えし心のそらに神と人のへだてぬ月此かげぞ見えける
 誰かいま同じ心にねざめしておのありあ々の月を見るらむ
 曉此鐘を聞て
 ちぎりあれば今年のけふの曉のねざめの鐘の音をさくかな
 夕べの鐘を けふの日もくれぬとつぐる鐘の音に驚かでこの年をへし哉
 夕陽の海に映じたるを

波のあやも見えぬばかりの夕きざに入日のこさぬ沖の島々
書によてよめる

不二のねにたちものぼらぬ白雲の麓の山のさくらなりけり
昔をも何か恐ばむまのぶ山さかゆくみ代にあへるみなれば
浅香山にて 浅しとい誰かいひけむ今もなや埋もれぬ名の山の井のみづ
心こそ浅香の沼の水なれやかつみるものにかげうつりゆく

白川の關の跡を見て

白川の關路のあとをたづねれば今もむかしの秋かぜぞよく
關の湖といふを作りたるが其小亭を共樂と名づけ其うしろの山を鏡の山と名づけぬ

湖のこゝもかゝみの山なれやこゝろうつさぬ人しなれば
共樂亭 山と水の高きひきゝもへだてなく共に樂しき圓居すらしも
まのぶの里の醫王寺にゆきて繼信忠信のつかを見てよめる

おととへど答ふるものいなみだふて空しき苦に山風ぞふく
なき魂よ物いひかはすものならばおなじ心の道かたらなむ
一橋のまがもなる御別園の雞聲が井といふを

筒井ついつの曉くみそめてどりの八聲の名ふれたちけむ
白坂のあたりの松のなみ立ちたるを見て

うゑおきし千代の松原ゆき返り君がさかえをいざ契りてむ
山里の景色を 見るが内に軒端の山もかつ消えてたゞよふ霧ぞ雨に成ゆく
田家の心を 荒田うちさ苗どりにし露はさで小田の庵にそでぬらすらむ
夢を むま粟のいひぐひなしや五十年もさゝ手枕の夢の間にして
さまく心に浮ぶまにくよみたる

幼きと思ひし人いとしたけぬ我身のぬいよいかにみえおむ
悲しきと思ふことにもたへにしを嬉しきにかつる老は涙よ
子をおもふ心の道の心もておやにつかへよ世のなかのひと
色と香にまよふ心のこゝろもて君につかへよ世のなかの人
よしといふも我よきならで人並にたゞよふ芦のよの中の人

越後守康入あそ初めて物がさうまたるが年のやど十あまり七つ八つになむなり給ふ天稟
明敏かどろくお堪へたり

昔ふの及ばぬものと思ふ世にまた立ちまさる今もこそあれ

定永初めてまうのぼりしに班列おとに仰を蒙りしかば

ふして思ひおきてぞ仰々吳竹のこのよにかゝるつゆの恵を
同じ年從四位下に叙せらる

嬉しさもあまりの事に涙さへ共につゝめるけふのころも手
我家のもど五位になりて年經て四位に叙するを

椎柴のみちよりのぼる位やまふもとの松のかげのはなれて
一橋宰相君の簾中かくれ給ひて物のねごとめらる

こすのうちの花の薫もさえはてゝ鳥も聲せぬこの頃のそら
田安の姫君かくれ給ひしを

あはれなり世も似ぬ庭の撫子も露と風とのうさりのがれず
水戸黄門君おもき病にかゝり給ひていとすゝませ給ひし頃かの御館へまうでて御けしき
うかゞふべしとてまばし居たる時入相の鐘のひびきければ

常にさく物ともなしにつくぐぐと哀かずそふ鐘のかどかな
龜山のぬしの世子生れて程なくみまもり給ふ 翁がうまごなり
嬉しさの涙かゝかぬ袖の上になれそふ波のあはれ世のなか

田安故黄門の君は御法會ありける折よみしが中

此君復古の樂に御心こめ給へりしかば

ふりし世の雪をめぐらす袖だにもせめて昔に返してしがな
かくばかり恵にうるふ此身ぞど何にたぐへて君につげなむ
朝恩の深き身なるを

世にまさは嬉しさふしを吳竹のお此身ながらもそふべき物を
定永任叙のこと告むと御寺にまうでて寛にひうりまします御墓に詣でて

嬉しさにまた悲しさも猶そひぬ何よりさきに君につげまし
俊成卿の六百年忌にかの肖像をかけて卿の逃懷百首あるものどり出してそれみて百首よ
まてけり手向ふといち早くよみたればこゝにゑるすもいと少し

梅 數ならぬ袖よのまばし梅乃花此世にさまるつまさもぞなる

數ならぬ袖にもまばし移しつゝ此よの梅の香をやまははむ
柳 はるさめに玉ぬく柳かぞふけはひき方ならで露ぞこぼるゝ
青柳の玉ぬく露のことはを一かたならずまたふけふかな

鹿 世の中よ道こそなけれおもひ入る山の奥よも鹿ぞなくなる

露

鹿のねをまゐるべおやせむ思ひ入るやまと言葉の道の奥おも
乗する奈良のはしばにちる露のはらくそこそれのなかれけま

月

ちる露に袖ぬらしけり枝折せる櫓のはしばのあどを尋ねて
なぐさむさ誰かいひけむ眺むれ六月こそ物へ悲しかりけれ

虫

ながむれ八月こそ物いどばかりの思を今もまたふ夜すがら
さりさもさ思ふ心も出のれもよわりはてたる秋のくれかな

雪

さりともと思ふ心をねにたて、言葉のつゆに虫ぞなくなる
袖山や櫓におもる雪をれてたえぬなげきのみをくだくろふ

鶴

及なき身あひなげきをこりつみてふりにし雪の跡をどふ哉
年だにも若の浦わのたづならバ雲井をみつゝ慰さめてまし

山

若の浦に年のみふりて及なき雲井を見つゝたづどなくなる
我身をわわが心さへふりすて、山のあなたに宿もさむなり

侍女貞順みまかりての七年あかりけむ本室の外の子は昔このうみしなり

七年にめぐれる雲のはかなしや夕べのあめの露とさえしも
愚なる心をいつかふりすて、山のあなたのみちもどめてむ

仙鼠が身まかりての年回到庭の草花を手折りて其子にやる

重臣元門致仕してかくいふ予に茶の事を傳へしなり

明和の御臺所の御法會あり

昔いさげふき時御膝下に近づき奉りし事なご思ひいでて

手向けよどおくる情も七年のその世かはらぬ露のいろくさ
雲の上の月のみかげを仰ぎてしそのよれ夢のこゝちする哉
前の妻の二十三回に

ちりすぎしこのはを慕ふ袂あひ今もちしほ此露ぞのこれる
此人終焉に我常に勇に過ぐるなど諫めおさ給へりしを

年へてもいかで忘さむくみ見てし野なかの水のふかき心
田安故黄門此君の千鳥さへ友よびやはし遊ぶなりなごてや人の獨たのしじと詠み給ひし
御歌を松山の少將の君とかたみにかきかはしたる時よめる

すぎし世を慕ふ千鳥のねおぞなく浦わの松の枝をつらねて
紀伊亞相の君の御宴室に濱邊の千鳥を壁にゑがきさるるに殿あり公主のいませし時通ひ
かれしを再またかよふとて

年をへて又たちかへる浦千鳥すざし浪ちをまゝひてぞなく
田舎の御燕居の新室に松など軒近くうゑなし給へるを

十かへりの松の花さへさき草やみつ葉よつ葉の軒に並びて
立教館にゆきて書生を考試して各その玉成を庶幾すとて

ゆく末の國の光とみちのくや言葉のつゆもたまをちしつゝ
小松原あさゆふ露にやしなふも國をぞおもふ君のためとて
車の卷々をつくりし時稻むら何がしにとひものしなどまたり

小車のせばさも此みの我身ふ人の言葉をたゞかりもすれ
尺蠖の屈りなどいふことをよめといへば

晴れゆきて一際まさる影を見ればくもるや月の光ならまし
廣橋亞相より知命の賀とて歌を送りし給へれば其使またせてよめる 下向の折あり

鳥の跡をさるべになして年波のよする磯菜をつみやそへまし
知命のときさえ給へと恐なる身此只に齡重ねしのみおてなど書いて

まぢをしむ心ばかりに年もへぬささちる花の道くらくして
我有司事らとふ文書の箱に入れて出す常の事なりある日其箱出したればふんきりて見る

に空函なれば戯に其箱此うちへ書きて入れけり

浦島がむかしおちゆる玉手箱あけてむなしき水の江のつき
頼民何がしとふの菅菰を奉る 此者聊公役にあづかれば

菅菰のとふのみふをばわれにして七ふの御代の恵とをまれ
鏡のうらに錆させぬる二首

我ならぬ身をもまゑるかな足乳根のおもかげそれと向ふ心に
されば去り向へば向ふ面かげの残るかいみのうちや何なり
五倫の心をよめるが中夫婦此道を

つゝましき新手枕の心をばいもせのみちのすゑもわするな
佛の教をひたすらにさかしらするをまゝて

いやしむも又尊とむもその道をまゑり得てのちに思ひ定めよ
白川のかしまの明神に奉りける

こしかたもまゝ行先も頼あれや神と君とにまかせてし身の
天満宮の御略傳をつくりて

天みつる神の恵をいまこゝにうつして遠き世おもつたへむ

石山縁起のかけたる巻の繪を補ふとて

鴉の海の深きえにし跡とへどかひもなきさの波のうたかた
芝山黄門の六十の賀に

けふといへど松ふく風も千代の聲耳順へるはじめとやさく
根岸何がしの七十の賀ふかありけむ 此人鄙官より登庸せられし

千代よばふ聲ぞ木高きやよの松昔の野邊のふた葉なりしを
九鬼松翁七十の賀に

松が枝の老木ながらも若緑さすがに千代のためしとぞ見る
尙齒會をなしたる時 家臣らの七十以上をよび集めたるが二百二十人
あまり歸すへて一萬千八百余とやきこはし

仙人の流くまばやいく千代のよはひ此淵をみなかみにして

定和あそに参らす

文政十年十一月十五日

樂 翁 自書

この文化の始の頃より致仕までの聊うあゝにかいとめあさぬ

一方お厭ひおはてそ八重葎これも緑のはるさめの空

是も惠の深さなりけりと秋のながめの静なる窓に向ひてなむ

むぐら

春

試筆に 花の上に厭はむものと思ふもこゝろうきたつ春のはつ風
子日によめる 子日する末野にうまきあさ霞はるも二葉のまつのいろかな
霞 を 花もいまだ遠き尾上のあさ霞まつたちそめて春や見すらむ
住吉奉納の中 住吉の松の聲せぬあさなきにかすみ色こさかさつ老らなみ
若菜 を おゝ草のいつも二葉の心かなかへらぬ年のつみそふれども
雪のふれるに鶯のなきしかば

鶯のさへづる聲に去年此そらあらたまれども雪のふりつゝ
残れる雪を 有明の残るばかりの峯のゆきこれもつれなき色や見すらむ

柳 を 春雨のふるとも見えぬ遠方にひとむらくもる青やぎのかけ
枕のこの盆梅のかをりくるを

人ならべいとはむ老の手枕にむかしかはらで通ふうめが香
月 を 春ながら雪げのくものおぼる月霞むと見ても寒きかげかな
曙 老らくの深き霞のあはれまでおもひこめたる春のあけぼの
曙の空に雁のかへるを

横雲にひきわかれゆく雁がねたがきぬくの心をうてる
若 草 なやざりにつむな里の子秋にさく花のふた葉の春のわか草
花をよめる よのなかの人の心の花もいまさかりなりける山ざくらかな

つくくと花に向へば世々の人ためてこし春の名残さへをふ
とぶ鳥の羽風もいとふ花の枝にあまりつれなく吹く嵐かな
山 吹 を みいなきになしても匂ふ山吹のつかふる道の花とこそ見れ
池の藤を 池の面の櫻やまぶさちりまきてたえまふうつる岸の藤なみ

夏

更 衣 世の人の心の花のうつろふを今朝しもそでの色み見せつゝ
さ 苗 を 雨まちしさ苗の早もふしごちぬ植おし方の生ひたゝぬまに

靡くさへ末のみにみじかき若苗の水のみどりにかぜやふくらむ
五月雨を詠る 玉水に軒のまのぶも亂れあひてかぎりまられぬ五月雨の空
鐘の音の此頃たえてかさゞも明方さどるさみだれのそら
世にふるも程こそあまゝと獨きく老のまぐらの五月雨のそら
橘の夜半にかをりくるを

さめにける夢の行方もかをるまでよふかき窓の風のたち花
螢 を 茂りあふ木の本くらさ草むらなくれぬささより螢とぶなり
夕立 住吉奉納おかりけむ

雲きはふ武庫の山風ふさふちて里もすゞしき夕だちれそら
蚊 遣 を 蚊遣火の煙を見ても民の戸のにぎはひまゐるさ夕ぐれのそら
夏 穧 こむ年も今年のけふのなきものをいかに厭ひて御穧まつらむ

秋

秋たつ日よめる

一葉ちるかげにおもへば木枯のゆくすゑわびし秋のはつ風
萩をよめる さゝそめし秋を思へばそのかみの寐覺こひしき萩の上のせ
一さきりふさしく折の静まりてたゆむあどより萩のうは風

住吉奉納ふかわりけむ

秋の風松よりおちて濱をぎの下葉につづくなみのおどかな
萩を、萩さくおる雨さけきばなむ

朝顔

秋ごとに萩さく時の雨去げし露のはかなるいろやいかなる
うき秋のゆふべを去らぬ朝顔の物おもひなき花といはまし
袖の上にかゝらむ物と思ひきやよもぎが末のつゆの秋かせ
露 ふさおろす嵐に虫もなきやみて尾上のまか此聲ぞまぢるき
鹿をよめる 夜やふけし月やいでけむさを鹿の遠き高ねの聲のまぢかき
夕ぐれ ともすれバ思ふ事さき我身をも忘れてかおつ秋のゆふぐれ
どはいやな誰をかまつ秋風に琴のねそふる夕ぐれのやど
夕まぐれ竹の葉さやく秋風につばさ細りてすいめなくなり

えぞの景色かいたる書に

ところくこさふく聲に海くれて月をたづぬる浪此うき霧
月をよめる 眉ねのき見そめし秋の夕べより月の顔のみ身おのそひつゝ
すぎし世も又行末もあきの月一つむしろにさゝむ夜はかな
せめる夜天の川瀬の浪此音も月にさこゆる心地こそすま
春ふのみ霞むと見し秋の夜の月さへ老いおぼるなりけり
はれわたる月の桂のかさすみて雲のあとふ木がらしの風
あこがるゝ心のはてや一むらの月にはなれぬ空のうきぐも
山めぐる河せの末もはるくど月にかくれぬ水のうきぐも
武蔵野の露をひかりの海原やつきも尾花のなみにたゞよふ
面影も向へばそれどうかびさぬ代々のかたみの秋のよの月
一むらの足とき雲におどらじと行きちがふ月の山風此そら
住吉のまつの嵐にくもはれて細江にあまるつきのかげかな
住吉奉納のうち
八月十五夜 名にしおふ今宵のえぞが千島にもこさふきやめて月や見るらむ

なれにしを思へば久し百年の秋のなかばのもちづきのかけ
五十の秋にうわりけむ

八月に聞ありし十五夜に

わかざりし其後の夜のもち月の影も加はるこゝちこそすれ
擣衣といふことを

落穂ひろふ晝のうさまで賤の女が一人かぞへて衣うつらむ
秋の末つ方によめりける

蚊の聲もたえし軒端にさゝがにの蛛のすよき秋のゆふ風
あはれなり友なき蝶のこゝかして枯生も残る花をたづねて
見るがうちに入日の影も消えはて夕月細き秋のやまの端
むら時雨鹿なく山もかくやふるたゞにたへぬ秋の夕べに

冬

冬の始によめる

嵐ふくけさに思へば一葉ちりし秋こそ冬のはじめなりけれ

時雨をよにふるも音せぬ春に比ぶればけさ浮雲此まぐれなりたり
落葉をちりまぐも又たちまふも山風やさしてこのはの心どいみず

枯野をよめる

山風を水上にしてみちもせのおちばの川のこえぞわづらふ
百草のかれふす野邊にさりとど霜の尾花の何まねくらむ

氷をよめる

池の面の氷らぬ方もなかりけり鴉の浮巢やいづこなるらむ
春秋のあはれもおどにたちこめて夕霧ふかし霜此上のつき

水鳥を

朝づく日影さすかたに水鳥のねぶりのどけき池のなかま
篝火のかげもまらみて宇治川や月もりわかす瀬々の網代木

網代の齋に

風をあらまむらたつ雲の絶間より日影ながらに霞ふるなり
枕とふ夜半の時雨のゆめなれやさめてけさ見る峯のはつ雪

雪

眞砂地のふるもたまらで淺茅生の末葉にみするけさの初雪
はれて又雪ふきまつる山風にひとむらくもる遠此まつばら

さくどても松を絶間の花のくもかゝらぬ山も雪のまろたへ
殊更にねざめの床の静けさをおもひあはする今朝のまら雪

書によてよめる

鷹狩をよめる

梢の雪なきほどになりけり山かせえろき關のまきむら
葎生にすこし残れるみちをさへ今朝うつみけり雪のやま里
雲の上にあられぬ民の歎をも手にとる鷹のみかりなるらむ

雑

星

手にとらば手にとりつべき浮雲の絶間に高きやしのかぐ哉

冬のあした

降はれし雪のあしたの長閑みて日影まばゆき四方の山此端

冬の夕べ

夕ぐれの林の鳥のこゑまげし夜のまに雪やふらむとすらむ

冬此夜

ともしびの消えて目さむる手枕に霜夜の犬の聲ぞきこゆる

富士のねを

ふじのねの雪と霞をすぐたふてたい大空のものどこを見れ

關といふ事を

夕づく日山のあなたに影おちて白きいづお雪の不二のね
よき事もすぐれば同じわし柄のせきの中道こゝろといめよ

武蔵野の書

古へのせきいづこも秋の風夜半の月のみもりわかしつゝ
不二の雪箱根の時雨ゆく雲のはては夕日のむさし野のはら

行路の市を

心とめぬゆきゝの市もうる人のことよき方に先ぞたちよる

橋を

かけてしも又中たゆる山川の橋やうき世のわさりなるらむ

角田川の月を

あととはむ鳥のねぶりも静めて月にこたふるあきの川なみ

窓の竹を

君が代の千年のかげを祈るかな竹のおきふし窓のわけくれ

曉の鳥を

きぬくのうらみにそへし鳥がねを寐覺の夢の別あどきく

蜘蛛をよめる

おさいづる鳥の八聲によしあしのみちをかれゆく曉のそら
かけそむる其一筋の誰かまゐる風をこゝろのさゝぐにのいと

やがてかへるといふ人の別によめる

旅といふ事を

夜も寒し衣かさねよかたそぎのゆきあひ近き旅のみちにも
旅とても我大君のうみやまをめぐるの外にみちあらめやも

柴野大人旅ぶつとさゝ内官なれば久しくあはざりしに

石山の古縁起うつしに侍臣などやりたるが冬に成ても歸らずいと寒き夜夢お見てければ

衾などやるとてよみてやりける歌のうち

幾年か相見ぬものをあながちに旅としきけばなほ思ふかな
石山や海ふくかせのさえぬらむ今宵重ぬるふすまもやある

日敷へば比枝の嵐に比良の雪はなき海のはりもやせむ
旅の道すがらよめる中

くむ人のたえてしもなや山の井の浅きながらに水は濁さず
名にしおふわたちの眞弓年へてもひく心なき老のふるかさ
山家の心を
なれぬるや松の嵐のふかぬ夜のすが友まつ山のえたいは

昔清水たえなばたえね一かたにむすびとむべき山の庵か
名にしおふ都の花もちりぬらむ梅が香にはふ春のやまさと
なつの日も此き端の山の霧深み朝よりたえぬ日ぐらしの聲
めさめなば軒端の山の月を見む夢をば鹿のこゑにまかせて

田家の心をよめる

たのみさへ我物ならぬ賤やもるもらぬ賤のみ秋やたのしむ
園中のみ山のけしきつくりて戯に

殊更につくりなしつるみ山こそすてぬ心のおくも見ゆらめ

松山少將君茶がまを鑄させまふが銘をかくくのふるもてといひまへば恩波亦及
于此と志るして

松風もなみのひいさも君が代の恵にもるゝこゑやなからむ
まのぶせりといふ物をふるまにすらせて

陸奥のまのぶの里の賤の男がもちりするなるさぬぞ此きぬ
用捨箱のやうなるものつくりて消息などいゝ雁がねを書ぐさ反古の落葉をかゝせて
歌をかいつけたり

月花の外おのなれもかきさゝで通はぬ雲此かりのたまづさ
おのづから程よき程に拂ひけり風にまかす庭のおち葉の

辛崎の夜雨の繪に

静けしな松の葉くらき夜の雨に波もおとせぬ志賀のから崎
老たる人の歌かいよるを

老の波よるといへど和歌の浦のたづの歩の跡ぞふりせぬ
思ふ事茂のぶるが中に

何といひ何とがさらむ昔今の君がめぐみのつゆかゝるみ
世の人に劣らじとおもふ一筋の老もへだてぬものゝふの道
言の葉のはかなき道に休らひてうき名を風に傳へずもがな

山に世をのがるゝよりも久方の空に我身をすてつべらなり
朝に道をさして夕べに死すともなごいふ心をよめどわれは

さく花よあしたの雲にまぐひなバタベの雨とふるも厭はじ
古き世を思ふといふ事を

思ふぞよ新羅くだらの國までも我日の本のなみかけし世を

住吉奉納の中

夢といふ事を 見し夢の見しにまかせて跡とはぬ老のねざめを心まづけき
佛の道といふ事を 是も其奉納の中おかりけむ

我國のひろき教のうちなればはどけの法もあるおまかせつ
ある人の母の賀に

さむさをもまらぬ惠の毛衣の千代もわするな宿のかいづる
致仕の事願ひものしたるに類なき仰を蒙りて御ゆるしなかりしかしこまりを

契りかさし月と花とにたがふとも違はじも此をきみぐ意に
月花もきみがめぐみの光よりまだ世おまらぬ色香をぞ見る

其仰の此ち執政のかたへゆくとして

思ひさや霜の板ばしふみならし月と花とをよそに見むとい

其後みづから花月を別號とせり

文政十年十一月二十あまみ五日みづから書いて定和あそに参
らせたり

樂

翁

致仕の頃より文政七年の頃迄のを聊か記しぬ柴の戸の人こそはぬ淺ぢ
ふの末葉の露も月の厭はずしのみ有けるよかなと獨ぢちしてかい留めぬ

かなじ年の長月のよる

あふぢ

春

試筆によめる

千世よばふ聲の隔てぬ草の戸や軒端の松のはるのはつかぜ
春くれどかなじ松此戸竹柱世のうきふしよそになしつゝ
朝霞たちいでて見れば誰が門も松と竹どのはるのはつかぜ

よのふりも人の心もまつ竹のみさをにならせ春のはつかぜ
竹芝の浦のみるめののどけさを千代もど祈るわが君がため
此歌いづくまきの岸よりうちながめてなむ

玉くしげふた見が浦にいづる日ハ神代のはるの光とぞ見る
この舊領によくしたる春の試筆にかわりけむ

御神忌の春 百年をふたら山の朝づく日げにもくもらぬ御代の春かな
六十のはる 春さぬとおもふ心此のどけさも耳にえたがふ軒のまつかぜ

ひ月三日の遊せし時

のどかなる軒の松風ふきそへて春に和らぐ糸たけのこゑ

子 日 風かよふことの子日の小松ばらはるの調をひきやそめまし

霞 世此人の心の空にたちそめて四方にかすめる春のいろかな

朝日かげにはふあたりハ三吉野のふりにし山の雪も霞めり

若 草 かひそめて幾かもあらぬ若菜をば飛火の野守出てつむらむ

かひたハ鹿もさちふす秋の野の是も千くさか春のわか草

早 炭 さ炭ハはたやく賤が煙にもありそふばかりもくにけるかな

鶯

京の鶯を得て庭に放つとて

手を折りて春の日敷をかぞふなる姿にかよふ初わらびかな
山里ハ花ちりなばとまちなましみやこの春のうぐひすの聲

後の世にそのハ春とふ人しわらびこハにこたへよにはの鶯

窓の鶯といふことをよめどあれハ

鶯ハたが教よりはるを去りてまなびの窓しまさきなくらむ

春の雪 花と見てまばしまざれむ待遠き櫻がえだのはるのあはゆき

残の雪 松がねにかちて積れる白雪ハ去年見しよりも寒さいるかな

いとあまかへりし夜はに

梅

を

此頃ハ寒さにやまくいをばせし老ぬる親のます世なりせば
殊さらにいとまわる身ハ惠なほかさねて袖につハむ梅が香

軒ちかき春や昔のにはひまでたもどにえめる梅のえたつゆ
ちると見し夢のゆくへの敷妙此まくらに残る風のうめが香

霞おも包みあまれる梅が香ハ風にゆるして四方につてまし
花の色にあらそひかねて明にけり梅のたちえの朧夜のつき

葛飾の里の臥龍梅をみにゆきけり若き頃駒なべて見しがその朽木の残るばかりなり

朽ちのこる老木の梅にことゝはむ汝も若木の春やいかでと

上邸の庭の梅一木あり代々めで給ひしと聞けるを聊手折りてあしゝか

代々めでし庭の一木の一枝におはくの春をかけて見るかな

西行忌に梅月といふ題旅人のこしゝか

さく梅にとめきて匂ふ春の月うときかけさへ折にあひつゝ

かぞふる此めで給ひし梅のささけるに雨のふり出ければ

梅が香も其世ゆかしき朝とでにそでもひとつの春雨ぞふる

柳を つらからず靡きもはて老青柳のわかぬすがたに春風ぞよく

雪と見し高ねの雲の色さえてやなぎの花にはるかぜぞよく

月をよめる 老がみをかこちもはてし春といへば涙の隙をかざる夜の月

ともし火をそむけても猶かげたどる霞の底の春のよれつき

曙を 霞さへまだたちなれぬ山のはな色香むなしき春のあやばの

長閑なるまたねの夢の浮橋もたえゝかゝるわけばのゝ空

夜もあけば若菜つまむと若がへる老のねざめの春の明ぼの

雨

を

うちまめる鐘の響にはるの夜の音せぬ雨のおとをさくかな

一玄はの色そふ松のもぞち葉の時雨とやいはむ春雨のそら

霞とも雲ともをうで池の面の水にあどなきはるさめぞふる

夕月のありかゝれと見えながら霞にこめて春雨ぞふる

春雨のふるともわかぬ夕まぐれのきの雲をかぞへてぞさく

花

を

たづね入る心にふかき山ぞなき野寺のかねも花にかすめり

ひとへより日毎に深き春の色を花おも見せてさくさくら哉

君が代の大宮人にあらぬ身もさくらかざして春をくらさむ

まぢをしむ人の心のどかなる花の色香のあらしならまじ

かざしても花に頭の雪ぞそふ六十路にちかき老やかくると

ちりのこる梅にあらそふ心といひとへに見えぬ花の色かな

さく花のかをりながらの松風いたが玉琴のなごりなるらむ

稍まで霞みわたりてさく花のくもまづかなり夕ぐれのをら

花櫻さきにし日よりうつせみの空しき枝の春をしぞおもふ

玉すだれかゝげし山の色ながら霞むや花のにほひなるらむ

さく花の梢えらみてあをやぎにまだ夜を残すわけぼの、空
 軒ちかき花の光にわけそめてひさかくれたる峯のよこぐも
 老ぬれば忍ぶことさへ重なりて花みるをりも袖ぬれつゝ
 雫にもはひこぼれて軒端までさくらに霞む春さめのそら
 軒端なる梢の色いさやかかて花をよそなるいりあひのかぬ
 薫さへ四方にかすみて咲く花の雲間まづけき夕づきのかげ
 おもふおのそはぬ習を春の風いつまりそめて花にふくらむ
 さくと見し去年の空目の雪の色似るべくもあらぬ花櫻哉
 さく花に向ひてもまづ思ふかな静なるよにまづかなるみを

上野の彼岸櫻の盛をみてよめる

来て見れば吾妻の比えの山も今かさねあたる花のまら雪
 木々の皆枝もたゞの花の雪つもらぬ松にはるかぜぞふく
 み吉野の吉野の山もかばかりのふかき色香の雲やかゝれる
 その御山のかぞいの御寺にまうでて
 なき人の面影うかぶ花の色も遠くへだてゝかすむはるか

隅田川の關屋のさとむうしならせ給ひしことを

花にそゝぐ涙とこむる袖もなし關屋の里の名のみばかりに

飛鳥山の花を見て

大かたの花をのどかにみる人も御代の恵のえるやまらずや
 飛鳥山あすどないひそけふこそずばさえぬ雪とや花もちるらむ
 不二筑波花のこのまにはの見えて遠近かすむ春のやまかせ
 その山口になをりをなど札たてしを

折れども折られましやの大君の代々の恵の山さくらばな
 花を折りて送りけるに歌よみてこしゝかばよみてやりける

言の葉の露かゝれどて手折りにしかひもありける山櫻かな
 花遅き年に 春もやゝ末の松山なみてえぬさくらむ花をまつとせしまに
 花のちるを 青柳の糸よりかけてちる花をぬきとむべき春かぜもがな

うらむべき行方たどらむ夕月もかすむあらしの花のまら雪
 春風のさそふまにゝ散りゆくいぬに歸るともみえぬ花哉
 けさ見れば梢の雲も中たえて花にあどある夜半のやまかせ

庭白きまさをわか老花ちりて楳にかはるありわけのつき
 さぞふ風あるも嬉しくおのづからちらば恨や花にかゝらむ
 よの中此こと見り見せて散る花に是もならひと春風ぞふく
 さく花を心ひとつおをしむかな一人がための春ならねども
 さくもちるもおなじ春風春の雨うらみむもの櫻なりけり
 どことはの松の調もちる花もおのがさまく春かぜぞふく
 山のはの雪げの空の色さえて日かげのかたにあそぶ糸ゆふ
 糸 遊 花山のむかしかはらぬ武藏野やのどけき御代に駒いばふ聲
 駒の繪に 故里のまつを残しむに比ぶればうらみかねたる春の雁がね
 歸 雁 を かながちに花を見捨つる雁のうし月をたのむの心なりども
 呼 子 鳥 さゝまらぬ身いかにせむ呼子鳥聲の雲井にありとばかりに
 苗 代 ちりうかぶ櫻山吹せさいれてなはしろにはふ小田の春かぜ
 桃の木かげにて酒くみつゝよめる

花の名のもし、囀のどりの音のかずにも酔をすゝめてしがな
 藤をよめる 手にとらぬ桂の花やこれならむ木末にたかき松のふぢなみ

千世の春もかたみにこそい契るらめ松の末お花此藤なみ
 やよひ此つごもりにかありけむ
 ひきどめむ霞の袖もさえてゆくはるの別のきぬくのそら

夏

衣がへをよめる

たちかふる袖の上にも世の人のこゝろの花の色のみえけり
 よの中の花ぞめ衣すてし身いけふとてかへむ袖だにもおし
 花衣かへてもおなじえろたへの袂おはる此なごりをを見る
 新 樹 を こきませし花も柳のあさ緑いとよりかよふにはのあさかせ
 花の雲さえて青葉のそらの色にうつればかはる風も涼しき
 蓬生の露もひとつのふかみ草げに草の戸にをしきいろかな
 むら鳥なくだにあかぬ月の夜に山はとゞぎす一こゑもがな
 時鳥をよめる かなゆけば松のあらしもむらさめの聲するかたになく郭公
 ありあけをながめてけりお郭公まつ夕暮のつらさながらに